

第三十三号勅令  
 第二十四号  
 中追加  
 本欄

櫛		檜		榎		松		銀杏		姫子松	
二合五勺以下	二升以下	五升	一斗	二斗	二斗五升	三斗	五斗	五斗	五斗	五斗	五斗
一〇〇	二〇〇	三〇〇	五〇〇	一〇〇〇	一五〇〇	二〇〇〇	二五〇〇	三〇〇〇	三〇〇〇	三〇〇〇	三〇〇〇

第十四類 度量衡器ノ制限其ノ製作修理及販賣免許并檢定

千五百五十一

麻		布		金	
五十メートル以下	鯨尺二尺未満	鯨尺三尺以下	鯨尺六尺以下	三尺以下	十八尺以下
四〇〇	〇・五	一〇〇	四〇〇	二・五	五〇〇
					六十尺以下
					百尺以下
					百五十尺以下
					曲リ尺長枝二尺以下
					曲リ尺長枝三尺以下
					曲リ尺長枝半メートル以下
					曲リ尺長枝一メートル以下
					半メートル以下
					五〇〇
					八〇〇
					三・五
					五〇〇
					六〇〇
					八〇〇
					五〇〇
					二五〇
					五〇〇
					五〇〇
					五〇〇

千五百五十二



第三十一年勅令  
第三百二十六號  
ノ以テ  
ノ中  
ノ改正  
ノ標  
ノ秤

秤		桿		秤		臺		秤	
	其ノ他ノモノ								二〇〇〇
	五十貫以下								五〇〇〇
	百五十貫以下								一〇〇〇〇
	以上百貫マテヲ増ス毎ニ五十錢ヲ加フ								五〇〇〇
	二百「キログラム」以下								一〇〇〇〇
	五百「キログラム」以下								一〇〇〇〇
	以上三百「キログラム」マテヲ増ス毎ニ五十錢ヲ加フ								一〇〇〇〇
	二貫以下								八〇〇
	二貫ヲ超ヘ十貫未滿								一〇〇〇
	十貫以上三十貫マテ								二〇〇〇
	以上十貫マテヲ増ス毎ニ五錢ヲ加フ								二〇〇〇
	七「キログラム」以下								八〇〇
	七「キログラム」ヲ超ヘ百「キログラム」マテ								二〇〇〇
	以上十「キログラム」マテヲ増ス毎ニ五錢ヲ加フ								二〇〇〇

第十條 第八條ノ免許料及第九條ノ檢定料ハ「登記印紙」ヲ以テ納ムヘシ

第十一條 度量衡器ノ製作、修葺又ハ販賣ノ免許ヲ受ケタル者ハ左ノ身元保證金ヲ納ムヘシ(勅令第三十一年  
百二十六號ヲ以テ  
衡器製作ノ項改正)

- 度量衡器製作 金三百圓
- 量器製作 金三百圓
- 衡器製作 金五百圓
- 但シ桿秤ノミノ製作ハ金三百圓トス
- 度量衡器修葺 金二百圓
- 度量衡器販賣 金百圓

附則

第十二條 本令ハ明治三十年五月一日ヨリ施行ス  
但シ本令第一條中量器ノ形狀、物質、種類、寸法、容積、第三條中量器ノ容量、寸法ノ公差及第四條  
中玻璃製量器ノ目盛ノ最小定限ニ關スル規程ハ明治三十一年一月一日ヨリ施行ス  
第十三條 本令施行以前檢定ヲ受ケタル度量器、量器ノ檢定ニ付テハ明治三十五年十二月三十一日  
ヲ明治二十四年勅令第七十七號ノ規程ヲ適用ス

○貨幣法 明治三十年三月  
法律第十六號

第十四條 貨幣法

千五百五十四

沿革略記

明治元年閏四月新古金銀并銅鑄價位及ヒ外國貨幣ノ價位ヲ定ム○同年十月古金銀引換額ヲ定ム●二年二月新  
貨幣鑄造ヲ造幣局ヘ命セラル●七年三月第三十四號布告ヲ以テ貿易銀ノ模樣ヲ改正ス●八年二月第三十  
五號布告ヲ以テ壹圓銀ノ盤目ヲ増シ貿易銀ト唱ヘ表裏ノ模樣等ヲ改正シ十一月十二月ニ至リ第三十五號布告  
ヲ以テ前令ノ鑄造ヲ停メ七年第三十四號布告ノ貿易壹圓銀ヲ再鑄發行ス○同年六月第八號布告ヲ以テ新貨  
條例ヲ改正シ貨幣條例ト稱ス●三十年三月法部第十六ヲ以テ貨幣法ヲ制定シ從前ノ法令ニシテ本法ニ抵觸ス  
ルモノハ廢止ス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル貨幣法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

貨幣法

第一條 貨幣ノ製造及發行ノ權ハ政府ニ屬ス

第二條 純金ノ量目二分ヲ以テ價格ノ單位ト爲シ之ヲ圓ト稱ス

第三條 貨幣ノ種類ハ左ノ九種トス

金貨幣

二十圓

十圓

五圓

銀貨幣

五十錢

二十錢

十錢

白銅貨幣

五錢

青銅貨幣

一錢

五厘

第四條 貨幣ノ算則ハ總テ十進一位ノ法ヲ用井一圓以下ハ一圓ノ百分ノ一ヲ錢ト稱シ十分ノ一ヲ厘ト稱ス

第五條 貨幣ノ品位ハ左ノ如シ

一 金貨幣 純金九百分參和銅一百分

二 銀貨幣 純銀八百分參和銅二百分

三 白銅貨幣 「ニッケル」二百五十分參和銅七百五十分

四 青銅貨幣 銅九百五十分錫四十分亞鉛十分

第六條 貨幣ノ量目ハ左ノ如シ

一 二十圓金貨幣 四又四分四厘四毛四(十六)「グラム」(六六六五)

二 十圓金貨幣 二又二分二厘二毛二(八)「グラム」(三三三三)

三 五圓金貨幣 一又一分一厘一毛一(四)「グラム」(一六六六)

四 五十錢銀貨幣 三又五分九厘四毛二(十二)「グラム」(四七八三)

五 二十錢銀貨幣 一又四分三厘七毛七(五)「グラム」(三九一四)

六 十錢銀貨幣 七分二厘八毛八(二)グラム「六九五五」  
 七 白銅貨幣 一匁二分四厘四毛二四(一)グラム「六六五四」  
 八 一錢青銅貨幣 一匁九分零厘零毛八(七)グラム「二二八〇」  
 九 五厘青銅貨幣 九分五厘零毛四(三)グラム「五六四〇」  
 第七條 金貨幣ハ其ノ額ニ制限ナク法貨トシテ通用ス銀貨幣ハ十圓マテ白銅貨幣及青銅貨幣ハ一圓マテヲ限リ法貨トシテ通用ス  
 第八條 貨幣ノ形式ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム  
 第九條 金銀貨幣純分ノ公差ハ金貨幣ハ一千分ノ一銀貨幣ハ一千分ノ三トス  
 第十條 金銀貨幣量目ノ公差ハ左ノ如シ  
 一 金貨幣二十圓ハ每片八毛六四(〇)グラム「〇三三四〇」一千枚毎ニ八分三厘(三)グラム「一一二五〇」十圓ハ每片六毛零五(〇)グラム「〇二二六九」一千枚毎ニ六分二厘(二)グラム「三三二五〇〇」五圓ハ每片四毛三三(〇)グラム「〇一六二〇」一千枚毎ニ四分一厘(一)グラム「五三七五〇」トス  
 二 銀貨幣ハ各種共每片二厘五毛九二(〇)グラム「九七二〇」五十錢銀貨幣ハ一千枚毎ニ一匁二分四厘(四)グラム「六五〇〇〇」二十錢銀貨幣ハ一千枚毎ニ八分三厘(三)グラム「一一二五〇」十錢銀貨幣ハ一千枚毎ニ四分一厘(一)グラム「五三七五〇」トス  
 第十一條 金貨幣ノ通用最輕量目ハ二十圓金貨幣四匁四分二厘(十六)グラム「五七五〇」十圓金貨幣

三十一年法律  
第五號ヲ以テ  
引換ハ同年七  
月一日限リト  
ス

三十一年勅令  
第三百三十八  
號ヲ以テ三十八  
年四月一日以  
前ニ通用シテ  
廢止ス

二匁二分一厘(八)グラム「二二八七五」五圓金貨幣一匁一分零厘五毛(四)グラム「一四三八」トス  
 第十二條 金貨幣ニシテ磨損ノ爲通用最輕量目ヲ下ルモノ及銀貨幣白銅貨幣又ハ青銅貨幣ニシテ著シク磨損シタルモノ其ノ他流通不便ノ貨幣ハ其ノ額面價格ヲ以テ無手数料ニテ政府ニ於テ之ヲ引換フヘシ  
 第十三條 貨幣ニシテ模様ノ認識シ難キモノ又ハ私ニ極印ヲ爲シ其ノ他故意ニ毀傷セリト認ムルモノハ貨幣タルノ效用ナキモノトス  
 第十四條 金地金ヲ輸納シ金貨幣ノ製造ヲ請フ者アルトキハ政府ハ其ノ請求ニ應スヘシ  
 附則  
 第十五條 從來發行ノ金貨幣ハ此ノ法律ニ依リ發行スル金貨幣ノ倍位ニ通用スヘシ  
 第十六條 從來發行ノ一圓銀貨幣ハ金貨幣一圓ノ割合ヲ以テ政府ノ都合ニ依リ漸次之ヲ引換フヘシ  
 前項引換ノ結了マテハ金貨幣一圓ノ割合ヲ以テ無制限ニ法貨トシテ其ノ通用ヲ許シ通用禁止ノ場合ニ於テハ六箇月以前ニ勅令ヲ以テ之ヲ公布スヘシ通用禁止ノ翌日ヨリ起算シ滿五箇年内ニ引換ヲ請求セサルトキハ爾後金地金トシテ取扱フヘシ  
 第十七條 從來發行ノ五錢銀貨幣及銅貨幣ハ從前ノ通り通用スヘシ  
 第十八條 此ノ法律發布以後ハ一圓銀貨幣ノ製造ヲ廢ス但シ右期日以前ニ政府ニ輸納シタル銀地金ハ此ノ限ニ在ラス

第十九條 此ノ法律ニ抵觸スル從前ノ法令ハ總テ之ヲ廢止ス  
第二十條 此ノ法律ハ第十八條ヲ除ク外明治三十年十月一日ヨリ施行ス

○貨幣ノ形式明治三十年四月勅令第四百四十四號

朕貨幣ノ形式ヲ定ムルノ件ヲ裁可シ盜ニ之ヲ公布セシム

貨幣法第八條ニ依リ貨幣ノ形式ヲ定ムルコト左ノ如シ

(形式略之)(三十一年勅令第二百七十七號ヲ以テ補助銅貨ヲ補助青銅貨ニ改メ一錢及五厘ノ形式ヲ改ム)

○通用貨幣鑄解及毀傷スルヲ禁ス明治十一年一月第二號布告

通用貨幣ヲ鑄解シ又ハ其體面ヲ毀傷スル等其體面ヲ流通ノ用ヲ闕キ候所爲一切不相成候條此旨  
布告候事

○舊銅貨ノ品位ヲ定ム明治四年十二月布告

舊銅貨之儀去ル辰年定價被仰出候處今般新貨御發行ニ付各種比較商量ノ上當分左ノ通品位被相  
定候條其旨相心得新貨幣并「金札」其取交聊無差支通用可致事

(新貨幣並金札之比較略之)

(舊銅貨品位圖面略之)

右ハ本位ノ新貨幣ト新銅貨トノ比例ニ依テ定ムルカ故ニ一種又ハ數種ヲ併セ用ユルトモ一口ノ  
取遣リ一圓ノ高ヲ限リ用ユヘシ

但壹圓ノ高ヲ越レハ是ヲ拒ムノ權アルヘシ尤相互ノ便宜ニ依リテ取遣リスル時ハ右制限ニ不  
拘勝手タルヘシ

右之通相定候事

○舊鐵錢ノ價位ヲ定ム明治五年九月第二百八十三號布告

新貨幣御發行ニ付去辛未十二月中新銅貨ノ定價被仰出候處猶今般舊鐵錢ノ價位當分左ノ通被相  
定候條其旨相心得新貨幣並「金札」其取交聊無差支通用可致事

(舊鐵錢價位圖面略之)

右ハ新貨幣トノ比較ニヨリテ之ヲ定ム尤モ鐵錢一種或ハ兩種ヲ併セ用フルモ一口ノ取遣ニ新貨  
五拾錢之高ヲ限リ用フヘシ

但新貨五拾錢之高ヲ越レハ是ヲ拒ムノ權アルヘシ然レトモ相互ノ便宜ニヨリテ取遣スル時ハ  
右制限ニ拘ハラス勝手タルヘシ

右之通相定候事

○造幣規則明治三十年四月  
勅令第三百三十八號

沿革略記 明治二年二月造幣局ヲシテ新ニ金銀銅貨幣ヲ鑄造セシム○同年同月東京金銀座ヲ廢ス○四年五月布告ヲ以テ  
造幣規則ヲ制定ス○八號六月第八號布告ヲ以テ前令ヲ改正ス○十一號七月大藏省甲第二十四號布達ヲ以  
テ精製分析所規則ヲ定ム○十二號十月大藏省甲第一號布達ヲ以テ造幣地金受取方規則ヲ定ム○十六號五月第十八號  
布告ヲ以テ八年第八號布告ノ造幣規則ヲ廢止ス○同號五月第十五號布達ヲ以テ廢ニ大藏省布達スル所ノ甲第二十四  
號甲第一號規則ヲ廢シ造幣規則ヲ定ム○三十年四月勅令第三百三十八號ヲ以テ前則ヲ改正ス

朕造幣規則ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

造幣規則

- 第一條 金貨幣ノ製造ヲ請ハントスル者ハ金地金ヲ造幣局ニ輸納スヘシ
- 第二條 貨幣製造ノ爲メ受取ル地金ハ品位一千分中金九百九十以上ニシテ其ノ含有物ノ性質造幣ニ  
障害ナキモノニ限ル但シ含有物銅ノミナルトキハ金八百九十八以上トス(三十二年勅令第三  
十六號ヲ以テ改正)
- 第三條 貨幣製造ノ爲メ受取ル地金ハ其ノ量目一百匁以上トス但シ金銀地金精製及品位證明規則ニ  
依リ貨幣ノ製造ヲ請フトキハ此ノ限ニアラス
- 第四條 輸納ノ地金ハ輸納人又ハ其ノ代理者ヲ立會ハシメ之ヲ秤量シテ預リ證書ヲ交付スヘシ
- 第五條 地金ノ品位及性質ハ試驗ノ上之ヲ定ム
- 第六條 地金ノ試驗了リタルトキハ勘定書ニ試驗表ヲ添ヘ之ヲ輸納人ニ送付スヘシ
- 第七條 輸納人前條書類ノ送付ヲ受ケ異議ナキトキハ預リ證書ヲ提出シテ貨幣拂渡證書ヲ請求スヘ  
シ但シ異議アル者ハ三日以内ニ其ノ旨ヲ申告スヘシ此ノ期間内ニ異議ノ申告ヲ爲ササルトキハ承  
諾シタルモノト見做スヘシ

- 第八條 輸納人前條ニ依リ異議ノ申告ヲ爲シタルトキハ其ノ輸納地金ヲ返付スヘシ此ノ場合ニ於テ  
ハ手数料トシテ地金四匁及其ノ端數毎ニ金三圓ヲ徵收ス
  - 第九條 輸納地金ノ溶解減ハ輸納人ノ負擔トス
  - 第十條 輸納地金ノ取扱ハ一般休暇日ノ外三月十六日ヨリ同三十一日マテノ間之ヲ停止ス但シ臨時  
停止ヲ要スルトキハ大藏大臣之ヲ告示ス
- 附 則
- 本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス

○金銀地金精製及品位證明規則明治三十年四月  
勅令第三百三十九號

朕金銀地金精製及品位證明規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

金銀地金精製及品位證明規則

- 第一條 造幣局ハ金銀地金ノ精製又ハ品位證明ヲ請フ者アルトキハ本規則ノ定ムル所ニ依リ其  
ノ精製又ハ證明ヲナスヘシ
- 第二條 精製又ハ品位證明ノ爲メ輸納スル地金ハ品位一千分中金銀七百五十以上量目一百匁以  
上ノモノニ限ル但シ金銀混合地金ナルトキハ金銀合シテ七百五十以上トス
- 第三條 輸納ノ地金ハ輸納人又ハ其ノ代理者ヲ立會ハシメ之ヲ秤量シテ預リ證書ヲ交付スヘ  
シ

第四條 品位證明ノ爲メ輸納シタル地金ハ定型塊ト爲シ其ノ品位ヲ證明シ之ヲ輸納人ニ交付ス  
ヘシ

金銀混合地金又ハ精製スルニアラサレハ定型塊ト爲シ難キ地金ノ品位證明ヲ請フ者アルトキ  
ハ精製ノ上品位ヲ證明ス

第五條 造幣局ニ於テ製造スル定型塊ハ金銀各一百匁以上トス

第六條 精製ノ爲メ輸納シタル地金ノ品位證明ヲ請ヒ又ハ其ノ金分ヲ以テ貨幣ノ製造ヲ請ハン  
トスル者ハ輸納ノ際其ノ旨申告スヘシ

第七條 輸納シタル地金試験ノ後精製又ハ品位證明ヲ爲サスシテ返付ヲ要スルトキハ手数料ト  
シテ地金一塊毎ニ金二圓ヲ徴收ス

第八條 輸納地金ノ熔解減ハ輸納人ノ負擔トス

第九條 輸納地金ノ品位證明ヲ爲シタルトキハ手数料トシテ金ハ四匁又又ハ其ノ端數毎ニ銀ハ  
八匁又又ハ其ノ端數毎ニ各金二圓ヲ徴收ス(三十二年勅令第三十七號  
ヲ以テ三圓ヲ二圓ニ改ム)

第十條 輸納地金ノ精製ヲ爲シタルトキハ左ノ割合ニ依リ手数料ヲ徴收ス

一千分中金銀九百五十以上 純金一百匁ニ付 金七十六錢

純銀一百匁ニ付 金二十錢

一千分中金銀九百以上 純金一百匁ニ付 金八十錢

純銀一百匁ニ付 金二十三錢

第三十二年勅令  
第三十六號  
第三十七號  
ノ内分ニ付  
手数料ハ  
徴收ス

一千分中金銀八百五十以上 純金一百匁ニ付 金九十一錢

純銀一百匁ニ付 金二十七錢

一千分中金銀八百以上 純金一百匁ニ付 金一圓

純銀一百匁ニ付 金三十二錢

一千分中金銀七百五十以上 純金一百匁ニ付 金一圓十錢

純銀一百匁ニ付 金三十八錢

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス

○ 通用禁止ノ貨幣紙幣引換期限 明治二十三年二月  
法律第十三號

朕通用ヲ禁止シタル貨幣紙幣引換ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

政府發行ノ補助貨幣及紙幣ニシテ通用ヲ廢止シタルモノハ其廢止ノ翌日ヨリ起算シ滿五箇年内ニ引  
換ヲ請求セサレハ期滿免除トシテ政府ハ其引換義務ヲ免ル、モノトス但明治二十年六月三十日ヲ以  
テ通用ヲ廢止シタル拾錢紙幣ハ本法發布ノ日ヨリ起算シ滿三年ヲ以テ期滿免除ノ期限トス

第三十二年法律  
第六十一號  
政府發行ノ紙  
幣ハ三十二年  
十二月三十一  
日限リ通用ヲ  
廢止ス



紙幣漸次金貨ニ交換明治十八年一月  
第十四號布告

政府發行ノ紙幣ハ來明治十九年一月ヨリ漸次金貨ニ交換シ其交換シタル紙幣ハ之ヲ消却スヘシ  
(三十年法律第十九號ヲ  
以テ銀貨ヲ金貨ニ改ム)

但交換ノ手續ハ「大藏卿」之ヲ定メ日本銀行ヲシテ其事務ヲ取扱ハシムヘシ

○贋造金銀銅貨紙幣等取扱規則明治九年四月  
第五十七號布告

銀行又ハ爲替方又ハ兩替屋又ハ官廳ニ於テ備入候鑑定人等金銀銅貨紙幣ヲ鑑定ノ節贋造品取扱規則  
左ノ通相定候條此旨布告候事

贋造金銀銅貨紙幣等取扱規則

第一條 新金銀銅貨紙幣等贋造品ハ詳ニ其原由及持主ノ宿所姓名ヲ尋ネ其面前ニ於テ斷截シ速ニ其  
最寄「警察出張所」或ハ「屯所」或ハ區戸長ニ差出シ其頭末ヲ申立ツヘシ若シ官廳ニ關スルハ該廳  
ヨリ警察官署ニ通知スヘシ

但持主立會ハサル時ハ必ス代理人ヲ出サシムヘシ遠隔ノ地ヨリ遞送シ來レル者ハ立會人ヲ取リ  
テ之ヲ斷截シ速ニ遞送主ヘ報告スヘシ

第二條 鑑定ヲ誤リ正貨紙幣ヲ斷截シタル時ハ改人ヨリ持主ヘ其斷截シタル正貨紙幣ヲ其同等ノ品  
ト引換相渡シ其斷截シタル紙幣ハ事由ヲ詳記シテ管轄廳ヘ引換ヲ乞フヘシ

第三條 若シ正贋定メ難キモノ有之節ハ其原由及持主ノ宿所姓名ヲ分明ニ記載シ持主ノ面前ニ於テ  
其品ヲ封シ持主ヲシテ之ニ封印セシメ鑑定者ヨリ管轄廳ヘ差出スヘシ然ル時ハ該廳ニ於テ詳細吟  
味ノ上全ク正品ニシテ其製充分ナラス通用ノ際人民ノ疑ヲ生スヘキモノハ直ニ持主ヘ引換渡スヘ  
シ其贋造品ハ第一條ニ依ル

第四條 古金銀貨幣贋造品ハ持主又ハ代理人ノ面前ニ於テ斷截シ直ニ其持主又ハ代理人ヘ還付スヘ  
シ

第五條 贋造ヲ知ルト雖モ斷截セスシテ持主ニ還付シ又ハ申立ヲ等閑ニスル者ハ相當ノ處罰ヲ爲ス  
ヘシ

第二十一號勅令  
以テ七十三號  
債及手利元金  
仕拂及手利元  
ノ消滅汚染債  
其外他債  
取扱ハ明治第  
十九號勅令第  
六號整理公  
債條例ニ依ル

○第十五類 公債

○新舊公債證券發行條例 明治八年五月  
第九十五號布告

沿革略記 明治六年三月第百十五號布告ヲ以テ新舊公債證券發行條例ヲ制定ス●八年五月第九十五號布告ヲ以テ前令ヲ  
改正ス是レ現行法ナリ

明治六年三月第百拾五號及同七年六月第六拾六號布告新舊公債證券發行條例別冊ノ通改定條此旨布告候事

(別冊)

新舊公債證券發行條例

明治五年申年迄ノ間從來舊藩藩縣ニ於テ内國人民ヨリノ連債ヲ收テ政府ノ公債トシ之ヲ大藏省ニ引受ケ其債主ヘハ各此公債證券ヲ交付シ定期ヲ越テ之ヲ償却スルニ付政府ニ於テ制定シタル條々左ノ如シ

第一條 新舊公債ノ區別及ヒ證券ノ種類並ニ記號ノ區別等ヲ明ニス

第一節 弘化元甲辰年ヨリ慶應三丁卯年迄舊藩藩縣ニ於テ借用シタルモノヲ舊公債ト稱シ明治元戊辰年太政更始以後明治四辛未年七月廢藩迄及明治五壬申年迄ノ間舊藩藩縣ニ於テ借用シタルモノヲ新公債ト稱スヘシ

第二節 新舊公債トモ各其高ヲ五分シテ第一第二第三第四第五トシ證券面ノ金高ヲ五百圓三百圓壹百圓五拾圓貳拾五圓ノ五種ニ區別スヘシ

第三節 新公債證書ハ向後抽籤ノ方法ヲ以テ其元金ヲ償却スヘキニ付便宜ノ爲メ四十七部分ニ別テ  
(スルハ)四十七字ノ記號ヲ證書面ニ命名スヘシ

第二條 新公債償却ノ年度及ヒ  
利息ノ割合ヲ明ニス

第一節 舊公債ハ無利息ニシテ元金ハ明治五年壬申ヨリ明治五十四年迄五十ケ年賦トシ其年ノ拂方  
ニ當リタル賦金ヲ毎年十二月一日ヨリ同十五日迄ノ間ニ之ヲ拂渡スヘシ

第二節 新公債ハ利息付ニシテ明治八年ヨリ明治二十九年迄二十二年ノ間ヲ限リ大藏省ノ都合ニヨリ  
毎年或ハ隔年ニ抽籤ノ方法ヲ以テ其年ニ拂戻スヘキ證書ノ記號ヲ公定シ其割合ニ隨テ之ヲ拂戻ス  
ヘシ其利息ハ年々元高ノ百分ノ四トシ明治五年壬申ヨリ明治二十九年迄毎年六月一日ヨリ十五日  
迄十二月一日ヨリ十五日迄ノ間ニ之ヲ拂渡スヘシ  
本文總テ其金額ハ大藏省ノ都合ニ依リ(九年第五十號布告ヲ以  
シテ)金銀貨又ハ紙幣ヲ以テ之ヲ下渡スヘシ(九年第五十號布告ヲ以  
テ)毎年ノ下六月以下ノ  
加フ)

但明治八年ヨリ抽籤法ヲ以テ元金ヲ拂戻ニ當リテハ年四分ノ利息月割ヲ以テ右抽籤法行ヒシ月  
迄ノ分下ケ渡スヘシ

第三條 (二十一年勅令第七十  
三號ヲ以テ削除ス)

第四條 (二十一年勅令第七十  
三號ヲ以テ削除ス)

第五條 新公債證書ノ  
般ノ手續ヲ明ニス

第一節 (二十一年勅令第七十三  
號ヲ以テ本節ヲ削除ス)

第二節 (二十一年勅令第七十三  
號ヲ以テ本節ヲ削除ス)

第三節 (二十一年勅令第七十三  
號ヲ以テ本節ヲ削除ス)

第四節 (二十一年勅令第七十三  
號ヲ以テ本節ヲ削除ス)

第五節 凡ソ公債元金位ニ利賦金拂渡ノ際其期日ヲ失シテ受取方申出テス其拂渡スヘキ年ノ翌年ヨ  
リ向五ケ年ヲ過クルルハ之ヲ償還セサルヘシ  
(十二年第二十六號布告ヲ以テ但書共追加シ二十一年勅令第七  
十三號ヲ以テ一切以下五十七字ヲ之ヲ償還セサルヘシト改ム)

但起業公債證書(記名無記名)モ本節ニ準ス  
(二十一年勅令第七十三號ヲ以テ  
以テ未文三十二字ヲ削ル)

第六條 (二十一年勅令第七十三號ヲ以テ  
本條ヨリ第十一條マテ削除ス)

第七條

第八條

第九條

第十條

第十一條

第十二條

第一節 政府ノ都合ニヨリテ要用ノ事アレハ利息及償却年限ヲ除クノ外此條例ヲ増補シ又ハ之ヲ改  
正スルコトアルヘシ

第二節 右増補改正等アレハ速ニ其由ヲ世上ニ公告スヘシ  
右之通相定候事

(附録圖面略之)

第七十一號勅令  
 以テ及利  
 債權ノ  
 仕積手  
 ノ消滅  
 其ハ明  
 似テハ  
 十九年  
 依  
 コトハ  
 例ニ  
 依  
 公

○金祿公債證書發行條例明治九年八月  
 家祿賞典祿ノ儀永世一代或ハ年限等ヲ以テ給與有之候處其制限ヲ改メ來明治十年ヨリ別紙條例之通  
 公債證書ヲ以テ一時ニ下賜候條此旨布告候事

(別紙)

金祿公債證書發行條例

第一條 華士族及平民トモ各自ノ家祿賞典祿給與ノ制限ヲ改メ一時ニ之ヲ下渡スコト、爲シ以テ公債證書ヲ付與スヘシ

一 永世祿ノ者ヘハ

金祿元高賞典祿アルモノハ家  
 祿ニ合計シテ高トス

金額	年限
七萬圓以上	五ヶ年分
六萬圓以上	五ヶ年二分五厘分
五萬圓以上	五ヶ年分
四萬圓以上	五ヶ年七分五厘分
三萬圓以上	六ヶ年分

三萬圓未滿	六ヶ年二分五厘分
二萬圓以上	六ヶ年分
一萬圓以上	六ヶ年七分五厘分
七千五百圓以上	七ヶ年分
五千圓以上	七ヶ年二分五厘分
二千五百圓以上	七ヶ年分
千圓以上	七ヶ年分

右一ヶ年五分ノ利子ヲ給ス

千圓未滿	七ヶ年七分五厘分
九百圓以上	八ヶ年分
八百圓以上	八ヶ年二分五厘分
七百圓以上	八ヶ年分
六百圓以上	八ヶ年七分五厘分
五百圓以上	九ヶ年分
四百五十圓以上	

二十六年度大藏省告示第十三號以テ六分利付金銀公債悉皆償還ノ旨ヲ示ス

二十四年度大藏省告示第二十七號以テ七分利付金銀公債悉皆償還ノ旨ヲ示ス

四百五十圓未滿	九ヶ年二分五厘分
四百圓以上	
四百圓未滿	九ヶ年半分
三百五十圓以上	
三百五十圓未滿	九ヶ年七分五厘分
三百圓以上	
三百圓未滿	十ヶ年分
二百五十圓以上	
二百五十圓未滿	十ヶ年二分五厘分
二百圓以上	
二百圓未滿	十ヶ年半分
百五十圓以上	
百五十圓未滿	十一ヶ年分
百圓以上	
百圓未滿	十一ヶ年半分
七十五圓以上	
七十五圓未滿	十二ヶ年分
五十圓以上	
五十圓未滿	十二ヶ年半分
四十圓以上	
四十圓未滿	十三ヶ年分
三十圓以上	
三十圓未滿	十三ヶ年半分
二十五圓以上	
二十五圓未滿	十四ヶ年分
二十圓以上	
二十圓未滿	
十五圓以上	
十五圓未滿	
十圓以上	
十圓未滿	
五圓以上	
五圓未滿	
二圓以上	
二圓未滿	
一圓以上	
一圓未滿	
五十圓未滿	
五十圓以上	
四十圓未滿	
四十圓以上	
三十圓未滿	
三十圓以上	
二十圓未滿	
二十圓以上	
十圓未滿	
十圓以上	
五圓未滿	
五圓以上	
二圓未滿	
二圓以上	
一圓未滿	
一圓以上	

右一ヶ年七分ノ利子ヲ給ス

一終身祿ノ者ハ

右永世祿年限十分ノ五ヲ給ス

但利子ハ永世祿ノ割合ト同シ

一年限祿ノ者ハ

十一年以上ノ者ハ右永世祿年限十分ノ四ヲ給ス

十年未滿ノ者ハ右永世祿年限十分ノ三五ヲ給ス

八年以上

八年未滿ノ者ハ右永世祿年限十分ノ三ヲ給ス

六年迄

六年未滿ノ者ハ右永世祿年限十分ノ二五ヲ給ス

四年迄

四年未滿ノ者ハ右永世祿年限十分ノ二ヲ給ス

三年迄

三年未滿ノ者ハ右永世祿年限十分ノ一五ヲ給ス

二年ノ者ハ右永世祿年限十分ノ一五ヲ給ス

但利子ハ永世祿ノ割合ト同シ

第二條 此公債證書ノ利子下渡シハ明治十年分ハ十一月翌年五月ニ相渡シ以後之ニ準シ年々兩度ニ下渡ス

但(十一)年第二十六號布告ヲ以テ但書ヲ追加シ十二年第二十六號(號)布告ヲ以テ改正シ二十一年勅令第七十三號ヲ以テ削除ス

第三條 家祿賞典祿元高ヲ付與スル年限ニヨリテ利子ノ差異ヲ生スル元高ニ向テ公債證書ヲ付與

ニハ制限左ノ如シ

第一條

一 金壹萬圓 家祿賞典祿合高

此六ヶ年年分金六萬五千圓此公債證書ノ利子一ヶ年五歩金三千二百五十圓ト成ル

一金九千九百圓 家祿賞典祿合高

此六ヶ年年分五厘分金六萬六千八百二十五圓此公債證書ノ利子一ヶ年五歩金三千三百四十

一圓貳拾五錢トナル

右比較九千九百圓ノ方利子九十一圓廿五錢ノ過ト成ル然ル時ハ壹萬圓ノ利子金額ニ超過セサルヲ

以テ制限トナス故ニ九十一圓廿五錢ヲ引去リ利子三千二百五拾圓ニ適當スル公債證書ヲ下渡ヲ以

テ規則トス其他右ニ類似ノ件ハ皆之ニ準ス

第四條 此公債證書ハ利子ノ差ニヨリ區別アリト云モ其發行スル種類ハ左ノ如シ

五圓 十圓 廿五圓 五十圓 百圓

三百圓 五百圓 千圓 五千圓

第五條 前條公債證書ヲ付與スルハニ當リテ公債證書ニ未滿ノ端金ハ都テ通貨ニテ相渡スヘシ

第六條 此公債證書ノ元金ハ五ヶ年間之ヲ据置キ六ヶ年目ヨリ大藏省ノ都合ニ因リ毎年抽籤ノ方法

ヲ以テ之ヲ消却シ都合三十ヶ年間ニ悉皆之ヲ消却スヘシ

第七條 此公債證書發行ニ付テノ順序其外トモ此條例外ノ事件ハ都テ新舊公債證書發行條例ノ通り

タルト心得ヘシ

○家祿賞典祿處分法明治三十一年四月

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル家祿賞典祿處分法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
家祿賞典祿處分法

第一條 明治三年九月十日太政官布告藩制施行以後家祿賞典祿ヲ有シタル者其ノ家名承繼人ニシ

テ明治九年八月太政官第百八號布告及同年十二月太政官第百五十二號布告施行ノ際其ノ祿高ニ對

スル全部ノ給與ヲ受ケサル者若ハ相當額ノ給與ニ不足アル者明治四年七月二十四日祿高ニ關スル

太政官布告ニ依リ繼承シタル者其ノ繼承以前ニ係ル藩制施行以後ノ祿高ニ錯誤アルト

キハ本法施行ノ日ニ於テ其ノ本人又ハ其ノ家名承繼人ニ限リ其ノ給與未濟額ヲ明治九年八月太政

官第百八號布告第一條及同年十二月太政官第百五十二號布告ノ率ニ據リ換算シ其ノ元金額ヲ祿高

總額ノ給與行スル公債證書ヲ以テ給與ス

但シ當事犯ノ爲沒祿者ハ祿祿ヲ受ケタル者ハ此ノ限ニ在ラズ

第三條 明治六年十二月太政官第百二十五號布告ニ據リ處分ヲ受ケタル者ニシテ其ノ祿高ニ對ス

ル相當額ノ給與ニ不足アル者ハ其ノ本人及本法施行ノ日ニ於テ現ニ其ノ家名承繼人タル者ニ限リ

其ノ給與未濟額ヲ明治六年十二月太政官第百二十六號布告第一條ノ率ニ據リ換算シ其ノ元金額

第十五條 家祿賞典祿處分法

千七百七十七

ヲ祿高整理ノ爲發行スル公債證書ヲ以テ給與ス

第三條 第一條及第二條ノ祿高ヲ金額ニ換算スルハ明治八年九月太政官第三百三十八號布告ニ據リ取調ヘタル既定ノ石代相場ニ據ル

第四條 第一條及第二條ノ給與ヲ受ケントスル者ハ其ノ理由及證據ヲ具シ地方廳ヲ經由シテ大藏大臣ニ願出ツヘシ  
但シ本法施行ノ日ヨリ一箇年以内ニ願出サルトキハ本法ノ給與ヲ受クルコトヲ得ス

附則

第五條 此ノ法律ニ抵觸スル法律命令ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ其ノ效力ヲ失フモノトス

○家祿賞典祿處分法施行法明治三十二年三月法律第八十四號

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル家祿賞典祿處分法施行法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

家祿賞典祿處分法施行法

第一條 家祿又ハ賞典祿ハ左ノ標準ニ據リ之ヲ調査ス

一 政府ノ布告布達其ノ他ノ命令ニ依リ定マリタル制度

一 明治四年七月十四日前各藩ニ於テ最後ニ定メタル制度各藩ニ於テ最後ニ定メタル制度ニシテ廢藩以後各府縣ニ於テ施行シタルモノトモ但各

藩ニ於テ定メタル制度中他日ノ改正ヲ期シタルモノハ之ヲ問ハス

第二條 明治九年八月太政官布告第百八號第一條ニ依リ給與未濟額ヲ換算スル場合ニ於テハ同

布告第三條ヲモ適用ス

第三條 家祿賞典祿處分法第一條ニ依リ三箇年未滿ノ年限祿ニ對スル給與未濟額ヲ給與スル場合ニ於テハ明治九年八月太政官布告第百八號第一條二年ノ者ニ對スル換算率ヲ準用ス

家祿賞典祿處分法第二條ニ依リ年限祿ニ對スル給與未濟額ヲ給與スル場合ニ於テハ明治七年太政官布告第三十二號ヲ適用シ其ノ三箇年未滿ノ者ニ付テハ二年ノ者ニ對スル換算率ヲ準用ス

第四條 明治九年八月太政官布告第百八號及同年十二月太政官布告第百五十二號ノ率ニ依リ給與未濟額ヲ算出スル場合ニ於テハ祿高全部ニ付テ換算シタル額ヨリ既ニ給與シタル額ヲ控除ス

第五條 祿高整理ノ爲發行スル公債證書ハ一千萬圓以内トシ其利率ハ一箇年百分ノ五トス  
前項公債ノ利子仕拂期ハ毎年三月及九月トス

第六條 前條ノ公債證書ハ隨時之ヲ發行シ券面金額ノ計算ヲ以テ交付ス  
前條ノ公債ニ關シ此ノ法律ニ規定セサル事項ニ付テハ明治十九年勅令第六十六號整理公債條例ヲ適用ス

第七條 公債證書券面金額ニ滿タサル端數ハ現金ヲ以テ之ヲ給與ス

○鐵道費補充公債條例明治三十二年一月勅令第六號

朕鐵道費補充公債條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

鐵道費補充公債條例

- 第一條 鐵道費補充公債ハ神奈川縣下戸塚横須賀間滋賀縣下大津長濱間ノ鐵道布設資金ヲ補充スルカ爲メニ證書額面貳百萬圓ヲ限リ募集スルモノトス
- 第二條 此公債募集ノ方法元金ノ償還年限利子歩合利子支拂期月及ヒ其他ノ事項ハ總テ明治十九年勅令第六十六號整理公債條例ニ依ル

海軍公債證券條例

海軍公債證券條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍公債證券條例

- 第一條 海軍公債證券ハ海軍軍備ノ費途ニ充ツル爲メノ壹千七百萬圓ヲ限リ三箇年間に漸次之ヲ發行スルモノトス
- 第二條 此公債ノ利子ハ一箇年百分ノ五トス
- 第三條 此公債ノ元金ハ證書發行ノ年ヨリ五箇年毎置其翌年ヨリ向三箇年間に抽籤ヲ以テ之ヲ償還ス
- 第四條 此公債證券發行ノ價額ハ大藏大臣之ヲ定ム
- 第五條 此公債證券ハ無記名利札附ニシテ千圓五百圓百圓ノ三種トス其様式ハ大藏大臣定ム但之ヲ應募者又ハ所有者ノ望ニ由リ記名トスルコトヲ得

二十年勅令第一號ヲ以テ改正

十九年大藏省令第三十號ヲ以テ整理公債取扱順序ヲ定ム

- 第六條 此公債證券引受申込前毎期需用ノ高ニ超過スルトキハ其申込價額ノ高キモノヨリ順次證券ヲ交付シ需用額ニ滿ツルニ至テ之ヲ止ム
- 第七條 此公債ノ利子ハ毎年五月十一月ニ排渡スモノトス
- 第八條 此公債證券抽籤ノ時ハ大藏省官吏三名以上會計検査院官吏二名以上及ヒ日本銀行役員二名以上立會ノ上之ヲ執行ス但此公債證券額而拾萬圓以上ヲ有スルモノハ抽籤ノ席ニ臨ムコトヲ得
- 第九條 此條例外ノ事項ハ總テ明治十九年勅令第六十六號整理公債條例ニ據ル

整理公債條例

整理公債條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

- 第一條 整理公債ハ從前發行ノ六分以上利附ノ内國債ヲ償還整理スルカ爲メニ募集スルモノトス
- 第二條 整理公債ハ壹億七千五百萬圓ヲ限リ大藏大臣財政ノ便宜ヲ計リ漸次之ヲ募集スルモノトス
- 第三條 整理公債利子ノ割合ハ一箇年百分ノ五トス
- 第四條 整理公債ニ對シ發行スル證券ハ無記名利札附ニシテ五千圓千圓五百圓百圓五拾圓ノ五種トス但應募者又ハ所有者ノ望ニ由リ記名トスルコトヲ得



第五條 整理公債證書ノ様式ハ大藏大臣之ヲ定メ豫メ告示スヘシ

第六條 整理公債ヲ募集スルトキハ其總額價格應募申込日限應募金拂込度數等ハ大藏大臣之ヲ定メ豫メ告示スヘシ

大藏大臣ハ前項ノ手續ニ據ラス市場ノ時價ニ準シ整理公債證書ノ價格ヲ定メ臨時之ヲ發行シテ日本銀行ニ交付スルコトヲ得但發行シタル證書ノ金額及價格ハ大藏大臣其發行ノ翌日之ヲ告示スヘシ(二十一年勅令第四十シ(六號ヲ以テ本項追加)

第七條 整理公債應募高每期需要ノ額ニ超過スルトキハ大藏大臣ハ應募價格ノ高キモノヨリ順次證書ヲ交付シ需要額ニ滿ルニ至テ止ム其價格同シキモノハ申込ノ高ヲ割合減少スルモノトス

但時宜ニ依リ貳百圓以下ノ應募者ニハ之ヲ減少セサルコトアルヘシ(二十一年勅令第四十シ(六號ヲ以テ但書追加)

第八條 整理公債應募金ノ拂込ヲ數回ニ分ツ場合ニ於テ拂込期ノ末日マテニ拂込未済ノモノアルトキハ其翌日ヨリ現拂込ノ日マテ一箇年百分ノ七ノ割合ヲ以テ利子ヲ徵收スヘシ

前項拂込期日後三ヶ月ヲ過キ猶ホ拂込ヲナサ、ルトキハ公債證書ヲ交付セス且既ニ拂込ノ金額ハ還付セサルモノトス

第九條 整理公債元金ハ募集ノ年ヨリ五箇年據置其翌年ヨリ向五十箇年間ニ抽籤法ヲ以テ償還スルモノトス但償還金額ハ其時々大藏大臣之ヲ定メ豫メ告示スヘシ

第十條 整理公債元金償還ノ爲メ抽籤ヲ爲ストキハ日本銀行本店ニ於テ大藏省官吏三名以上會計検査院官吏二名以上日本銀行役員二名以上立會ノ上之ヲ執行、但整理公債證書額面三拾萬圓以上ヲ

有スルモノハ抽籤ニ臨席スルコトヲ得

抽籤ノ後ハ日本銀行ヲシテ當籤證書ノ記號番號種類及ヒ金額等ヲ廣告セシムルモノトス

第十一條 整理公債ノ利子ハ毎年六月十二月ニ於テ支拂フモノトス

第十二條 整理公債ノ利子ハ其元金拂込ノ時月ノ十五日以前ニ在ルモノハ下半年分ヨリ支拂ヒ月ノ十六日以後ニ在ルモノハ翌月分ヨリ支拂ヒ元金償還ノ年ニ於テハ其償還ノ月マテ月割ヲ以テ支拂フモノトス

第十三條 整理公債證書ノ利札ハ利子請取ノ時其所有者各自之ヲ截斷シテ日本銀行本支店又ハ代理店ニ持參スヘシ

第十四條 整理公債元利ノ支拂ヲ請求セサルモノアルトキハ元金ハ償還ノ月ヨリ滿十五箇年利子ハ支拂ノ期月後滿五箇年ヲ過クレハ之ヲ支拂ハサルヘシ但證書ノ紛失汚染及ヒ毀損等ニ由リ元利ノ支拂ヲ見合セ及ヒ訴訟事件ニ由リ請求ヲ爲シ難キ場合アルトキハ其間ノ日數ヲ算セス

第十五條 無記名證書ヲ記名ニ變換セントスルモノハ其請求書ニ戶長ノ與書ヲ受ケ證書ヲ添ヘ日本銀行本支店又ハ代理店ヲ經由シテ大藏省ニ申出ヘシ

第十六條 記名證書ノ賣買讓渡ヲ爲シタルモノハ雙方運署ノ請求書ニ證書ヲ添ヘ日本銀行本支店又ハ代理店ニ差出シ名前書換ヲ請フヘシ

第十七條 記名證書ノ所有者死去シタルトキ其相續人ハ請求書ニ正當ノ相續人タルコトヲ證スル戶長ノ與書ヲ受ケ前條名前書換ノ手續ヲ爲スヘシ

第十八條 記名證書ノ所有者ノ遺言ニ依リ相續人ニ非スシテ證書ヲ譲リ受クルモノアルトキハ右相續人ヲ以テ保證人ト爲シ前條名前書換ノ手續ヲ爲スヘシ但相續人オキ場合ニ於テハ前所有者ノ親戚二名以上ヲ以テ保證人ト爲スヘシ

第十九條 記名證書ノ所有者身代限ノ處分ヲ受ケ證書ノ所有權他ヘ移轉シタルトキ其引受人ハ裁判所ノ證明書ヲ承ケ之ヲ證書ニ添ヘ前條名前書換ノ手續ヲ爲スヘシ

第二十條 整理公債證書若クハ其利札水火災等ニ由リ消滅シタルトキハ二名以上ノ保證人ヲ立テ日本銀行本支店又ハ代理店ヲ經由シテ大藏省ニ届出代證書若クハ代利札ノ交付又ハ利子ノ支拂ヲ請求スルコトヲ得此場合ニ於テ大藏省ハ其消滅ノ證明確ナリト認ムルトキハ直ニ代證書若クハ代利札ヲ交付シ又ハ利子ヲ支拂フヘシ

第二十一條 整理公債證書又ハ利札ヲ紛失シタルモノハ日本銀行本支店又ハ代理店ニ届出ヘシ其發見ノ時亦同シ

前項ノ届出アルトキハ銀行ハ直ニ其次第ヲ廣告スヘシ但廣告料ハ届出人ヨリ納メシムルモノトス  
第二十二條 公債證書又ハ利札紛失ノ届出アルトキハ日本銀行本支店又ハ代理店ハ之ヲ支拂ヲ見合スヘシ

第二十三條 紛失届出ノ證書又ハ利札ヨリ日本銀行本支店又ハ代理店ニ持參スルモノアルトキハ銀行ハ之ヲ預リ置キ其旨ヲ届出人ニ報知シ持參人ト届出人ト相當ノ手續ヲ經テ所有權ヲ證明スルヲ待テ其取扱ヲ爲スヘシ

第二十四條 記名證書紛失届出後一回ノ利拂了リタル上ハ二名以上ノ保證人ヲ立テ日本銀行本支店又ハ代理店ヲ經由シテ大藏省ニ申出代證書ノ交付ヲ請求スルコトヲ得

第二十五條 紛失無記名證書其届出ヨリ滿六箇年ヲ過キ紛失利札其支拂期限ヨリ滿四箇年ヲ過キ猶ホ發見セザルトキハ届出人ニ代證書ヲ交付シ又ハ利子ヲ支拂フヘシ但本文期限ヲ過キテ紛失證書又ハ利札ヲ持參スルモノアルモ届出人ニ對シテノミ起訴ノ權アルモノトス

第二十六條 紛失證書ノ當籤ハ無効ノモノトス

第二十七條 整理公債證書ヲ汚染又ハ毀損シタルトキハ日本銀行本支店又ハ代理店ヲ經由シテ其證書ヲ大藏省ニ差出シ代證書ノ交付ヲ請求スルコトヲ得大藏省ニ於テ其真正ヲ鑑別シ得ヘキモノニハ代證書ヲ交付シ鑑別シ難キモノニハ其取扱總テ紛失證書ノ例ニ準セシム

第二十八條 第十五條ノ證書交換ヲ受クルトキ第十六條第十七條第十八條第十九條ノ名前書換ノトキ第二十條第二十四條第二十五條第二十七條ノ代證書ヲ受クルトキ及ヒ記名證書ノ取扱店ヲ變更スルトキハ日本銀行本支店又ハ代理店ハ相當ノ手数料ヲ本人ヨリ納メシムルコトヲ得

第二十九條 第二十條第二十四條ノ保證人ハ日本銀行本支店又ハ代理店ニ於テ満足スルモノニ限ルヘシ

第三十條 従前發行ノ六分以上利附ノ公債證書ヲ所有スルモノハ元金償還ノ時本人ノ請求ニヨリ大藏省ノ都合ヲ以テ整理公債證書ヲ交付スルコトアルヘシ

第三十一條 整理公債證書ノ製造費發行費及ヒ募集初年ノ利子ハ募集金ヲ以テ支出スルコトヲ得

第三十二條 整理公債ノ募集償還利子ノ拂渡證書ノ書換等ニ關スル取扱手續ハ大藏大臣之ヲ定メ日本銀行ヲシテ其事務ヲ取扱ハシム

○軍費支辨ノ爲メ公債募集方

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル軍費支辨ノ爲メ公債募集ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
十月法律第 二十五號

清國及朝鮮國トノ交渉事件ニ關スル軍費支辨ノ爲メ壹億圓ヲ限リ一箇年六厘以下ノ利子ヲ以テ漸次公債ヲ募集シ若クハ借入金ヲ爲スコトヲ得

但募集借入ノ方法規約償還年限其他必要ナル事項ハ大藏大臣之ヲ定ム

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル軍費支辨ノ爲メ公債募集ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
明治二十八年三月 法律第 八號

清國トシテ交渉事件ニ關スル軍費支辨ノ爲メ壹億圓ヲ限リ一箇年六厘以下ノ利子ヲ以テ漸次公債ヲ募集シ若クハ借入金ヲ爲スコトヲ得

但募集借入ノ方法及規約償還年限其他必要ナル事項ハ大藏大臣之ヲ定ム

○軍事公債條例  
明治二十七年八月 勅令第百四十四號

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ軍事公債條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

○軍事公債條例

第一條 軍事公債ハ勅令第百四十三號ニ依リ金額五千萬圓ヲ限リ漸次募集スルモノトス

第二條 此ノ公債ノ利子ハ一箇年百分ノ六以上トシ元金償還ニ至ルマテ毎年六月及十二月ノ兩度ニ之ヲ支拂フ

第三條 此ノ公債ノ元金ハ證書發行ノ年ヨリ五箇年据置其ノ翌年ヨリ向五十箇年以内ニ償還ス

第四條 此ノ公債ヲ募集スルニ付キ其ノ總額、價格、利子歩合、應募申込日限、應募金拂込度數其ノ他必要ナル事項ハ大藏大臣之ヲ定ム

第五條 此ノ公債證書ノ交付元利仕拂ニ關スル時効證書ノ取扱其ノ他此ノ條例ヲ以テ規定セサル事項ハ總テ明治十九年勅令第六十六號整理公債條例ニ據ル

○事業公債條例  
明治二十九年三月 法律第 五十九號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル事業公債條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

○事業公債條例

第一條 事業公債ハ既設官線鐵道改良、北海鐵道建設、製鋼事業、電話擴張ノ費途、葉煙草專賣資金及

第十五類 事業公債條例

千九百零九年

二十七年大藏  
省令第十五號  
軍事公債取扱  
順序ヲ定ム

三十年法律第  
一號ヲ以テ公  
債ノ利子ハ從  
年三月九月以  
於テ支拂フモ  
ノトス

第三十號  
第三十號  
第三十號

第五十八號

第五十八號

國防事業ノ費用ニ充テシムルガ爲證額面壹萬圓ヲ限ル公債募集ノ法律  
第三條 本公債ノ利率ハ一箇年百分ノ五以下トシ募集ノ都度大藏大臣之ヲ定ム

第三條 本公債ノ利率ハ一箇年百分ノ五以下トシ募集ノ都度大藏大臣之ヲ定ム  
ヲ適用スルガ爲證額面壹萬圓ヲ限ル公債募集ノ法律

○臺灣事業公債法 明治三十二年三月  
朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル臺灣事業公債法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 臺灣ニ於テ左ノ事業ニ要スル經費ニ充ツル爲政府ハ三千五百萬圓ヲ限リ公債ヲ募集スルコトヲ得

- 一 鐵道敷設

- 二 土地調査

- 三 築港

- 四 廟舍建築

第二條 此ノ公債ノ利率ハ一箇年百分ノ五以下トス  
第三條 此ノ公債ノ據此年限ハ十箇年以内トシ發行ノ年ヨリ四十五箇年以内ニ償還ス

第四條 政府ハ特約ニ依リ銀行若ハ債主組合ヲシテ此ノ公債ヲ引受ケシムルコトヲ得

第五條 政府ハ第一條ノ經費ヲ繰替支辨スル爲一箇年以内ノ期限ヲ以テ臺灣銀行ヨリ一時借入金ヲ爲スコトヲ得此ノ場合ニ於ケル利率ハ政府之ヲ定ム

前項借入金ハ此ノ公債募集金ヲ以テ之ヲ償還スルコトヲ得公債募集金ニ依ラスシテ之ヲ償還シタルトキハ其ノ金額ニ相當スル公債ヲ募集セス

第六條 此ノ公債及前條ノ借入金ハ舊壹圓銀貨幣ヲ以テ起債スルコトヲ得此ノ場合ニ於テ公債證書ノ種類ハ政府之ヲ定ム

第七條 此ノ法律ニ於テ規定スルモノノ外ハ明治十九年勅令第六十六號整理公債條例ニ依ル

○國債ヲ外國ニ於テ募集スル場合 明治三十二年四月  
朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル國債ヲ外國ニ於テ募集スル場合ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治二十五年法律第四號鐵道敷設法 明治二十九年法律第五十九號事業公債條例及明治二十九年法律第九十三號北海道鐵道敷設法ニ據ル公債ヲ外國ニ於テ募集スル場合ニハ外國貨幣ヲ以テ證書ノ金額ヲ記載シ其ノ證書ノ種類ノ元金ノ据置年限、募集、償還、利率ノ計算及任拂ニ關スル方法其ノ他必要ナル手續ハ命令ヲ以テ之ヲ定ムルコトヲ得但シ償還期限ハ公債募集ノ年ヨリ起算シ五十五年ヲ超ユ

○國債ヲ外國ニ於テ募集スル場合 明治三十二年四月  
朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル國債ヲ外國ニ於テ募集スル場合ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治二十五年法律第四號鐵道敷設法 明治二十九年法律第五十九號事業公債條例及明治二十九年法律第九十三號北海道鐵道敷設法ニ據ル公債ヲ外國ニ於テ募集スル場合ニハ外國貨幣ヲ以テ證書ノ金額ヲ記載シ其ノ證書ノ種類ノ元金ノ据置年限、募集、償還、利率ノ計算及任拂ニ關スル方法其ノ他必要ナル手續ハ命令ヲ以テ之ヲ定ムルコトヲ得但シ償還期限ハ公債募集ノ年ヨリ起算シ五十五年ヲ超ユ

明治二十五年法律第四號鐵道敷設法 明治二十九年法律第五十九號事業公債條例及明治二十九年法律第九十三號北海道鐵道敷設法ニ據ル公債ヲ外國ニ於テ募集スル場合ニハ外國貨幣ヲ以テ證書ノ金額ヲ記載シ其ノ證書ノ種類ノ元金ノ据置年限、募集、償還、利率ノ計算及任拂ニ關スル方法其ノ他必要ナル手續ハ命令ヲ以テ之ヲ定ムルコトヲ得但シ償還期限ハ公債募集ノ年ヨリ起算シ五十五年ヲ超ユ

明治二十五年法律第四號鐵道敷設法 明治二十九年法律第五十九號事業公債條例及明治二十九年法律第九十三號北海道鐵道敷設法ニ據ル公債ヲ外國ニ於テ募集スル場合ニハ外國貨幣ヲ以テ證書ノ金額ヲ記載シ其ノ證書ノ種類ノ元金ノ据置年限、募集、償還、利率ノ計算及任拂ニ關スル方法其ノ他必要ナル手續ハ命令ヲ以テ之ヲ定ムルコトヲ得但シ償還期限ハ公債募集ノ年ヨリ起算シ五十五年ヲ超ユ

明治二十五年法律第四號鐵道敷設法 明治二十九年法律第五十九號事業公債條例及明治二十九年法律第九十三號北海道鐵道敷設法ニ據ル公債ヲ外國ニ於テ募集スル場合ニハ外國貨幣ヲ以テ證書ノ金額ヲ記載シ其ノ證書ノ種類ノ元金ノ据置年限、募集、償還、利率ノ計算及任拂ニ關スル方法其ノ他必要ナル手續ハ命令ヲ以テ之ヲ定ムルコトヲ得但シ償還期限ハ公債募集ノ年ヨリ起算シ五十五年ヲ超ユ

第十五號 國債ヲ外國ニ於テ募集スル場合

第五十八號

大藏省證券條例  
明治十七年九月  
 第二十四號勅令  
 大藏省證券條例別紙ノ通制定ス

(別紙)

大藏省證券條例

- 第一條 大藏省證券ハ出納上一時使用ノ爲メ大藏省ヨリ發行スルモノトス
- 第二條 大藏省證券ハ無記名利付定期拂ニシテ其發行シタル年度ノ歲入ヲ以テ仕拂ヲ爲スモノトス
- 第三條 大藏省證券ノ發行金額及利子金額ハ「大藏卿」之ヲ豫定シ「太政官」ノ裁可ヲ受クヘシ
- 第四條 大藏省證券ハ百圓、五百圓、千圓、五千圓、壹萬圓及拾萬圓ノ六種ニ別テ其ノ支拂期限ハ十二箇月以内トス(二十六年法律第十九號  
 第五條中ヲ改正ス)
- 第五條 大藏省證券ハ何人ニテモ授受買賣スルヲ得
- 第六條 大藏省證券ノ仕拂及ヒ引換ニ關スル事務ハ日本銀行ニ於テ取扱ハシムヘシ
- 第七條 大藏省證券ノ所持人ハ其仕拂ノ期日ニ至リ日本銀行本支店又ハ代理店ニ於テ其仕拂ヲ請求ス(シ但其仕拂ハ通貨ヲ以テスルモノトス)
- 第八條 大藏省證券ハ其仕拂期日ヨリ起算シ滿六ヶ月間ハ之ヲ仕拂フヘシ滿六ヶ月ヲ過ルトキハ一

切仕拂ヲ爲サ、ルモノトス但仕拂期日後ハ利子ヲ付セサルモノトス

- 第九條 大藏省證券汚染又ハ毀損セシトキハ日本銀行本支店又ハ代理店ニ差出シ證券ノ引換ヲ請フヘシ但其券面金額記號番號及ヒ主要ノ印部ヲ檢査シ其真正タルヲ證認シ得ヘキ者ニアラサレハ引換サルヘシ
- 第十條 大藏省證券ノ所持人其證券ヲ亡失セシトキハ其事由並ニ券面ノ金額支拂期日記號番號及ヒ所有セシトキノ手續ヲ詳記シ日本銀行本支店又ハ代理店ヲ經テ大藏省ニ届出ヘシ「大藏卿」ハ其證券ノ授受買賣引換及ヒ仕拂ヲ差止ムヘキ旨ヲ告示スルモノトス但發見シタルトキハ同様ノ手續ヲ以テ届出ヘシ
- 第十一條 亡失セシ證券ハ之ヲ發見セサルモ日本銀行本支店又ハ代理店ニ於テ滿足スル保證人二人以上ノ證明アルニ於テハ其元利金額ヲ仕拂フヘシ
- 第十二條 大藏省證券ヲ偽造若クハ變造シテ行使シタルモノハ刑法第二百四條第二項ニ依テ處斷ス

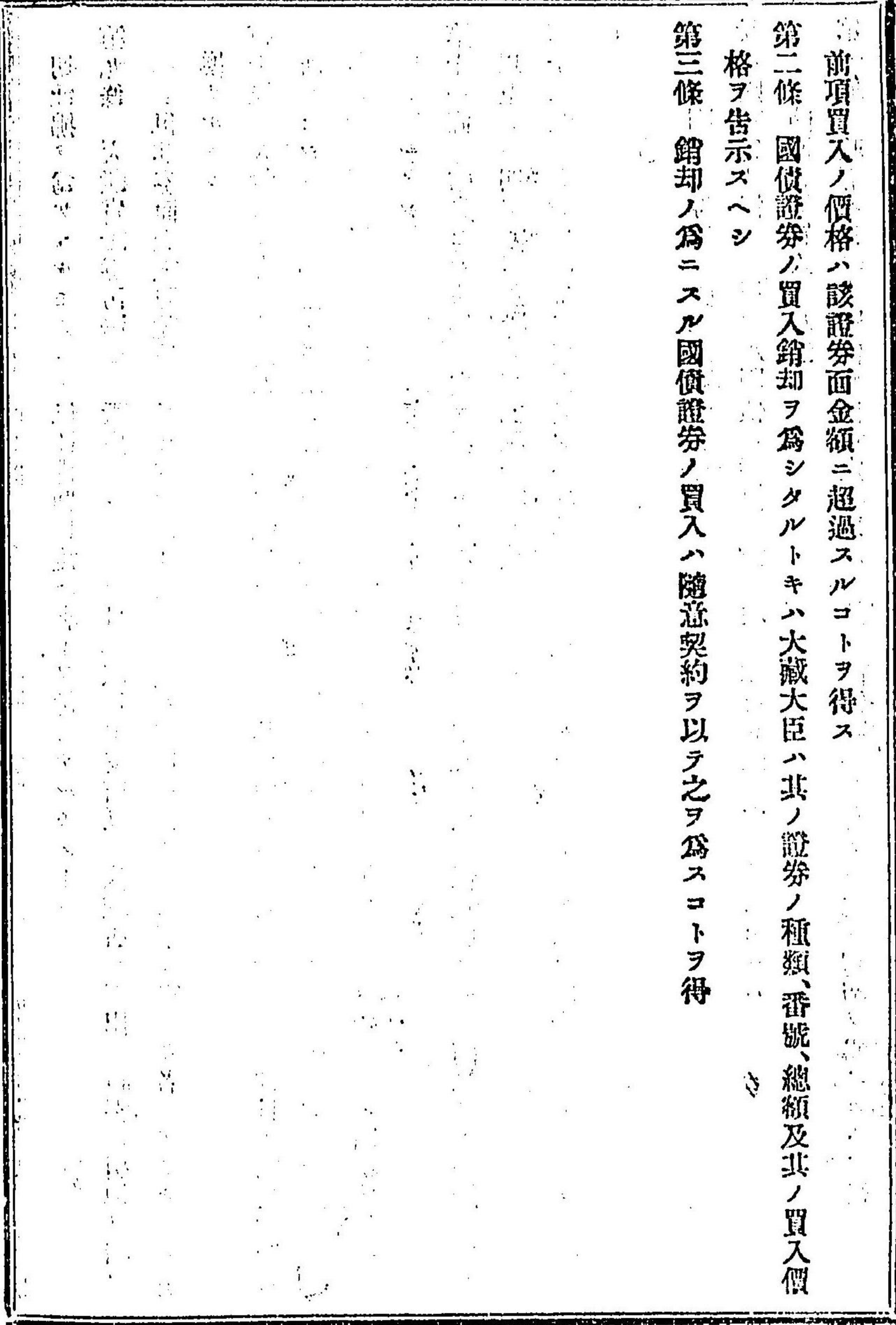
○國債證券買入銷却法明治二十九年二月  
 法律第五號

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル國債證券買入銷却法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

國債證券買入銷却法

- 第一條 政府ハ毎年度國債費豫算定額以内ニ於テ國債證券ヲ買入レ之ヲ銷却ヲ爲スコトヲ得

前項買入ノ價格ハ該證券面金額ニ超過スルコトヲ得ス  
 第二條 國債證券ノ買入銷却ヲ爲シタルトキハ大藏大臣ハ其ノ證券ノ種類、番號、總額及其ノ買入價格ヲ告示スヘシ  
 第三條 銷却ノ爲ニスル國債證券ノ買入ハ隨意契約ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得



○第十六類 商事

○商法 明治二十三年三月  
第三十二條 第四十二條 第五十二條 第六十二條 第七十二條 第八十二條 第九十二條 第十條 第十一條 第十二條 第十三條 第十四條 第十五條 第十六條 第十七條 第十八條 第十九條 第二十條 第二十一條 第二十二條 第二十三條 第二十四條 第二十五條 第二十六條 第二十七條 第二十八條 第二十九條 第三十條 第三十一條 第三十二條 第三十三條 第三十四條 第三十五條 第三十六條 第三十七條 第三十八條 第三十九條 第四十條 第四十一條 第四十二條 第四十三條 第四十四條 第四十五條 第四十六條 第四十七條 第四十八條 第四十九條 第五十條 第五十一條 第五十二條 第五十三條 第五十四條 第五十五條 第五十六條 第五十七條 第五十八條 第五十九條 第六十條 第六十一條 第六十二條 第六十三條 第六十四條 第六十五條 第六十六條 第六十七條 第六十八條 第六十九條 第七十條 第七十一條 第七十二條 第七十三條 第七十四條 第七十五條 第七十六條 第七十七條 第七十八條 第七十九條 第八十條 第八十一條 第八十二條 第八十三條 第八十四條 第八十五條 第八十六條 第八十七條 第八十八條 第八十九條 第九十條 第九十一條 第九十二條 第九十三條 第九十四條 第九十五條 第九十六條 第九十七條 第九十八條 第九十九條 第一百條  
 朕商法ヲ裁可シ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス  
 (商法略之)

○商法施行條例 明治二十三年八月  
第五十九條 第六十條 第六十一條 第六十二條 第六十三條 第六十四條 第六十五條 第六十六條 第六十七條 第六十八條 第六十九條 第七十條 第七十一條 第七十二條 第七十三條 第七十四條 第七十五條 第七十六條 第七十七條 第七十八條 第七十九條 第八十條 第八十一條 第八十二條 第八十三條 第八十四條 第八十五條 第八十六條 第八十七條 第八十八條 第八十九條 第九十條 第九十一條 第九十二條 第九十三條 第九十四條 第九十五條 第九十六條 第九十七條 第九十八條 第九十九條 第一百條  
 朕商法施行條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

商(商法施行條例略ス)

○商法 明治三十二年三月  
第四十八條 第四十九條 第五十條 第五十一條 第五十二條 第五十三條 第五十四條 第五十五條 第五十六條 第五十七條 第五十八條 第五十九條 第六十條 第六十一條 第六十二條 第六十三條 第六十四條 第六十五條 第六十六條 第六十七條 第六十八條 第六十九條 第七十條 第七十一條 第七十二條 第七十三條 第七十四條 第七十五條 第七十六條 第七十七條 第七十八條 第七十九條 第八十條 第八十一條 第八十二條 第八十三條 第八十四條 第八十五條 第八十六條 第八十七條 第八十八條 第八十九條 第九十條 第九十一條 第九十二條 第九十三條 第九十四條 第九十五條 第九十六條 第九十七條 第九十八條 第九十九條 第一百條  
 朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル商法修正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

商法別冊ノ通之ヲ定ム  
 明治二十三年法律第三十二號商法ハ第三編ヲ除ク外此法律施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

(別冊略ス)

第三十二條 第四十二條 第五十二條 第六十二條 第七十二條 第八十二條 第九十二條 第十條 第十一條 第十二條 第十三條 第十四條 第十五條 第十六條 第十七條 第十八條 第十九條 第二十條 第二十一條 第二十二條 第二十三條 第二十四條 第二十五條 第二十六條 第二十七條 第二十八條 第二十九條 第三十條 第三十一條 第三十二條 第三十三條 第三十四條 第三十五條 第三十六條 第三十七條 第三十八條 第三十九條 第四十條 第四十一條 第四十二條 第四十三條 第四十四條 第四十五條 第四十六條 第四十七條 第四十八條 第四十九條 第五十條 第五十一條 第五十二條 第五十三條 第五十四條 第五十五條 第五十六條 第五十七條 第五十八條 第五十九條 第六十條 第六十一條 第六十二條 第六十三條 第六十四條 第六十五條 第六十六條 第六十七條 第六十八條 第六十九條 第七十條 第七十一條 第七十二條 第七十三條 第七十四條 第七十五條 第七十六條 第七十七條 第七十八條 第七十九條 第八十條 第八十一條 第八十二條 第八十三條 第八十四條 第八十五條 第八十六條 第八十七條 第八十八條 第八十九條 第九十條 第九十一條 第九十二條 第九十三條 第九十四條 第九十五條 第九十六條 第九十七條 第九十八條 第九十九條 第一百條

第三十二號令  
 明治三十三年六月十六日  
 施行ス

○商法施行法明治三十二年三月法律第四十九號  
朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル商法施行法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
(商法施行法略ス)

○商法中署名スヘキ場合ニ於テハ記名捺印ヲ以テ署名ニ代フルコトヲ得明治三十三年二月法律第十七號  
朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル商法中署名スヘキ場合ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
商法中署名スヘキ場合ニ於テハ記名捺印ヲ以テ署名ニ代フルコトヲ得

○商事非訟事件印紙法明治二十三年八月法律第六十六號  
朕商事非訟事件印紙法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

商事非訟事件印紙法

第一條 商法中登記ニ關スル場合ヲ除ク外非訟事件ニ付裁判所ノ命令其他ノ處分ヲ求ムル者ハ以下數條ノ手續ニ從ヒ其差出ス書類ニ「民事訴訟用印紙」ヲ貼用ス可シ但口述ヲ以テスル場合ニ於テハ其調書ニ印紙ヲ貼用スヘシ  
第五條第六條第七條ノ場合ニ於テハ管財人ヨリ差出ス計算書ニ印紙ヲ貼用ス可シ  
第二條 左ニ掲クルモノニ付テハ五十錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ

三十一年勅令  
第三百四十一號  
入印紙ニ收ス  
月ヨリ施行  
二十九年法律  
第九號ヲ以テ  
二十六年法律  
第二號ヲ施行

一 抗告又ハ假差押ノ申立

二 債權者ヨリ爲ス破産宣告ノ申立

三 支拂猶豫ノ申立

第三條 左ニ掲クルモノニ付テハ二十錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ

一 抗告ニ對スル答辯

二 裁判所ノ命令其他ノ處分ノ申立ニシテ本法ニ於テ特ニ規定セサル非訟事件ニ係ルモノ

第四條 破産手續ニ付テハ破産財團中ノ貸方金額ニ應ジ左ノ區別ニ從ヒ印紙ヲ貼用ス可シ但財團管理費用其他破産手續上ノ費用及ヒ財團ノ爲メニ負擔シタル財務並ニ別除ノ辨濟ニ供スル金額ハ貸方金額ヨリ之ヲ控除スヘキモノトス

財團ノ價格五圓マテ 四十錢

同 十圓マテ 六十錢

同 二十圓マテ 一圓二十錢

同 五十圓マテ 三圓

同 七十五圓マテ 四圓四十錢

同 百圓マテ 六圓

同 二百五十圓マテ 十三圓

同 五百圓マテ 二十圓

同 七百五十圓マテ 二十六圓  
 同 千圓マテ 三十圓  
 同 二千五百圓マテ 四十圓  
 同 五千圓マテ 五十圓  
 同 五千圓以上ハ千圓ニ達スル毎ニ四圓ヲ加フ  
 第五條 破産手續ニ付テハ財團ノ配當アル毎ニ其配當金額ノ割合ヲ以テ印紙價額ニ相當スル金額ヲ引去リ置キ終局計算ニ至リ配當金額高ノ割合ニ從ヒ相當印紙ヲ貼用ス可シ  
 第六條 協賛契約ニ依リ手續ヲ止メタルトキハ第四條ニ掲ケタル印紙ノ半額ヲ貼用ス可シ  
 第七條 破産手續再施ノ場合ニ於テハ破産手續開始ニ於ケル場合ト同一ノ印紙ヲ貼用ス可シ  
 第八條 本法ニ定ムル印紙代價ノ負擔ニ付テハ民事訴訟法第一編第二章第五節ノ規定ヲ準用ス  
 民事訴訟用印紙法ハ本法ノ規定ニ抵觸セザルモノニ限り之ヲ準用ス

○日本銀行條例 明治十五年六月 第三十二號布告

日本銀行條例左ノ通制定ス

日本銀行條例

第一條 日本銀行ハ有限責任トシ本行ノ負債辨償ノ爲メ株主ノ負擔スヘキ義務ハ株金ニ止マルモノ

トス

第二條 日本銀行ハ本店ヲ東京ニ置クヘシ各府縣ノ首邑其他要用ナル地方ニ支店出張所ヲ設置シ又ハ他ノ銀行ト「コルレスボンデンス」ヲ締約スルルコトヲ得但支店出張所ヲ設置シ又ハ他ノ銀行ト「コルレスボンデンス」ヲ締約スルルハ其事由ヲ「大藏卿」ニ具狀シテ其許可ヲ受クヘシ又「大藏卿」ニ於テ支店出張所ヲ要用ナリトスル時ハ銀行ニ命シテ之ヲ設置セシムルコトアルヘシ  
 第三條 日本銀行ノ營業年限ハ開業ノ日ヨリ滿三十年トス但株主總會ノ決議ニ依リ營業ノ延期ヲ請願スルコトヲ得  
 第四條 日本銀行ノ資本金ハ一千萬圓ト定メ之ヲ五萬株ニ分テ一株貳百圓トス但株主總會ノ決議ニ依リ資本金ノ増加ヲ請願スルコトヲ得  
 第五條 日本銀行ノ株券ハ總テ記名券トナシ日本人ノ外賣買讓與スルヲ許サス  
 第六條 日本銀行ノ株主トナラントスルモノハ「大藏卿」ノ許可ヲ受クヘシ  
 第七條 資本金總額五分ノ一即チ貳百萬圓ノ入金アル時ハ營業ヲ開始スルヲ得ヘシ但資本金募集ノ手續ハ定款ヲ以テ定ムル者トス  
 第八條 營業上ニ於テ損失ヲ生シ資本金現入金額ノ内幾分ヲ減少シタル時ハ其事由ヲ審明シ資本金入金額ヨリ其闕額ニ充ル迄ノ金額ヲ追募スヘシ  
 第九條 事業ノ伸張ニ由リ資本金ノ増加ヲ要スル時ハ之ヲ資本金殘額ヨリ追募スヘシ  
 第十條 純益金總額ヨリ株主割賦金ヲ引去リ其殘額ヨリ少クモ十分ノ一ヲ左ノ目的ヲ以テ積立金ト



爲ス可シ

- 第一 資本金ノ損失ヲ補フ
- 第二 割賦金ノ不足ヲ補フ
- 第十一條 日本銀行ノ營業ハ左ノ如シ
  - 第一 政府發行ノ手形爲換手形其他商業手形等ノ割引ヲ爲シ又ハ買入ヲ爲ス事
  - 第二 地金銀ノ賣買ヲ爲ス事
  - 第三 金銀貨或ハ地金銀ヲ抵當トシテ貸金ヲ爲ス事
  - 第四 豫テ取引約定アル諸會社銀行又ハ商人ノ爲メニ手形金ノ取立ヲ爲ス事
  - 第五 諸預リ勘定ヲ爲シ又ハ金銀貨貴金屬並諸證券類ノ保護預リヲ爲ス事
  - 第六 公債證書政府發行ノ手形其他政府ノ保證ニ係ル各種ノ證券ヲ抵當トシテ當座勘定貸又ハ定期貸ヲ爲ス事但其金額及利子ノ割合ハ總裁副總裁理事監事ニ於テ時々決議シ「大藏卿」ノ許可ヲ受クヘシ
- 第十二條 日本銀行ハ第十一條ニ記載スル事業ノ外左ニ掲クル件々ハ勿論其他諸般ノ營業ニ關涉スルヲ得ス
  - 第一 不動産及ヒ銀行又ハ諸會社ノ株券ヲ抵當トシテ貸金ヲ爲ス事
  - 第二 本銀行ノ株券ニ對シテ貸金ヲ爲シ又ハ此株券ノ買戻ヲ爲ス事
  - 第三 諸工業會社ノ株主タルハ勿論直接間接ヲ問ハス工業ニ關係スル事

第四 本支店出張所ヲ開設スル爲メ必要ナル者ノ外一切他ノ不動産ノ所有主タル事

第十三條 政府ノ都合ニ由リ日本銀行ヲシテ國庫金ノ取扱ヒニ從事セシムヘシ

第十四條 日本銀行ハ兌換銀行券ヲ發行スルノ權ヲ有ス但此銀行券ヲ發行セシムル時ハ別段ノ規則ヲ制定シ更ハ頒布スル者トシテ其發行ノ手續及ヒ其利息ノ率等ハ法律ニ依リテ定ムル事

第十五條 日本銀行ハ諸手形及切手ヲ發行スルヲ得ヘシ

第十六條 日本銀行ハ公債證書ヲ買入又ハ之ヲ賣拂フヲ得ヘシ但此場合ニ於テハ「大藏卿」ノ許可ヲ受クヘシモソトス

第十七條 日本銀行ハ總裁一人副總裁一人理事四人ヲ以テ綜理スル者トス此外ニ監事三人乃至五人ヲ置クヘシ

第十八條 總裁副總裁ハ任期五ケ年トシ總裁ハ勅任副總裁ハ奏任トス但任期中ハ他ノ官職ヲ兼任スルヲ得ス

第十九條 理事ハ株主總會ニ於テ選舉シ大藏大臣之ヲ命シ監事ハ株主總會ニ於テ之ヲ選舉ス(二十三年法律第六十一號)

第二十條 總裁ハ毎半年期ニ通常株主總會ヲ招集ス(二十三年法律第六十一號)ニ以テ本條改正各項追加

總裁ハ臨時ノ事項ヲ議スル爲メ必要ト認マルトキハ臨時株主總會ヲ招集ス

總裁ハ監事ノ全員又ハ株主總會ノ會員タル者五十名以上ヨリ會議ノ目的ヲ示シテ請求スルトキハ臨時株主總會ヲ招集セサルコトヲ得ス

株主總會ノ會員ハ開會ノ六十日前ヨリ引續キ十株以上ヲ所有スル者ニ限ル

株主總會ニ於テハ會員ニ代理ヲ委託スルコト外他人ヲ以テ代理人トナスコトヲ得ス

株主總會ノ會員ハ株數十箇ニ付投票一箇ノ權利ヲ有ス十一株以上ハ五十株毎ニ一箇ノ投票權ヲ増加ス但他人ノ代理委託ヲ受クル者ハ其代理ニ屬スル權利ハ十箇以上ヲ超ユルコトヲ得ス

第二十一條 「大藏卿」ハ特ニ監理官ヲ日本銀行ニ派出シテ諸般ノ事務ヲ監視セシムヘシ

第二十二條 日本銀行ハ本支店出張所及約定店等ノ營業上一般ノ景況ヲ調査シ少々毎月一回之ヲ「大藏卿」ヘ報告ス可シ

第二十三條 日本銀行ハ本條例ノ旨趣ニ基キ銀行定款ヲ作り政府ノ許可ヲ受クヘシ但定款ヲ改正シ又ハ定款外ノ事件ヲ處スル時ハ株主總會ニ於テ決議シ政府ノ許可ヲ受ク可シ

第二十四條 政府ハ日本銀行諸般ノ業務ヲ監督シ其營業上條例定款ニ背戾スル事ハ勿論政府ニ於テ不利ト認ル事件ハ之ヲ制止ス可シ

第二十五條 此條例ヲ改正増削スル時ハ其施行ノ日ヨリ三箇月以前ニ之ヲ布告スヘシ

○兌換銀行券條例明治十七年五月第十八號布告

兌換銀行券條例別紙ノ通制定シ明治十七年七月一日ヨリ施行ス

但明治七年九月第百號布告ハ此條例布告ノ日ヨリ滿一個年ノ後廢止ス

(別紙)

兌換銀行券條例

第一條 兌換銀行券ハ日本銀行條例第十四條ニ據リ同銀行ニ於テ發行シ金貨ヲ以テ兌換スルモノトス(三十年法律第十八號ヲ以テ銀貨ヲ金貨ト改ム)

第二條 日本銀行ハ兌換銀行券發行高ニ對シ同額ノ金銀貨及地金銀ヲ置キ其引換準備ニ充ツヘシ(二十一年勅令第五十號ヲ以テ本項改正)

但シ銀貨及地金ハ引換準備總額四分ノ一ヲ超過スルコトヲ得ス(三十年法律第十八號ヲ以テ本項追加)

日本銀行ハ前項ノ外特ニ壹億貳千萬圓ヲ限リ政府發行ノ公債證書大藏省證券其他確實ナル證券又ハ商業手形ヲ保證トシ兌換銀行券ヲ發行スルコトヲ得但本項壹億貳千萬圓ノ内貳千七百萬圓ハ明治二十二年一月二日以降ニ係ル國立銀行紙幣ノ消却高ヲ限トシ漸次發行スルモノトス(二十一年勅令第五十九號ヲ以テ本項追加二十三年法律第三十四號三十二年法律第五十五號ヲ以テ金額ヲ改ム)

日本銀行ハ市場ノ景況ニ由リ流通貨幣ヲ増加ヲ必要ト認ムルトキハ大藏大臣ノ許可ヲ得テ前項發行高ノ外更ニ政府發行公債證書大藏省證券其他確實ナル證券若クハ商業手形ヲ保證トシ兌換銀行券ヲ發行スルコトヲ得此場合ニ於テハ其發行額ニ對シ一箇年百分ノ五ヲ下ラサル割合ヲ以テ發行稅ヲ納ムルコトヲ得但此割合ハ其時々大藏大臣之ヲ定ム(二十一年勅令第五十號ヲ以テ本項追加)

日本銀行ハ政府發行紙幣消却ノ爲メ貳千貳百萬圓ヲ限リ無利子ヲ以テ政府ヘ貸付スヘシ(二十年

第十六號 兌換銀行券條例

半二頁

前項貸付金ノ償還年限及毎年償還金額ハ大藏大臣之ヲ定ム(二十一年勅令第五十  
九號ヲ以テ本項追加)

第三條 兌換銀行券ノ種類ハ壹圓五圓拾圓貳拾圓五拾圓百圓貳百圓ノ七種トス但「大藏卿」ハ各  
種ニ就テ其發行高ヲ定ムヘシ

第四條 兌換銀行券ハ租稅海關稅其他一切ノ取引ニ差支ナク通用スルモノトス

第五條 兌換銀行券ハ「大藏卿」ノ指定スル書式圖形ニヨリ日本銀行ニ於テ之ヲ製造シ時々其製  
造高ヲ「大藏卿」ニ上申スヘシ但其見本ハ發行期日前「大藏卿」ヨリ告示スヘシ

第六條 兌換銀行券ハ引換ヲ請フ者アルトキハ日本銀行本店及ヒ支店ニ於テ營業時間中何時ニ  
テモ兌換スヘシ  
但支店ニ於テハ本店ヨリ準備金ノ到達スヘキ時間其兌換ヲ延期スルコトヲ得(十八年第九號勅  
令ヲ以テ本項追加)

第七條 金貨ヲ持參シテ兌換銀行券ニ引換ンコトヲ請フモノアルトキハ日本銀行本店及ヒ支店  
ニ於テ無手数料ニテ之ヲ交換スルモノトス(三十年法律第十八號ヲ以テ  
金貨引換ニアルテ金貨ト改ム)

第八條 日本銀行ハ兌換銀行券發行額及交換準備ニ關スル出納日表及毎週平均高表ヲ製シ之ヲ  
大藏大臣ヘ進達シ且毎週平均高表ハ官報ニ廣告スヘシ(二十一年勅令第五  
十九號ヲ以テ改正)

第九條 「大藏卿」ハ日本銀行監理官ヲシテ特ニ兌換銀行券發行ノ件ヲ監督セシムヘシ但監理官  
ニ於テ必要ナリトスルトキハ何時ニテモ其手許有高及ヒ帳簿ヲ検査スルコトヲ得

第十條 兌換銀行券ノ汚染毀損等ニヨリ通用シ難キモノハ日本銀行本店及ヒ支店ニ於テ無手數  
料ニテ之ヲ引換フヘシ

第十一條 兌換銀行券ハ製造損券引換及ヒ消却等ノ手續ハ「大藏卿」之ヲ定ムヘシ

第十二條 兌換銀行券ハ偽造變造ヨリ係罪刑法律偽造紙幣與各本條ニ照シテ處斷ス

第十三條 日本銀行納稅(明治三十二年三月  
法律第五十號)

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル日本銀行納稅ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

日本銀行ハ兌換銀行券條例第二條第二項ニ該當セル保證ニ據リ發行スル兌換券ノ每一箇月ノ平  
均發行高ニ對シ其ノ發行稅ハシテ一箇年千分ノ十二半ノ割合ヲ以テ政府ヘ納稅スヘシ但政府

第三項特命ニ依リ一箇年千分ノ十若ハ其額以内ノ利息又ハ無利息ヲ以テ政府又ハ其ノ他ヘ貸付ケタ  
ル兌換券ニ對シテハ其ハ納稅義務ヲ免除ス

日本法納稅ノ義務ハ日本銀行カ既ニ負擔シ及將來ニ於テ負擔スヘキ他ノ義務ト關係ナキモノト  
ス

納稅期限ハ一箇年ヲ兩度ニ區分シ前半季分ヲ八月三十一日後半季分ヲ翌年二月二十八日限リ納  
ムルモノトス

日本興業銀行式目第三十三條

日本銀行納稅

第十六條 日本銀行納稅

千二百一

○日本興業銀行法 明治三十三年三月  
法律第七十號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル日本興業銀行法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
日本興業銀行法

第一章 總則

第一條 日本興業銀行ハ株式會社トシ其ノ本店ヲ東京ニ置ク  
第二條 日本興業銀行ノ資本金ハ一千萬圓トス但シ政府ノ認可ヲ受ケテ之ヲ増加スルコトヲ得  
第三條 日本興業銀行ノ株式ノ金額ハ百圓トス  
第四條 日本興業銀行ノ存立時期ハ五十箇年トス但シ政府ノ認可ヲ受ケテ之ヲ延長スルコトヲ得

第二章 重役

第五條 日本興業銀行ニ總裁一人理事四人以上監査役三人以上ヲ置ク  
第六條 總裁ハ日本興業銀行ヲ代表ス  
總裁及理事ハ定款ノ定ムル所ニ從ヒ日本興業銀行ノ業務ヲ綜理ス  
監査役ハ日本興業銀行ノ業務ヲ監査ス  
第七條 總裁ハ百株以上ヲ所有スル株主中ヨリ政府之ヲ命シ其ノ任期ヲ五箇年トス  
理事ハ五十株以上ヲ所有スル株主中ヨリ株主總會ニ於テ選舉シタルニ倍ノ候補者中ヨリ政府之ヲ

命シ其ノ任期ヲ三箇年トス

監査役ハ三十株以上ヲ所有スル株主中ヨリ株主總會ニ於テ之ヲ選任シ其ノ任期ヲ二箇年トス

第八條 總裁及理事ハ何等ノ名稱ニ拘ラス他ノ職務又ハ商業ニ從事スルコトヲ得ス

第三章 營業

第九條 日本興業銀行ハ左ノ事務ヲ營ムモノトス

第一 國債證券、地方債證券、社債券及株券ヲ質トスル貸付

第二 國債證券、地方債證券、社債券ノ應募又ハ引受

第三 預リ金及保護預リ

第四 地方債證券、社債券及株券ニ關スル信託ノ業務

第十條 日本興業銀行ハ營業上餘裕金アルトキハ國債證券、地方債證券及社債券ノ買入ヲ爲スコトヲ得

第十一條 日本興業銀行ハ本法ニ記載セサル業務ヲ營ムコトヲ得ス

第四章 債券

第十二條 日本興業銀行ハ拂込資本金額ノ五倍ヲ限リ債券ヲ發行スルコトヲ得但シ其ノ貸付金現在  
高及對ノ所有ニ備ル地方債證券及社債券現在高ヲ超過スル法外ニ得ス  
第十三條 債券ハ券面金額五十圓以上トシ無記名利札付トス但シ應募者又ハ所有者ノ請求ニ因リ記

第十四條 日本興業銀行は其の債券ヲ發行セムトキハ主務大臣ノ認可ヲ受クヘシ但シ外國ニ於ケル債券發行ノ規定ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第十五條 日本興業銀行ノ債券ノ利子ハ毎年二回以上之ヲ支拂ヒ其ノ元金ハ發行ノ年ヨリ三十箇年以内ニ抽籤ヲ以テ之ヲ償還スヘシ

第十六條 日本興業銀行ハ其ノ債券借換ノ爲低利ノ債券ヲ發行スル場合ニ於テハ第十二條ノ制限ニ依ラサルコトヲ得

低利ノ債券ヲ發行シタルトキハ發行後三箇月以内ニ抽籤ヲ以テ其ノ發行券面金額ニ相當スル舊債券ヲ償還スヘシ

第五章 準備金

第十七條 日本興業銀行ハ毎營業年度準備金トシテ資本ノ闕損ヲ補フ爲利益ノ百分ノ八以上ヲ積立テ且利益配當ノ平均ヲ得セシムル爲利益ノ百分ノ二以上ヲ積立ツヘシ

第六章 政府ノ監督及補助

第十八條 政府ハ日本興業銀行ノ業務ヲ監督ス

第十九條 日本興業銀行ハ其ノ定款ヲ變更セムトキハ主務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第二十條 日本興業銀行ニ於テ支店又ハ代理店ヲ設置セムトスルトキハ主務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

シ

第二十一條 日本興業銀行ハ株主ニ配當金ノ分配ヲ爲サムトスルトキハ主務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第二十二條 主務大臣ハ日本興業銀行ノ營業上法律命令又ハ定款ニ背反シ若ハ公益ヲ害スル事件アリト認ムルトキハ之ヲ制止スヘシ

第二十三條 日本興業銀行ハ主務大臣ノ命令ニ從ヒ其ノ營業ニ関スル諸般ノ景況及計算報告書ヲ差出スヘシ

第二十四條 主務大臣ハ特ニ日本興業銀行監理官ヲ置キ日本興業銀行ノ業務ヲ監視セシム

第二十五條 日本興業銀行監理官ハ何時ニテモ日本興業銀行ノ金庫、券書庫、帳簿及諸般ノ文書ヲ査スルコトヲ得

日本興業銀行監理官ハ株主總會其ノ他諸般ノ會議ニ出席シテ意見ヲ陳述スルコトヲ得

第二十六條 日本興業銀行ノ配當金ニシテ毎營業年度ニ於テ年百分ノ五ノ割合ニ達セザルトキハ政府ハ創立初期ノ末日ヨリ五箇年間ヲ限リ之ニ達セシムヘキ金額ヲ補給スヘシ但シ其ノ補給額ハ如何ナル場合ト雖拂込資本金ノ百分ノ五ヲ超過スルコトヲ得ス

第七章 罰則

第二十七條 日本興業銀行ニ於テ左ノ事犯アリタルトキハ總裁及理事ヲ百圓以上千圓以下ノ過料ニ

- 一 本法ニ於テ主務大臣ノ認可ヲ受クヘキ場合ニ其ノ認可ヲ受ケサルトキ
  - 二 第十一條ノ規定ニ反シ本法ニ記載セサル業務ヲ營ミタルトキ
  - 三 第十二條第十六條ノ規定ニ反シ債券ヲ發行シタルトキ
- 第二十八條 日本興業銀行ノ總裁及理事第八條ノ規定ヲ犯シタルトキハ二十回以上二百回以下ノ過料ニ處ス

附則

- 第二十九條 政府ハ設立委員ヲ置キ日本興業銀行ノ設立ニ關スル一切ノ事務ヲ處理セシム
- 第三十條 設立委員ハ定款ヲ作り政府ノ認可ヲ受ケタル後株主ヲ募集ス
- 第三十一條 設立委員ハ株主ノ募集ヲ終リタルトキハ株式申込證ヲ政府ニ提出シ日本興業銀行設立ノ認可ヲ稟請スヘシ
- 前項ノ認可ヲ受ケタルトキハ設立委員ハ過期ナク各株式ニ付第一回ノ拂込ヲ爲サシムルコトヲ要ス
- 第三十二條 創立總會終結シタルトキハ設立委員ハ其ノ事務ヲ日本興業銀行組織ニ引渡スヘシ

○日本勸業銀行法(明治二十九年四月法律第八十二號)

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル日本勸業銀行法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一章 總則

- 第一條 日本勸業銀行ハ農業工業ノ改良發達ヲ爲資本ヲ貸付スルヲ以テ目的トスル株式會社ニシテ其ノ本店ヲ東京ニ置ク
- 第二條 日本勸業銀行ノ資本金ハ一千萬圓トス但シ株主總會ノ決議ニ依リ政府ノ認可ヲ經テ資本金ヲ増加スルコトヲ得
- 第三條 日本勸業銀行ハ各株式ノ金額ハ二百圓トス
- 第四條 日本勸業銀行ハ存立時期ハ設立免許ノ日ヨリ百箇年トス但シ株主總會ノ決議ニ依リ政府ノ認可ヲ經テ存立時期ヲ延長スルコトヲ得

第二章 重役

- 第五條 日本勸業銀行ニ總裁副總裁各一人理事監査役各三人以上ヲ置ク
- 第六條 總裁ハ日本勸業銀行ヲ代表シ其ノ事務ヲ總理ス
- 副總裁ハ總裁事故アルトキ其ノ職務ヲ代理シ總裁缺員ノトキ其ノ職務ヲ行フ
- 副總裁及理事ハ總裁ヲ補助シ定款ノ定ムル所ニ從ヒ日本勸業銀行ノ業務ヲ分掌ス
- 監査役ハ日本勸業銀行ノ業務ヲ監査ス
- 第七條 總裁副總裁ハ百株以上ヲ所有スル株主中ヨリ政府之ヲ命シ其ノ任期ヲ五箇年トス但シ其ノ

任期満限ノ後再任ヲ命スルコトヲ得、  
理事ノ五十株以上ヲ所有スル株主中ヨリ株主總會ニ於テ二倍ノ候補者ヲ選舉シ政府其ノ中ヨリ之ヲ命シ任期ヲ五箇年トス但シ其ノ任期満限ノ後本條ノ手續ニ依リ再任ヲ命スルコトヲ得

監査役ハ三十株以上ヲ所有スル株主中ヨリ株主總會ニ於テ之ヲ選定シ其ノ任期ヲ三箇年トス但シ其ノ任期満限ノ後再選スルコトヲ得

總裁副總裁理事及監査役ハ任命若ハ選定ノ六箇月前ヨリ引續キ本條規定ノ株數ヲ所有スル者ニ限

第八條 總裁副總裁及理事ハ在任中何等ノ名稱ニ拘ラス他ノ職務又ハ商業ニ従事スルコトヲ得ス、但シ大藏大臣ノ認可ヲ得タルトキハ此ノ限ニ在ラス

第三章 株主總會

第九條 通常株主總會ハ毎年二回定款ニ定メタル時期ニ於テ總裁之ヲ招集ス

第十條 臨時株主總會ハ臨時ノ事項ヲ議スル爲メ何時ニテモ總裁之ヲ招集スルコトヲ得

第十一條 監査役又ハ總株金ノ五分ノ一以上ニ當ル株主ハ會議ノ目的ヲ示シテ臨時株主總會ヲ招集ヲ總裁ニ請求スルコトヲ得

總裁前項ノ請求ヲ受ケタルトキハ臨時株主會ヲ招集スヘシ

第十二條 株主總會ニ於テハ株主ハ議決權ヲ有スル株主ノ外代理ヲ委託スルコトヲ得ス但シ法定代

理人ハ此ノ限ニ在ラス

日本勸業銀行ノ役員及使用人ハ株主總會ニ於テ株主ノ代理人タルコトヲ得ス

第十四條 日本勸業銀行ハ五十箇年以内ニ於テ年賦償還ノ方法ニ依リ不動産ヲ抵當トシテ貸付ヲ爲スモノトス

日本勸業銀行ハ年賦償還貸付金總高ノ十分ノ一ニ相當スル金額ヲ限リ不動産ヲ抵當トシテ五箇年以

内ノ定期償還貸付ヲ爲スコトヲ得

第十五條 日本勸業銀行ハ府縣郡市町村其ノ他法律ヲ以テ組織セル公共團體ニ貸付ヲ爲ス場合ニ於

テ抵當ヲ徵セサルコトヲ得

第十六條 日本勸業銀行ニ於テ不動産抵當ヲ徵スルトキハ總テ第一抵當ナルコトヲ要ス但シ舊價ア

ル場合ニ於テ日本勸業銀行ヨリ借入スル新價ヲ以テ舊價ニ償還スル效果ニ依リ新價ノ第一抵當ト

ナルコトヲ得ヘキトキハ此ノ限ニ在ラス

第十七條 日本勸業銀行ニ於テ抵當トシテ徵スル土地ハ永續スヘキ確實ナル收益ノ見込アルモノニ

限ル

日本勸業銀行ニ於テ抵當トシテ徵スル建物ハ保險付ノモノニ限ル但シ抵當物ノ外ニ貸付金高二倍

ノ限ル

日本勸業銀行ニ於テ抵當トシテ徵スル建物ハ保險付ノモノニ限ル但シ抵當物ノ外ニ貸付金高二倍

ノ限ル

以上ノ價格ヲ有スル動産又ハ不動産ヲ添付シテ爲ス場合ニ於テハ保險ニ付セサルコトヲ得  
第十八條 不動産ヲ抵當トシテ貸付クル金額ハ日本勸業銀行ニ於テ鑑定シタル價格ノ三分ノ二以内  
トス

第十九條 年賦金ハ元金ト利子トヲ併セテ之ヲ計算シ各年ヲ通シテ一定平等ノ償還額ヲ定ムヘシ  
前項ノ償還額ハ之ヲ變更スルコトヲ得ス但シ貸付金ノ一部償還ノ場合ニ於テ其ノ額ヲ更定スルハ  
此ノ限ニ在ラス

第二十條 土地抵當貸付ニ對スル年賦金ハ其ノ抵當地ノ平年收益額ヨリ公課額ヲ扣除シタル殘額ヲ  
超過スルコトヲ得ス

第二十一條 貸付金ノ年賦償還ニ付キテハ一箇年以上五箇年以内ニ於テ据置年限ヲ定ムヘシ但シ其  
年限間ノ利子ハ此ノ限ニ在ラス

第二十二條 債務者年賦金、定期償還金又ハ利子ノ拂込ヲ遅延シタルトキハ拂込期日ノ翌日ヨリ其  
ノ金額ニ對シ利子ヲ仕拂フノ義務ヲ負フ

第二十三條 年賦償還ノ方法ヲ以テ借入ヲ爲シタル債務者ハ償還期限前ニ借入金ノ全部若ハ一部ヲ  
償還スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ日本勸業銀行ハ定款ニ於テ定ムル所ノ率ニ依リ相當ノ手数料ヲ要求スルコト  
ヲ得

第二十四條 債務者ハ借入金ノ五分ノ一以上ヲ償還シタルトキハ其ノ割合ニ應シ抵當物一部ノ解除

ヲ要求スルコトヲ得其ノ殘額ニ對シテモ亦同シ

第二十五條 日本勸業銀行ハ年賦金ノ拂込ヲ遅延スル債務者ニ對シ償還期限前ト雖貸付金全部ノ償  
還ヲ要求スルコトヲ得

第二十六條 日本勸業銀行ハ抵當物ノ價額減少シ貸付金償還額ニ對シ第十八條ノ割合ニ不足ヲ生  
シタルトキハ増抵當ヲ要求シ若ハ其ノ不足ニ相當スル貸付金額ノ償還ヲ要求スルコトヲ得

債務者前項ノ要求ニ應ゼザルトキハ日本勸業銀行ハ償還期限前ト雖貸付金全部ノ償還ヲ要求スル  
コトヲ得

第二十七條 抵當不動産ノ全部若ハ一部カ土地收用法ニ依リ收用セラルル場合ニ於テ日本勸業銀行  
ハ償還期限前ト雖貸付金ノ償還ヲ要求スルコトヲ得但シ債務者ニ於テ收用補償金ヲ供託シ又ハ相  
當ノ不動産ヲ以テ増抵當トスルトキハ此ノ限ニ在ラス

其ノ收用一部ニ止マルトキハ償還ノ要求モ其ノ割合ニ應スヘキモノトス

第二十八條 無抵當ニテ借入ヲ爲シタル府縣郡市町村其ノ他法律ヲ以テ組織セル公共團體ニ於テ年  
賦金、定期償還金又ハ利子ノ拂込期日ヲ過キ之ヲ拂込マサルトキハ日本勸業銀行ハ監督官廳ニ其  
ノ處分ヲ請求スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ日本勸業銀行ハ府縣ニ對シテハ内務大臣ニ郡市町村其ノ他法律ヲ以テ組織セル  
公共團體ニ對シテハ第一及監督官廳ニ其ノ請求ヲ爲スルコトヲ得

監督官廳請求ヲ受ケタルトキハ府縣郡市町村其ノ他法律ヲ以テ組織セル公共團體ニ命令シテ延滞



金及第三十三條ノ利子ヲ拂込マシムル場合ニ於テハ、  
第三十九條 日本勸業銀行ハ農工銀行法ニ依リ設立シタル各農工銀行ノ發行スル農工債券ヲ引受ク  
ルコトヲ得、  
第三十條 日本勸業銀行ハ農工債券ヲ引受ケムトスル場合ニ於テ農工銀行ノ業務及財産ノ實況ヲ調  
査スルコトヲ得、  
第三十一條 日本勸業銀行ハ地金銀又ハ有價證券ノ保護預リヲ爲スコトヲ得、  
第三十二條 日本勸業銀行ハ營業上餘裕金アルトキハ一時各種ノ國貨證券地方債證券ヲ買入レ又ハ  
大藏大臣ノ認可ヲ受ケ確實ナル銀行ニ預ケ金ヲ爲スコトヲ得、  
日本勸業銀行ハ前項ニ依ルノ外營業上ノ餘裕金ヲ使用スルコトヲ得、  
第三十三條 日本勸業銀行ハ此ノ法律ニ記載セザル業務ヲ營ムコトヲ得、  
第五章 勸業債券

第三十四條 日本勸業銀行ハ資本金四分ノ一以上ノ拂込アリタルトキハ拂込金額ノ十倍ヲ限リ勸業  
債券ヲ發行スルコトヲ得但シ年賦償還貸付金總高及其ノ引受ケタル農工債券現在高ヲ超過スルコ  
トヲ得ズ、  
勸業債券ヲ發行スル場合ニハ商法第百九十九條ヲ規定ヲ適用ス、  
第三十五條 勸業債券ハ券面金額ヲ二十圓以上トシ無記名利札附トス但シ應募者又ハ所有者ノ請求  
ニ依リ記名爲ルコトヲ得、  
第三十六條 日本勸業銀行ハ少クモ年賦償還貸付金及其ノ引受ケタル農工債券ノ償還高ニ應ジ毎  
年二回以上抽籤ヲ以テ勸業債券ヲ償還スヘシ、

日本勸業銀行ハ於テ勸業債券ヲ償還スル場合ニ於テハ割増金ヲ附與スルコトヲ得但シ其ノ方法及  
金額ハ大藏大臣ノ認可ヲ受クヘシ、  
第三十七條 日本勸業銀行勸業債券借換爲一時第三十四條ノ制限ニ依ラス低利ノ勸業債券ヲ發行  
スルコトヲ得、  
低利ノ勸業債券ヲ發行シタルトキハ發行後十箇月以内ニ抽籤ヲ以テ其ノ發行券面金額ニ相當スル  
舊勸業債券ヲ償還スヘシ、  
第三十八條 勸業債券ノ利子ハ毎年二回定款ニ定メタル時期ニ於テ之ヲ仕拂ヌヘシ、  
第三十九條 日本勸業銀行ハ年賦償還貸付金ノ償還延滞シテ豫期ノ金額ニ達セサルトキ及其ノ引受  
ケタル農工債券ニシテ之ヲ發行シタル農工銀行解散ノ爲ニ全額ノ償還ヲ得ルコト能ハサルトキハ  
第三十六條ノ償還ト同時期ニ抽籤ヲ以テ其ノ延滞金額又ハ償還ヲ得サル農工債券面金額ニ相當ス  
ル勸業債券ヲ償還スヘシ、  
第四十條 勸業債券ノ所有者其ノ元金又ハ利子ヲ要求セザルトキハ元金ハ十五箇年利子ハ五箇年ニ  
シテ其ノ要求ノ權ヲ失フヘシ、

第四十一條 勸業債券ヲ偽造又ハ變造シテ行使シタル者ハ刑法第二百四條ノ例ニ依リ處罰ス其ノ摸  
倣ニ關シテハ明治二十八年法律第三十八號通貨及證券摸造取締法ニ依リ處分ス、  
第四十二條 勸業債券ニ關シ此ノ法律ニ規定セザル事項ハ明治二十三年法律第六十號ヲ適用ス

第六章 準備金

第四十三條 日本勸業銀行ハ毎年準備金トシテ資本ノ缺損ヲ補フ爲利益ノ百分ノ八以上ヲ積立テ及利益配當ノ平均ヲ得セシムル爲利益ノ百分ノ二以上ヲ積立ツヘシ

第七章 政府ノ監督及補助

第四十四條 大藏大臣ハ日本勸業銀行ノ業務ヲ監督ス

第四十五條 日本勸業銀行ハ其ノ定款ヲ變更セムトスルトキハ大藏大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第四十六條 日本勸業銀行ニ於テ支店及ハ代理店ヲ設置セムトスルトキハ大藏大臣ノ認可ヲ受クヘシ又大藏大臣ニ於テ支店若シテ代理店ヲ費用ナリトスルトキハ日本勸業銀行ニ命シテ之ヲ設置セシムルコトアルヘシ

第四十七條 日本勸業銀行ハ大藏大臣ノ認可ヲ經ルニ非ザルハ株主ニ配當金ノ分配ヲ爲スコトヲ得

夫

第四十八條 大藏大臣ハ日本勸業銀行ノ營業上法律命令及以定款ニ背戻シ若シテ公益ヲ害スル事件アリト認ムルトキハ之ヲ制止スヘシ

第四十九條 日本勸業銀行ハ大藏大臣ノ命令ニ從ヒ其ノ營業ニ關スル諸般ノ狀況及計算報告書ヲ送

出スヘシ

第五十條 大藏大臣ハ必要ナリト認ムルトキハ日本勸業銀行ノ貸付金額及方法ヲ制限スルコトヲ得

第五十一條 日本勸業銀行貸付金ノ利率ヲ最高歩合ハ每營業年度ノ初ニ於テ大藏大臣ノ認可ヲ經テ

之ヲ定ムヘシ其ノ營業年度内ニ於テ之ヲ變更セムトスルトキモ亦同シ

第五十二條 日本勸業銀行ニ於テ勸業債券ヲ發行セムトスルトキハ直接ニ大藏大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第五十三條 大藏大臣ハ特ニ日本勸業銀行監理官ヲ置キ日本勸業銀行ノ業務ヲ監視セシム

第五十四條 日本勸業銀行監理官ハ何時ニテモ日本勸業ノ金庫、券書庫、帳簿及諸般ノ文書ヲ検査スルコトヲ得

日本勸業銀行監理官ハ監視上必要ナリト認ムルトキハ何時ニテモ日本勸業銀行ニ命シテ營業上諸般ノ計算及狀況ヲ報告セシムルコトヲ得

日本勸業銀行監理官ハ株主總會其ノ他諸般ノ會議ニ出席シテ意見ヲ陳述スルコトヲ得但シ議決ノ數ニ加ハルコトヲ得ス

第五十五條 日本勸業銀行ノ配當金年百分ノ五ニ達セサルトキハ政府ハ創立初季ヨリ十箇年間ヲ限リ之ニ達セシムヘキ金額ヲ補給スヘシ其ノ額ハ如何ナル場合ト雖拂込資本金ノ百分ノ五ヲ超過スルコトヲ得ス

第八章 罰則

第五十六條 日本勸業銀行ニ於テ左ノ事犯アルトキハ總裁若シテ總裁ノ職務ヲ行ヒ又ハ代理スル副總裁ヲ百圓以上千圓以下ノ過料ニ處ス其ノ事犯副總裁又ハ理事ノ分擔業務ニ係ルトキハ副總裁理事ヲ過料ニ處スルコト亦同シ

第三十二年法律  
第五十二號  
附則

- 一 第十四條ノ規程ニ反シ貸付ヲ爲シタルトキ
  - 二 第十六條ノ規程ニ反シ第一抵當ニ非サルモノニ對シテ貸付ヲ爲シタルトキ
  - 三 第三十二條第二項ノ規程ニ反シ營業上ノ餘裕金ヲ使用シタルトキ
  - 四 第三十三條ノ規程ニ反シ此ノ法律ニ記載セサル業務ヲ營ミタルトキ
  - 五 第三十四條ノ規程ニ反シ勸業債券ヲ發行シタルトキ但シ第三十七條第一項ニ該當スルモノハ此ノ限ニ在ラス
  - 六 第三十六條第一項第三十七條第二項及第三十九條ノ規程ニ反シ勸業債券ノ償還ヲ爲ササルトキ
  - 七 第四十三條ノ規程ニ反シ利益金ヲ處分シタルトキ
- 第五十七條 日本勸業銀行ノ總裁副總裁及理事第八條ノ規程ヲ犯シタルトキ二十圓以上二百圓以下ノ過料ニ處ス
- 第五十八條 前二條ニ掲ケタル過料ハ裁判所ノ命令ヲ以テ之ヲ科ス但シ其ノ命令ニ對シ十四日以内ニ抗告ヲ爲スコトヲ得
- 附則
- 第五十九條 政府ハ設立委員ヲ置キ日本勸業銀行設立ノ免許ヲ與フルマテ其ノ發起ニ關スル一切ノ事務ヲ處理セシム
- 第六十條 設立委員ハ定款ヲ作り政府ノ認可ヲ得タル後株主ヲ募集ス

第三十二年法律  
第五十二號  
附則

- 第六十一條 設立委員ハ株主ノ募集ヲ終リタルトキハ株式申込簿ヲ政府ニ差出シ銀行設立ノ免許ヲ稟請スヘシ
- 第六十二條 設立委員前條ノ免許ヲ得タルトキハ其ノ事務ヲ日本勸業銀行總裁ニ引渡スヘシ
- 第六十三條 設立初度ノ總裁副總裁理事及監査役ノ第七條ニ依リ所有スヘキ株數ノ時期ニ付テハ同條第四項ヲ適用スルノ限ニ在ラス
- 第六十四條 設立初度ノ總裁副總裁及理事ノ任期ハ三箇年トス
- 設立初度ノ理事及監査役ハ株主中ヨリ政府之ヲ命ス
- 農工銀行法 明治二十九年四月  
法律第八十三號
- 朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル農工銀行法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
- 農工銀行法
- 第一章 總則
- 第一條 農工銀行ハ農業工業ノ改良發達ノ爲資本ヲ貸付スルヲ以テ目的トスル株式會社ニシテ其ノ資本金ヲ二十萬圓以上トシ各株式ノ金額ハ二十圓トス
- 第二條 農工銀行ハ北海道又ハ一府縣ヲ以テ一營業區域トス但シ土地ノ情況ニ依リ勅令ヲ以テ北海道又ハ一府縣ヲ二箇以上ノ營業區域ニ分割スルコトヲ得

第三條 農工銀行ノ設立ハ一營業區域内ニ一行ヲ以テ限トス

第四條 農工銀行ノ營業區域内ニ原籍及住所ヲ有スル者ニ非サレハ其ノ株主トナルコトヲ得ス  
株主ニシテ農工銀行ノ營業區域外ニ原籍又ハ住所ヲ移轉スルコトアルモ株主タルノ資格ヲ失フコトナシ

第五條 農工銀行ノ營業區域内ノ府縣郡市町村モ亦其ノ株主タルコトヲ得

第二章 營業

第六條 農工銀行ハ左ノ事業ヲ營ムモノトス

- 一 三十箇年以内ニ於テ年賦償還ノ方法ニ依リ不動産ヲ抵當トシテ貸付ヲ爲スコト
- 二 年賦償還貸付金總高ノ五分ノ一ニ相當スル金額ヲ限リ不動産ヲ抵當トシテ五箇年以内ノ定期償還貸付ヲ爲スコト
- 三 市町村又ハ法律ヲ以テ組織セル公共團體ニ對シ無抵當ニテ本條第一號第二號ノ貸付ヲ爲スコト
- 四 耕地整理法ニ依リ耕地整理ヲ施行スル場合ニ於テ參加土地所有者總員カ連帶責任ヲ以テ借用ヲ申出タルトキハ定期償還ノ方法ニ依リ無抵當貸付ヲ爲スコト(三十二年法律第四十號ヲ以テ本條追加)
- 五 二十人以上ノ農業者又ハ工業者中合セ連帶責任ヲ以テ借用ヲ申出タルトキハ其ノ信用ノ確實ナルモノニ限リ五箇年以内ニ於テ定期償還ノ方法ニ依リ無抵當貸付ヲ爲スコト(三十二年法律第四十號ヲ以テ本條追加)

第七條 前條ノ貸付ヲ爲スハ左ノ事項ニ使用スルヲ目的トスルモノニ限ル(三十二年法律第四十號ヲ以テ第七條ヲ第七條ノ一ト改ム)

- 一 開墾、排水、灌漑及耕地土質ノ改良

- 二 耕作道路ノ築造又ハ改良
  - 三 殖林事業
  - 四 種苗肥料其ノ他農工業用原料ノ購入
  - 五 農工業用ノ器具、機械、舟車、獸畜ノ購入
  - 六 農工業用建物ノ築造又ハ改良
  - 七 前各項ノ外農工業ノ改良
- 第七條ノ二 産業組合法ニヨリ設立シタル無限責任ノ信用組合購買組合及生産組合ニハ五箇年以内ニ於テ定期償還ノ方法ニ依リ無抵當貸付ヲ爲スコトヲ得(三十二年法律第四十號ヲ以テ本條追加)
- 第八條 農工銀行ニ於テ不動産抵當ヲ徵スルトキハ總テ第一抵當ナルコトヲ要ス但シ舊債アル場合ニ於テ農工銀行ヨリ借入スル新債ヲ以テ其ノ舊債ヲ償還スル效果ニ依リ新債ノ第一抵當トナルコトヲ得ヘキトキハ此ノ限ニ在ラス
- 第九條 農工銀行ニ於テ抵當トシテ徵スル土地ハ永續スヘキ確實ナル收益ノ見込アルモノニ限ル  
農工銀行ニ於テ抵當トシテ徵スル建物ハ保險付ノモノニ限ル但シ抵當物ノ外ニ貸付金高二倍以上ノ價格ヲ有スル動産又ハ不動産ヲ添抵當ト爲ス場合ニ於テハ保險ニ付セサルコトヲ得
- 第十條 不動産ヲ抵當トシテ貸付タル金額ハ農工銀行ニ於テ鑑定シタル價格ノ三分ノ二以内トス
- 第十一條 年賦金ハ元金ト利子トヲ併セテ之ヲ計算シ各年ヲ通シテ一定平等ノ償還額ヲ定ムヘシ  
前項ノ償還額ハ之ヲ變更スルコトヲ得ス但シ貸付金ノ一部償還ノ場合ニ於テ其ノ額ヲ更定スルハ此ノ限ニ在ラス
- 第十二條 土地抵當貸付ニ對スル年賦金ハ其ノ抵當地ノ平年收益額ヨリ公課額ヲ控除シタル殘額ヲ

超過スルコトヲ得ス

第十三條 貸付金ノ年賦償還ニ付キテハ一箇年以上五箇年以内ニ於テ据置年限ヲ定ムヘシ但シ其ノ年限間ノ利子ハ此ノ限ニ在ラス

第十四條 債務者年賦金定期償還金又ハ利子ノ拂込ヲ遅延シタルトキハ拂込期日ノ翌日ヨリ其ノ金額ニ對シ利子ヲ任拂フノ義務ヲ負フ

第十五條 年賦償還ノ方法ヲ以テ借入ヲ爲シタル債務者ハ償還期限前ニ借入金ノ全部若ハ一部ヲ償還スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ農工銀行ハ定款ニ於テ定ムル所ノ率ニ依リ相當ノ手数料ヲ要求スルコトヲ得

第十六條 債務者ハ借入金ノ五分ノ一以上ヲ償還シタルトキハ其ノ割合ニ應シ抵當物一部ノ解除ヲ要求スルコトヲ得其ノ殘額ニ對シテモ亦同シ

第十七條 農工銀行ハ年賦金ノ拂込ヲ遅延スル債務者ニ對シ償還期限前ト雖貸付金全部ノ償還ヲ要求スルコトヲ得

第十八條 農工銀行ハ抵當物ノ價格減少シ貸付金償還殘額ニ對シ第十條ノ割合ニ不足ヲ生シタルトキハ増抵當ヲ要求シ若ハ其ノ不足ニ相當スル貸付金額ノ償還ヲ要求スルコトヲ得

債務者前項ノ要求ニ應セサルトキハ農工銀行ハ償還期限前ト雖貸付金全部ノ償還ヲ要求スルコトヲ得

第十九條 抵當不動産ノ全部若ハ一部カ土地收用法ニ依リ收用セラルル場合ニ於テ農工銀行ハ償還期限前ト雖貸付金ノ償還ヲ要求スルコトヲ得但シ債務者ニ於テ收用ノ補償金ヲ供託シ又ハ相當ノ

不動産ヲ以テ増抵當トスルトキハ此ノ限ニ在ラス

其ノ收用一部ニ止マルトキハ償還ノ要求モ其ノ割合ニ應スヘキモノトス

第二十條 無抵當ニテ借入ヲ爲シタル市町村其ノ他法律ヲ以テ組織セル公共團體ニ於テ年賦金定期償還金又ハ利子ノ拂込期日ヲ過キ之ヲ拂込マサルトキハ農工銀行ハ監督官廳ニ其ノ處分ヲ請求スルコトヲ得

監督官廳前項ノ請求ヲ受ケタルトキハ市町村其ノ他法律ヲ以テ組織セル公共團體ニ命令シテ延滞金及第十四條ノ利子ヲ拂込マシムヘシ

第二十一條 農工銀行ハ第六條ノ貸付ヲ爲シタル場合ニ於テ債務者カ貸付ノ目的ニ反シ貸付金ヲ使用スルトキハ償還期限前ト雖貸付金全部ノ償還ヲ要求スルコトヲ得

第二十二條 農工銀行ハ定期預リ金ヲ爲シ又ハ地金銀有價證券ノ保護預リヲ爲スコトヲ得

第二十三條 農工銀行ハ營業上餘裕金アルトキハ一時各種ノ國債證券地方債證券及勸業債券ヲ買入レ又ハ他ノ銀行ニ預ケ金ヲ爲スコトヲ得

農工銀行ハ前項ニ依ルノ外營業上ノ餘裕金ヲ使用スルコトヲ得ス

第二十四條 農工銀行ハ日本勸業銀行ノ代理店タルコトヲ得

農工銀行ハ府縣郡市ノ爲ニ其ノ金銀出納ノ取扱ヲ爲スコトヲ得

農工銀行ハ日本勸業銀行ノ貸付ヲ代理シタル場合ニ於テハ日本勸業銀行ニ對シ債務者ノ爲ニ債務ノ保證ヲ爲スコトヲ得

第二十五條 農工銀行ハ此ノ法律ニ記載セサル業務ヲ營ムコトヲ得ス

第三章 農工債券

第二十六條 農工銀行ハ資本金四分ノ一以上ノ拂込アリタルトキハ拂込金額ノ五倍ヲ限リ農工債券ヲ發行スルコトヲ得但シ年賦償還貸付金總高ヲ超過スルコトヲ得ス  
 農工債券ハ券面金額ヲ十圓以上トシ無記名利札付トス但シ應募者若ハ所有者ノ請求ニ依リ記名ト爲スコトヲ得(三十二年法律第三十號ヲ以テ本項追加)  
 農工債券ヲ發行スル場合ニハ商法第九十九條ノ規定ヲ適用セス(三十三年法律第四十號ヲ以テ本項追加)  
 第二十七條 農工銀行ハ少クトモ年賦償還貸付金ノ償還高ニ應シ毎年二回以上抽籤ヲ以テ農工債券ヲ償還スヘシ  
 第二十八條 農工銀行ハ農工債券借換ノ爲一時第二十六條ノ制限ニ依ラス低利ノ農工債券ヲ發行スルコトヲ得  
 低利ノ農工債券ヲ發行シタルトキハ發行後一箇月以内ニ抽籤ヲ以テ其ノ發行券面金額ニ相當スル舊農工債券ヲ償還スヘシ  
 第二十九條 農工債券ノ利子ハ毎年二回定款ニ定メタル時期ニ於テ之ヲ仕拂フヘシ  
 第三十條 農工銀行ハ年賦償還貸付金ノ償還延滞シテ豫期ノ金額ニ達セサルトキハ第二十七條ノ償還ト同時期ニ抽籤ヲ以テ其ノ延滞金額ニ相當スル農工債券ヲ償還スヘシ  
 第三十一條 農工債券ノ所有者其ノ元金又ハ利子ヲ要求セサルトキハ元金ハ十五箇年利子ハ五箇年ニシテ其ノ要求ノ權ヲ失フモノトス  
 第三十二條 農工債券ヲ偽造又ハ變造シテ行使シタル者ハ刑法第二百四條ノ例ニ依リ處罰ス其ノ模造ニ關シテハ明治二十八年法律第二十八號通貨及證券模造取締法ニ依リ處分ス

第三十三條 農工債券ニ關シ此ノ法律ニ規定セサル事項ハ明治二十三年法律第六十號ヲ適用ス

第四章 準備金

第三十四條 農工銀行ハ毎年準備金トシテ資本ノ減損ヲ補フ爲利益ノ百分ノ八以上ヲ積立テ及利益配當ノ平均ヲ得セシムル爲利益ノ百分ノ二以上ヲ積立ツヘシ

第五章 政府ノ監督及補助

第三十五條 大藏大臣ハ農工銀行ノ業務ヲ監督ス  
 第三十六條 農工銀行ノ定款ハ大藏大臣ノ認可ヲ要ス之ヲ變更セムトスルトキモ亦同シ  
 第三十七條 農工銀行ニ於テ支店又ハ代理店ヲ設置セムトスルトキハ大藏大臣ノ認可ヲ受クヘシ又大藏大臣ニ於テ支店若ハ代理店ヲ要用ナリトスルトキハ農工銀行ニ命シテ之ヲ設置セシムルコトアルヘシ  
 第三十八條 農工銀行ハ大藏大臣ノ認可ヲ經ルニ非サレハ株主ニ配當金ノ分配ヲ爲スコトヲ得ス  
 第三十九條 大藏大臣ハ農工銀行ノ營業上法律命令又ハ定款ニ背反シ若ハ公益ヲ害スル事件アリト認ムルトキハ之ヲ制止スヘシ  
 第四十條 農工銀行ハ大藏大臣ノ命令ニ從ヒ其ノ營業ニ關スル諸般ノ景況及計算報告書ヲ差出スヘシ  
 第四十一條 大藏大臣ハ必要ナリト認ムルトキハ農工銀行ノ貸付割引ノ金額及方法ヲ制限スルコトヲ得

第四十二條 農工銀行貸付金ノ利率ノ最高歩合ハ每營業年度ノ初ニ於テ大藏大臣ノ認可ヲ經テ之ヲ定ムヘシ其ノ營業年度内ニ於テ變更セムトスルトキモ亦同シ

第四十三條 政府ハ特ニ北海道廳府縣高等官中ヨリ農工銀行監理官ヲ命シ大藏大臣ノ指揮ヲ承ケテ農工銀行ノ業務ヲ監視セシム

第四十四條 農工銀行監理官ハ何時ニテモ農工銀行ノ金庫、券書庫、帳簿及諸般ノ文書ヲ検査スルコトヲ得

農工銀行監理官ハ監視上必要ナリト認ムルトキハ何時ニテモ農工銀行ニ命シテ營業上諸般ノ計算及景況ヲ報告セシムルコトヲ得

農工銀行監理官ハ株主總會其ノ他諸般ノ會議ニ出席シテ意見ヲ陳述スルコトヲ得但シ議決ノ數ニ加ハルコトヲ得ス

第四十五條 農工銀行營業補助ノ方法ハ別ニ之ヲ定ム

第六章 罰則

第四十六條 農工銀行ニ於テ左ノ事犯アルトキハ取締役ヲ五十圓以上五百圓以下ノ過料ニ處ス

一 第六條ノ規程ニ反シ貸付ヲ爲シタルトキ

二 第八條ノ規程ニ反シ第一抵當ニ非サルモノニ對シ貸付ヲ爲シタルトキ

三 第二十三條第二項ノ規程ニ營業上ノ餘裕金ヲ使用シタルトキ

四 第二十五條ノ規程ニ反シ此ノ法律ニ記載セサル業務ヲ營ミタルトキ

五 第二十六條ノ規程ニ反シ農工債券ヲ發行シタルトキ但シ第二十八條第一項ニ該當スルモノハ此ノ限ニ在ラス

六 第二十七條第二十八條第二項及第三十條ノ規程ニ反シ農工債券ノ償還ヲ爲ササルトキ

七 第三十四條ノ規程ニ反シ利益金ヲ處分シタルトキ

第四十七條 前條ニ掲ケタル過料ハ裁判所ノ命令ヲ以テ之ヲ科ス但シ其ノ命令ニ對シテ十四日以内ニ抗告ヲ爲スコトヲ得

過料ノ辨納ニ付キテハ取締役連帶シテ其ノ責任ヲ負フ

附則

第四十八條 府縣知事ハ大藏大臣ノ認可ヲ經テ設立委員ヲ置キ農工銀行設立ノ免許ヲ得ルマテ其ノ發起ニ關スル一切ノ事務ヲ處理セシム

第四十九條 設立委員ハ定款ヲ作リ政府ノ認可ヲ得タル後株主ヲ募集ス

第五十條 設立委員ハ株主ノ募集ヲ終リタルトキハ株式申込簿ヲ政府ニ差出シ銀行設立ノ免許ヲ稟請スヘシ

第五十一條 設立委員前條ノ免許ヲ得タルトキハ其ノ事務ヲ農工銀行取締役ニ引渡スヘシ

第五十二條 農工銀行ニ關シ此ノ法律ニ規定セサル事項ハ明治二十三年法律第七十二號銀行條例ヲ適用ス

第三十二年法律  
第五十三號

○農工銀行補助法(明治二十九年四月 法律第八十四號)

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル農工銀行補助法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

農工銀行補助法

第一條 農工銀行法ニ依リ設立スル農工銀行ノ營業ヲ補助スル爲政府ハ豫算ニ定ムル所ニ從ヒ其ノ營業區域ヲ管轄スル府縣(沖繩縣ヲ除ク)ニ其ノ株式引受資金ヲ交付ス

前項ノ交付金額ハ該府縣ノ宅地鑛泉地池沼ヲ除キ有租地段別白町ニ付七十圓以内トス但シ如何ナル場合ニ於テモ一府縣ニ交付スル總額三十萬圓ヲ超過シ又ハ農工銀行拂込資本金ノ三分一ヲ超過スルコトヲ得ス

第二條 北海道及沖繩縣ニ設立スル農工銀行ノ營業ヲ補助スル爲其ノ創立初季ヨリ十五箇年ヲ限リ政府ハ豫算ニ定ムル所ニ從ヒ北海道ノ農工銀行ニ二萬五千圓以内沖繩縣ノ農工銀行ニ五千圓以内ヲ毎年交付ス但シ農工銀行ノ拂込資本金額ニ對シ一箇年百分ノ五ノ割合ヲ超過スルコトヲ得ス(三十三年法律第四十一號ヲ以テ十三年法律第四十一號ニ改ム)

第三條 府縣ハ第一條ノ交付金ヲ農工銀行ノ株式引受ニ供スルノ外他ニ使用スルコトヲ得ス  
第四條 此ノ法律ニ依リ府縣ノ引受ケタル株式ニ對シテハ農工銀行ハ其ノ創立初季ヨリ十箇年間ハ利益配當ヲ爲スコトヲ要セス(三十三年法律第四十一號ヲ以テ五十年法律第四十一號ニ改ム)

前項ノ期限經過後仍五箇年間ハ農工銀行ハ前項府縣引受ノ株式ニ對スル配當金ヲ悉皆準備金ニ繰入ルヘシ

第五條 農工銀行ハ前條ノ期限ヲ經過シタル後ハ此ノ法律ニ依リ府縣ノ引受ケタル株式ニ對シ他ノ株式ト同一ノ利益配當ヲ爲スヘシ  
前項ノ配當金ハ府縣ノ收入ニ繰入ルルモノトス

第六條 府縣ハ此ノ法律ニ依リ其ノ引受ケタル農工銀行ノ株式ヲ離權スルコトヲ得ス但シ第七條ノ場合ハ此ノ限ニ在ラス

第七條 農工銀行創立初季ヨリ十五箇年經過ノ後府縣知事ハ府縣會ノ議決ヲ經内務大臣及大藏大臣ノ認可ヲ得テ此ノ法律ニ依リ引受ケタル農工銀行ノ株式ヲ市町村ニ交付スルコトヲ得(三十三年法律第四十一號ヲ以テ十三年法律第四十一號ニ改ム)  
市町村ハ前項ニ依リ交付セラレタル農工銀行ノ株式ヲ基本財産ト爲スヘシ

○橫濱正金銀行條例(明治二十年七月 勅令第二十九號)

朕橫濱正金銀行條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

橫濱正金銀行條例

第一條 橫濱正金銀行ハ有限責任ニシテ其負債ニ對シテ株主ノ負擔スヘキ義務ハ株金ニ止マルモノトス

第二條 橫濱正金銀行ハ本店ヲ橫濱ニ設置ス又内外國ニ於テ貿易上要用ナル地ニ支店又ハ出張所ヲ設置シ又他ノ銀行ト「コレレスボンデンス」ヲ締約スルコトヲ得但支店出張所ヲ設置若クハ廢止シ



又ハ外國銀行ト「コレレスボンデンス」ヲ締約若クハ解約スルトキハ其事由ヲ大藏大臣ニ具狀シテ許可ヲ受ケヘシ

第三條 橫濱正金銀行ノ營業年限ハ開業ノ日即チ明治十三年二月二十八日ヨリ滿二十箇年トス但株主總會ノ決議ニ依リ營業ノ延期ヲ請願スルコトヲ得

第四條 橫濱正金銀行ノ資本金ハ六百萬圓ト定メ之ヲ六兩株ニ分チ一株ヲ百圓トス但株主總會ノ決議ニ依リ資本金ノ増減ヲ請願スルコトヲ得

第五條 橫濱正金銀行ノ株式ハ日本人ノ外賣買讓與スルコトヲ許サス

第六條 橫濱正金銀行ノ株券ハ記名券ニシテ定款ニ從ヒ賣買讓與スルコトヲ得

第七條 橫濱正金銀行ノ營業ハ左ノ如シ  
第一 外國ノ爲替及荷爲替  
第二 内國ノ爲替及荷爲替

第三 貸付  
第四 諸預金及保護預

第五 爲替手形約束手形其他諸證券ノ割引又ハ其代金取立  
第六 貨幣ノ交換

第八條 橫濱正金銀行ハ營業ノ都合ニ依リ公債證書地金銀又ハ外國貨幣ヲ買入レ又ハ賣拂フコトヲ得

第九條 橫濱正金銀行ハ政府ノ命令ニ依リ外國ニ關スル公債及官金ノ取扱ヲ爲スコトアルヘシ

第十條 橫濱正金銀行ハ第七條第八條及第九條ニ記載スル事業ノ外他ノ營業ヲ爲スコトヲ許サス

第十一條 橫濱正金銀行ハ左ノ場合ヲ除クノ外不動産株券其他ノ物件ヲ買取リ又ハ引受クルコトヲ得ス

第一 銀行營業ノ爲メ地所家屋ノ必要アルトキ

第二 貸金返済ノ爲メ負債者ヨリ之ヲ引渡又ハ賣却スルトキ

第三 貸金ノ抵當ニシテ裁判上公賣ニ付シタルトキ

第十二條 橫濱正金銀行ハ本行ノ株券ヲ抵當ニ取り又ハ之ヲ買戻スヘカラス但負債者其辨償ヲ怠リテ他ニ相當ノ抵當ナク若クハ返済ノ道ナキ場合ニ於テ之ヲ抵當ニ取り又ハ引受クルハ此限ニアラス

第十三條 第十一條第二項第三項及第十二條ノ場合ニ於テ不動産株券其他ノ物件ヲ引受ケントキハ必ス十箇月以内ニ之ヲ賣却スヘシ但賣却代價不相當ト認メタルトキハ其事實ヲ大藏大臣ニ具申シ延期ヲ請フコトヲ得

第十四條 橫濱正金銀行ハ權利者ノ請求次第ニ支拂フヘキ諸預金ニ對シ其四分ノ一以上ニ當ル準備金ヲ備ヘ置クヘシ

第十五條 橫濱正金銀行取締役ハ五人以上トシ其任期ヲ一箇年トシ株主總會ニ於テ其人員ヲ定メ五十株以上ヲ所有スル株主中ニ就キ之ヲ選舉シ大藏大臣ノ認許ヲ受クヘシ其滿期ニ當リ復選セラレ

ル者モ亦同シ(二十二年勅令第十號ヲ以テ本條改正)

第十六條 頭取ハ取締役ニ於テ之ヲ互選シ大藏大臣ノ認可ヲ受クヘシ但大藏大臣ニ於テ必要ト思考スルトキハ特ニ日本銀行副總裁ヲシテ横濱正金銀行頭取ヲ兼ホシメ又ハ横濱正金銀行頭取ヲシテ日本銀行理事ヲ兼ホシムルコトアルヘシ

銀行事務ノ都合ニ依リ取締役ニ於テ副頭取一人ヲ互選スルコトヲ得但其職權ハ頭取事故アルトキ之ヲ代理スルニ止マルモノトス

頭取取締役ノ職權及責任ハ定款ヲ以テ定ムヘシ

第十七條 横濱正金銀行ハ毎年二回定式株主總會ヲ開キ定款ニ定メタル事項ヲ決定スヘシ又臨時ノ事件ヲ議スル爲メ何時ニテモ臨時總會ヲ開クコトヲ得

株主總會ニ出席スル者ハ會期六十日以前ヨリ株主タル者ニ限ルヘシ

第十八條 毎季利益金ヲ配當スルトキハ豫メ其割合ヲ大藏大臣ニ具申シテ認可ヲ受クヘシ

第十九條 毎季純益金總額ノ十分ノ一以上ヲ積立テ左ノ目的ニ供スヘシ

第一 資本金ノ損失ヲ補フコト

第二 配當金ノ不足ヲ補フコト

第二十條 貸金返済ノ期限ヲ過キ到底損失ニ歸スヘキモノト認ムルトキハ其損失ト見積リタル金額ニ對シテ準備金ヲ積立ツヘシ

第二十一條 横濱正金銀行營業上ニ於テ損失ヲ生シ資本金ノ半額以上ヲ減少シタルトキ又ハ此條例

ニ背戻シタル所爲アリテ大藏大臣ニ於テ必要ト思考スルトキハ其營業ヲ停止シ又ハ解散ヲ命スルコトヲ得

又株主總會ノ決議ニ依リ政府ノ許可ヲ受クルニ於テハ任意ノ解散ヲ爲スコトヲ得但此總會ニ於テハ株主總員二分ノ一以上ニシテ總株金二分ノ一以上ニ當ル株主出席シ其議決權ノ三分ノ二以上ニ依テ決議スルモノトス

第二十二條 横濱正金銀行ニ於テ條約定款ニ背戻スル所爲アル時又ハ大藏大臣ニ於テ危險ナル所爲ト認ムル事件アルトキハ大藏大臣ハ之ヲ制止シ又ハ取締役ノ改選ヲ命スルコトヲ得(二十二年勅令第十號ヲ以テ改正)

第二十三條 大藏大臣ハ特ニ監理官ヲ派遣シテ横濱正金銀行諸般ノ事務ヲ監視セシムヘシ(二十二年勅令第十號ヲ以テ改正)

第二十四條 横濱正金銀行ハ大藏大臣ノ命令ニ從ヒ其營業上ニ係ル計算報告書ヲ差出スヘシ

第二十五條 横濱正金銀行本支店及出張所ニ於テハ重要ノ文書ニ其本支店若クハ出張所ノ印ヲ押捺スヘシ但横文ヲ以テ發スル文書ニハ之ヲ押捺スルコトヲ要セス

第二十六條 横濱正金銀行ハ明治二十年七月十日ヨリ此條例ヲ遵奉シ株主總會ノ決議ヲ以テ更ニ定款ヲ制定シテ大藏大臣ノ認可ヲ受クヘシ但定款ノ改正増補ヲ要スルトキハ亦本條ニ準ス

第二十七條 横濱正金銀行ノ頭取取締役其他ノ役員ニシテ此條例ヲ犯シタル者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十八條 此條例ノ改正ヲ要スルコトアルトキハ三箇月以前ニ之ヲ公布スヘシ

○北海道拓殖銀行法明治三十二年三月法律第七十六號  
朕帝國議會ノ協議ヲ經タル北海道拓殖銀行法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
北海道拓殖銀行法

第一章 總則

第一條 北海道拓殖銀行ハ北海道ノ拓殖事業ニ資本ヲ供給スルヲ以テ目的トス  
北海道拓殖銀行ハ株式會社トシ其ノ本店ヲ北海道札幌ニ置ク  
第二條 北海道拓殖銀行ノ資本金ハ三百萬圓トス但シ政府ノ認可ヲ受ケテ之ヲ増加スルコトヲ得  
第三條 北海道拓殖銀行ノ存立時期ハ五十箇年トス但シ政府ノ認可ヲ受ケテ之ヲ延長スルコトヲ得

第二章 重役

第四條 北海道拓殖銀行ニ取締役四人以上監査役三人以上ヲ置ク  
第五條 取締役ハ五十株以上ヲ所有スル株主中ヨリ株主總會ニ於テ之ヲ選任シ其ノ任期ヲ三箇年トス  
監査役ハ三十株以上ヲ所有スル株主中ヨリ株主總會ニ於テ之ヲ選任シ其ノ任期ヲ二箇年トス  
第六條 取締役ハ在任中何等ノ名稱ニ拘ラス他ノ職務ニ從事スルコトヲ得ス

第三章 營業

第七條 北海道拓殖銀行ハ左ノ事業ヲ營ムモノトス  
一 三十箇年以内ニ於テ年賦償還ノ方法ニ依リ不動産ヲ抵當トスル貸付  
二 五箇年以内ニ於テ定期償還ノ方法ニ依リ不動産ヲ抵當トスル貸付  
三 北海道ノ拓殖ヲ目的トスル株式會社ノ株券債券ヲ質トスル貸付及其ノ社債券ノ應募引受  
四 北海道ノ農産物ヲ擔保トスル貸付及荷爲替  
五 預リ金及保護預リ  
前項第三號ノ事業ニ使用スヘキ金額ハ前項第一號及第二號ニ依ル貸付金總高ノ五分ノ一ヲ超過スルコトヲ得ス  
第八條 北海道區町村制ヲ施行セル區町村及其ノ他法律ヲ以テ組織セル北海道ノ公共團體ニ對シ北海道拓殖銀行ハ無擔保ニテ年賦若ハ定期償還ノ方法ニ依リ貸付ヲ爲スコトヲ得  
第九條 北海道拓殖銀行ハ營業上餘裕金アルトキハ國債證券地方債證券又ハ社債券ヲ買入ルルコトヲ得  
第十條 北海道拓殖銀行ハ此ノ法律ニ記載セサル業務ヲ營ムコトヲ得ス  
第十一條 北海道拓殖銀行ハ第七條第一號及第二號ノ貸付ヲ爲シタル場合ニ於テ債務者カ貸付ノ目的ニ反シ貸付金ヲ使用シタルトキハ償還期限前ト雖其ノ貸付金全部ノ償還ヲ要求スルコトヲ得

第四章 債券

第十二條 北海道拓殖銀行ハ拂込資本金額ノ五倍ヲ限リ債券ヲ發行スルコトヲ得但シ第十七條第一號ニ依ル貸付金高ヲ超過スルコトヲ得ス

第十三條 北海道拓殖銀行ハ第七條第一號ニ依ル貸付金ノ償還高ニ應シ毎年二回以上抽籤ヲ以テ其ノ債券ヲ償還スヘシ

第十四條 北海道拓殖銀行ハ第七條第一號ニ依ル貸付金ノ償還延滞シテ豫期ノ金額ニ達セサルトキハ前條ト同時期ニ抽籤ヲ以テ延滞金額ニ相當スル債券ヲ償還スヘシ

第十五條 北海道拓殖銀行ハ債券借換ノ爲一時第十二條ノ制限ニ依ラス低利ノ債券ヲ發行スルコトヲ得

低利ノ債券ヲ發行シタルトキハ發行後一箇月以内ニ抽籤ヲ以テ其ノ發行券面金額ニ相當スル舊債券ヲ償還スヘシ

第五章 準備金

第十六條 北海道拓殖銀行ハ每營業年度準備金トシテ資本ノ缺損ヲ補フ爲利益ノ百分ノ八以上ヲ積立及利益配當ノ平均ヲ得セシムル爲利益ノ百分ノ二以上ヲ積立ツヘシ

第六章 政府ノ監督及補助

第十七條 政府ハ北海道拓殖銀行ノ業務ヲ監督ス

第十八條 北海道拓殖銀行ハ其ノ定款ヲ變更セントスルトキハ主任大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第十九條 北海道拓殖銀行ハ株主ニ配當金ノ分配ヲ爲サントスルトキハ主任大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第二十條 北海道拓殖銀行ハ第七條第一號ノ貸付金利率ニ付每營業年度ノ初ニ於テ主務大臣ノ認可ヲ經テ其ノ最高歩合ヲ定ムヘシ其ノ營業年内ニ於テ之ヲ變更セントスルトキ亦同シ

第二十一條 主務大臣ハ北海道拓殖銀行ノ營業上法律命令又ハ定款ニ背戾シ若ハ公益ヲ害スル事件アリト認ムルトキハ之ヲ制止スヘシ

第二十二條 北海道拓殖銀行ハ主務大臣ノ命令ニ從ヒ其ノ營業ニ關スル諸般ノ景況及計算報告書ヲ差出スヘシ

第二十三條 政府ハ北海道拓殖銀行監理官ヲ置キ主務大臣ノ指揮ヲ承ケテ北海道拓殖銀行ノ業務ヲ監視セシム

第二十四條 北海道拓殖銀行監理官ハ何時ニテモ北海道拓殖銀行ノ金庫、券書庫、帳簿及諸般ノ文書ヲ検査スルコトヲ得

北海道拓殖銀行監理官ハ監視上必要ナリト認ムルトキハ何時ニテモ北海道拓殖銀行ニ命シテ營業ニ關スル諸般ノ景況及計算報告書ヲ差出サシムルコトヲ得

北海道拓殖銀行監理官ハ株主總會其ノ他諸般ノ會議ニ出席シテ意見ヲ陳述スルコトヲ得

第二十五條 政府ハ百萬圓ヲ限度トシ北海道拓殖銀行ノ株式ヲ引受クヘシ

第二十六條 前條ニ依リ政府ノ引受ケタル株式ニ對シテハ北海道拓殖銀行ハ其ノ創立初期ノ末日ヨリ十箇年間ハ利益配當ヲ爲スコトヲ要セス

第二十七條 北海道拓殖銀行ニ於テ左ノ事犯アルトキハ取締役ヲ百圓以上千圓以下ノ過料ニ處ス

一 第十條ノ規定ニ反シ此ノ法律ニ記載セサル義務ヲ營ミタルトキ

二 第十二條ノ規定ニ反シ債券ヲ發行シタルトキ但シ第十五條第一項ニ依レルモノハ此ノ限ニアラス

三 第十三條第十四條及第十五條第二項ノ規定ニ反シ債券ノ償還ヲ爲ササルトキ

四 本法ニ於テ認可ヲ受クヘキ場合ニ其ノ認可ヲ受ケサルトキ

第二十八條 北海道拓殖銀行ノ取締役第六條ノ規定ヲ犯シタルトキハ二十圓以上二百圓以下ノ過料ニ處ス

第二十九條 北海道拓殖銀行ノ發行スル債券ヲ偽造又ハ變造シテ行使シタル者ハ刑法第二百四條ノ例ニ依リ處罰ス其ノ模造ニ關シテハ明治二十八年法律第二十八號通貨及證券模造取締法ニ依リ處分ス

附則

第三十條 主務大臣ハ北海道拓殖銀行設立委員ヲ置キ北海道拓殖銀行ノ設立ニ關スル一切ノ事務ヲ處理セシム

第三十一條 設立委員ハ定款ヲ作り主務大臣ノ認可ヲ受ケタル後株主ヲ募集ス

第三十二條 設立委員ハ株主ノ募集ヲ終リタルトキハ株式申込證ヲ主務大臣ニ提出シ銀行設立ノ認可ヲ稟請スヘシ

前項ノ認可ヲ受ケタルトキハ設立委員ハ遲滞ナク各株式ニ付第一回ノ拂込ヲ爲サシムルコトヲ要ス

第三十三條 創立總會終結シタルトキハ設立委員ハ其ノ事務ヲ北海道拓殖銀行取締役ニ引渡スヘシ

第三十四條 北海道拓殖銀行ニ關シ此ノ法律ニ規定セサル事項ハ明治二十三年法律第七十二號銀行條例ヲ適用ス

○ 銀行條例 明治二十三年八月法律第七十二號

朕銀行條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

銀行條例

第一條 公ニ開キタル店舗ニ於テ營業トシテ證券ノ取引ヲ爲シ又ハ爲替事業ヲ爲シ又ハ諸預リ及貸付ヲ併セ爲ス者ハ何等ノ名稱ヲ用井ルニ拘ラス總テ銀行トス

第二條 銀行ノ事業ヲ營メントスル者ハ其資本金額ヲ定メ地方長官ヲ經由シテ大藏大臣ノ認可ヲ受クヘシ

三十二年大藏省令第二十號施行細則ヲ定ム

銀行ノ事業ヲ營ム會社ニシテ合併セントスルトキハ大藏大臣ノ許可ヲ受クヘシ(三十三年法律第五號ヲ以テ本項追加)

第三條 銀行ハ每半年簡年營業ノ報告書ヲ製シ地方長官ヲ經由シテ大藏大臣ニ送付スヘシ(三十三年法律第五號ヲ以テ條中別除)

第四條 銀行ハ每半年簡年貸借對照表ヲ製シ新聞紙其他ノ方法ヲ以テ之ヲ公告スヘシ(三十三年法律第五號ヲ以テ條中別除)

第五條 銀行ノ登記スヘキ事項ニシテ大藏大臣ノ認可ヲ要スルモノアルトキハ其ノ認可書ノ到達シタル日ヨリ登記ノ期間ヲ起算ス(二十八年法律第一號ヲ以テ別除三十三年法律第五號ヲ以テ更正本條追加)

第六條 銀行ノ營業時間ハ午前第九時ヨリ午後三時マテトス(二十八年法律第一號ヲ以テ十時ヲ九時ニ四時ヲ三時ニ改正ス)

但營業ノ都合ニ依リ之ヲ増加スルコトヲ得

第七條 銀行ノ休日ハ大祭日、祝日、日曜日及銀行營業地ニ行ハル、定例ノ休日トス但止ヲ得サル事故アルトキハ地方長官ニ届出テ豫メ新聞紙其他ノ方法ヲ以テ公告シタル上休業スルコトヲ得

第八條 大藏大臣ハ何時タリトモ地方長官又ハ其他ノ官吏ニ命シテ銀行ノ業務ノ實況及財産ノ現況ヲ検査セシムルコトヲ得

第九條 第二條ノ規定ニ違反シ大藏大臣ノ認可ヲ受ケスシテ銀行ノ事業ヲ營ミタル時ハ其營業主、會社ノ業務ヲ執行スル社員、取締役、外國會社ノ代表者ヲ十圓以上五百圓以下ノ過料ニ處ス(三十二年法律第五十二號ヲ以テ改正)

第十條 銀行ニ於テ第三條ノ報告若ハ第四條ノ公告ヲ爲サス又ハ其報告中若ハ公告中ニ詐偽ノ陳述

ヲ爲シ若ハ事實ヲ隱蔽シタルトキハ其營業主、會社ノ業務ヲ執行スル社員、取締役、外國會社ノ代表者ヲ五圓以上五百圓以下ノ過料ニ處ス(上全)

第八條ノ検査ヲ受クルコトヲ拒ミタルトキハ其營業主、會社ノ業務ヲ執行スル社員、取締役、外國會社ノ代表者ヲ十圓以上五百圓以下ノ過料ニ處ス(上全)

第十一條 此條例ハ日本銀行橫濱正金銀行國立銀行ニ適用セス

○貯蓄銀行條例明治二十三年八月法律第七十三號

朕貯蓄銀行條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

貯蓄銀行條例

第一條 複利ノ方法ヲ以テ公衆ノ爲ニ預金ノ事業ヲ營ム者ヲ貯蓄銀行トス

銀行ニ於テ新ニ一口五圓未満ノ金額ヲ定期預リ若ハ當座預リトシテ引受ルトキハ貯蓄銀行ノ業務ヲ營ム者ト爲シ此條例ニ依ラシム

第二條 資本金三萬圓以上ノ株式會社ニアラサレハ貯蓄銀行ノ業務ヲ營ムコトヲ得ス

第三條 貯蓄銀行ノ取締役ハ在任中ニ生シタル銀行ノ義務ニ付連帶無限ノ責任ヲ負フモノトス

但其責任ハ退任後二箇年ノ滿了ニ因リテ消滅ス(二十八年法律第十號ヲ以テ改正ス)

二十八年大藏省訓令第三十號  
省令第一號  
以テ本條例施行細則ヲ定ム

第四條 貯蓄銀行ハ貯蓄預金拂戻ノ擔保トシテ預金總高ノ四分ノ一ヨリ少ナカラサル金額ヲ利付國  
債證書又ハ地方債證券ニテ備ヘ置キ之ヲ供託所ニ預ケ入ルヘシ(二十八法律第七號  
ヲ以テ但書トモ改正ス)

但擔保金額カ資本金半額以上ニ及フトキハ商業手形及確實ナル會社ノ債券又ハ株券等ヲ用井ル  
コトヲ得

第五條 前條ノ金額ハ每半箇年末日現在ノ預金高ニ依リ之ヲ定ム(二十八法律第十  
七號ヲ以テ改正ス)

第六條 預ケ人ハ第四條ノ供託諸證券ニ就キ優先權ヲ有ス(二十八法律第十  
七號ヲ以テ改正ス)

第七條 貯蓄銀行ニ於テ其定款ヲ變更セントスルトキハ地方長官ヲ經由シテ大藏大臣ノ認可ヲ受ク  
ヘシ

第八條 銀行ニシテ貯蓄銀行ノ事業ヲ營マントスルトキハ地方長官ヲ經由シテ大藏大臣ノ認可ヲ受  
クヘシ

第九條 貯蓄銀行ニシテ此條例ノ規定ニ違反シタルトキハ其取締役ヲ五十圓以上五百圓以下ノ罰金  
ニ處ス

貯蓄銀行ニアラスシテ貯蓄銀行ノ業ヲ營ミタルトキハ營業主又ハ會社ノ業務擔當社員若ハ取締役  
ヲ前項ノ罰ニ處ス

第十條 此條例ニ特別ノ規定ヲ設ケサルモノハ總テ銀行條例ニ依ル

○

○銀行ニ關スル法律ニ定メタル過料適用方明治三十三年三月  
法律第五十三號

朕帝國議會ヲ協贊ヲ經タル銀行ニ關スル法律ニ定メタル過料ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公  
布セシム

銀行ニ關スル法律ニ於テ定メタル過料ニ付テハ非訟事件手續法第二百六條乃至第二百八條ノ規  
定ヲ準用ス

○

○取引所法明治二十六年三月  
法律第五號

沿革略記 明治七年十月第七號布告ヲ以テ株式取引所條例ヲ制定ス○全年十二月第百三十八號布告ヲ以テ從來各地方  
ノ米油限月賣買ヲ禁止メ自今會社ヲ結ヒ米穀賣買相取引ヲ爲サントスル者ハ是歲十月第七號布告ノ方法ニ  
倣ヒ會社規則取調其管轄縣ヲ經テ大藏省ヘ出願許可ヲ得ヘキモノトス○九年八月第百五號布告ヲ以テ米商會所條例ヲ  
制定ス○十一年五月第八號布告ヲ以テ七年第百七號布告ヲ廢シ更ニ株式取引所條例ヲ制定ス○二十年五月勅令第十一  
號ヲ以テ取引所條例ヲ制定ス○二十六年三月法律第五號ヲ以テ株式取引所條例米商會所條例及ヒ取引所條例ヲ廢止シ  
更ニ取引所法ヲ制定ス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル取引所法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

取引所法

第一章 取引所ノ設立

第一條 賣買取引ノ繁盛ナル地區内ノ商人ハ政府ノ免許ヲ受ケテ一種若ハ數種ノ物件ノ取引所ヲ設  
立スルコトヲ得

二十六年農商  
務省令第十三  
號ヲ以テ本法  
ノ施行規則ヲ  
定ム

第二條 同種ノ物件ヲ賣買取引スル取引所ハ一地區一箇所ニ限リ設立スルコトヲ得但シ其ノ地區ハ農商務大臣之ヲ定ム

第三條 取引所ノ免許年限ハ十箇年トス但シ土地商業ノ情況ニ依リ更ニ繼續ノ出願ヲ爲スコトヲ得

第四條 株式會社組織ノ取引所ハ營業保證金ヲ政府ニ納ムヘシ

第二章 取引所ノ組織

第五條 取引所ハ土地商業ノ情況及賣買取引スヘキ物件ノ種類ニ依リ會員組織又ハ株式會社組織ト爲スコトヲ得

第六條 會員組織ノ取引所ニ於テハ其取引所ノ仲買人及會員ニ限リ賣買取引ヲ爲スコトヲ得

株式會社組織ノ取引所ニ於テハ其ノ取引所ノ仲買人ニ限リ賣買取引ヲ爲スコトヲ得

第七條 取引所ハ法人トシテ財産ヲ所有シ及之ヲ處分スルコトヲ得

取引所ノ責任ハ其ノ財産ニ限ルモノトス

第八條 取引所ハ政府ノ認可ヲ受ケ其ノ營業部類ニ屬スル商品ノ倉庫ヲ設置シ及指圖式ノ倉荷證書ヲ發行スルコトヲ得

取引所ハ其倉荷證書ニ對シ前貸ヲ爲シ又ハ買受クルコトヲ得ス

第九條 取引所ノ定款ハ政府ノ認可ヲ受クヘシ

第三章 取引所ノ會員、株主及仲買人

第十條 一箇年以上取引所ノ營業部類ニ屬スル商業ニ從事シタル商人ハ定款ノ規程ニ從ヒ其ノ取引

所ノ會員トナルコトヲ得

二箇年以上其ノ取引所ノ營業部類ニ屬スル商業ニ從事シタル商人ニシテ年齢二十五歳以上ノ者ハ政府ノ免許ヲ受ケ其ノ取引所ノ仲買人トナルコトヲ得

一種ノ商業ニ付前項ノ資格ヲ有スル者ハ土地商業ノ情況ニ依リ二種以上ノ物件ヲ賣買取引スル取引所ノ仲買人タル免許ヲ受クルコトヲ得

第十一條 帝國臣民ニ非サレハ取引所ノ會員又ハ仲買人トナルコトヲ得ス(三十二年法律第五十八號ヲ以テ會員ノ下株主ノ二字ヲ削除)

婦女、未成年者、公權剝奪及停止中ノ者、復讐セサル破産者及家資分散者並ニ取引所ニ於テ除名ノ處分ヲ受ケタル者ハ取引所ノ會員タルコトヲ得ス

重懲罰一年以上ノ刑ニ處セラレ又ハ信用ヲ害スル罪、財産ニ對スル罪、商業及農工業ヲ妨害スル罪ヲ犯シテ刑ニ處セラレ其ノ滿期若ハ赦免後二箇年ヲ經サル者及前項ニ該當スル者ハ取引所ノ仲買人タルコトヲ得ス

第十二條 取引所ノ會員ハ自己ノ計算ヲ以テスルノ外取引所ニ於テ賣買取引ヲ爲スコトヲ得ス

仲買人ハ自己ノ計算ヲ以テスルト他人ノ計算ヲ以テスルトヲ問ハス取引所ニ對シ其ノ賣買取引上一切ノ責任ヲ負フヘシ

第十三條 取引所ノ仲買人ハ其ノ免許ヲ受クルトキ免許料ヲ納ムヘシ

免許料ノ金額ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十四條 取引所ノ會員及仲買人ハ身元保證金ヲ其ノ取引所ニ納ムヘシ

第二十六年勅令  
第七十四號  
以テ免許料ノ額  
金額ヲ定ム  
令ハ本額ニ減  
ス



第十五條 取引所ハ其ノ秩序ヲ保持スルカ爲定款ノ規定ニ依リ會員又ハ仲買人ノ營業ヲ停止シ五百圓以内ノ過意金ヲ課シ且政府ノ認可ヲ受ケ會員又ハ仲買人ヲ除名スルコトヲ得

第四章 取引所ノ役員

第十六條 取引所ノ役員ハ定款ノ規定ニ依リ會員又ハ株主中ヨリ二箇年以内ノ任期ヲ以テ之ヲ選舉シ政府ノ認可ヲ受クヘシ

取引所ノ役員左ノ如シ

理事長 一人

理事 二人以上

監査役 若干人

理事長及理事ハ會員ニ非ザル者ヲ選舉スルモ妨ケナシ

第十一條 第三項ニ該當スル者ハ取引所ノ役員ト爲スコトヲ得ス

第十七條 取引所ノ役員及雇人ハ其ノ取引所ニ於テ賣買取引ヲ爲スコトヲ得ス但シ監査役ハ此ノ限ニ在ラス

第五章 取引所ノ賣買取引

第十八條 取引所ノ賣買取引ハ直取引、延取引及定期取引ノ三種トス

第十九條 取引所ノ賣買取引ノ方法ニ關スル規定ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第二十條 取引所ハ其ノ定款ニ依リ賣買取引ニ付證據金ヲ納メシムルコトヲ得

第二十一條 取引所ハ賣買取引ノ責任ヲ履行セサル者アルトキハ其ノ證據金及身元保證金ヲ以テ損害賠償ノ用ニ供スルコトヲ得

第二十二條 株式會社組織ノ取引所ハ賣買取引ノ違約ヨリ生スル損害ニ付賠償ノ責ニ任スヘシ

前項ノ場合ニ於テ取引所ハ其ノ賠償シタル金額及之ニ關スル諸費ノ追償ヲ其ノ違約者ニ要求スルコトヲ得

第二十三條 取引所ハ賣買取引高ニ應ジ賣買雙方ヨリ手数料ヲ徵收スルコトヲ得其ノ率ハ政府ノ認可ヲ受クヘシ

第二十四條 取引所ハ證據金及身元保證金ニ付他ノ債主ニ對シ優先權ヲ有ス

第二十五條 取引所外ニ於テ取引所ノ定期取引ト同一又ハ類似ノ方法ヲ以テ賣買取引ヲ爲スコトヲ得

第二十六條 取引所ニ於テ賣買取引シタル物件ノ相場ハ公定相場トス

第六章 取引所ノ監督

第二十七條 農商務大臣ハ取引所ノ行爲法律命令ニ違反シ又ハ公益ヲ害シ若ハ公衆ノ安寧ニ妨害アリト認ムルトキハ左ノ處分ヲ爲スコトヲ得

一 取引所ノ解散

二 取引所ノ停止

三 取引所一部ノ停止若ハ禁止

四 役員ノ解職

五 會員又ハ仲買人ノ營業停止若ハ除名

第二十八條 農商務大臣ハ必要ト認ムルトキハ官吏ヲシテ取引所ノ業務、帳簿、財産其ノ他一切ノ物件及會員又ハ仲買人ノ帳簿ヲ検査セシムルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ取引所ノ役員會員及仲買人ハ其ノ物件ヲ提供シ質問ニ應答スヘシ

第二十九條 農商務大臣ハ必要ト認ムルトキハ取引所ノ定款ヲ改正セシメ又ハ其ノ決議及處分ヲ停止シ、禁止シ若ハ取消スコトヲ得

第三十條 取引所任意ノ解散ハ政府ノ認可ヲ受クヘシ

第七章 罰則

第三十一條 第十二條第一項及第十七條ノ規定ニ違背シタル者ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十二條 第二十五條ニ違背シタル者及公定相場ヲ偽リタル者ハ五十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

附則

第三十三條 取引所ノ稅則ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第三十四條 取引所ノ資本金、營業保證金、株式、手数料及積立金ニ關スル規程ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第三十五條 本法ハ明治二十六年十月一日ヨリ施行ス

明治九年布告第百五號米商會所條例、明治十一年布告第八號株式取引所條例、明治二十年勅令第十一號取引所條例、明治十三年布告第二十一號、明治十五年布告第四十六號、明治十六年布告第四號及同年布告第二十九號ハ本法施行ノ日ヨリ廢止ス

第三十六條 本法發布以前ヨリ營業スル米商會所、株式取引所及取引所ハ本法ニ依リ更ニ免許ヲ受ケ其ノ營業ヲ繼續スルコトヲ得但シ本法施行ノ日ヨリ二箇月以前ニ於テ出願ノ手續ヲ爲サ、ルモノハ此ノ限ニ在ラス

○取引所ノ資本金、營業保證金、株式、手数料、積立金及買賣取引ノ方法ニ關スル規程並ニ仲買人  
免許料金額ヲ定ム明治二十六年七月  
勅令第七十四號

朕取引所ノ資本金、營業保證金、株式、手数料、積立金及買賣取引ノ方法ニ關スル規程並ニ仲買人  
免許料金額ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 株式會社組織ノ取引所ノ資本金ハ三萬圓以上トス

農商務大臣ハ買賣取引ノ狀況ニ因リ必要ト認ムルトキハ資本金額ヲ増加セシムルコトヲ得

第二條 會員組織ノ取引所ノ創設及維持ノ資本金ハ其會員ノ酬金ヲ以テ之ニ充ツハシ解散ノ場  
合ニ於テ存留スル資本及其他ノ財産ハ一切ノ義務ヲ解除シタル後ニ於テ現時ノ各會員ニ平分  
スヘシ

第三條 取引所ニシテ倉庫ヲ設置スルトキハ其倉庫ニ關スル資本金ハ第一條及第二條ノ資本金以外ニ之ヲ増加スヘシ

第四條 株式會社組織ノ取引所ノ營業保證金額ハ其資本金額ノ三分ノ一トス但倉庫ノ爲メ増加シタル資本金ハ之ヲ算入セス

營業保證金ハ營業開始前大藏省「預金局」預金ノ證書若クハ國債地方債證券ヲ以テ其全額ヲ地方廳ニ納ムヘシ但國債地方債證券ヲ以テ納入スル場合ニ於テハ其價格ハ農商務大臣ノ指定スル所ニ依ルヘシ

資本金増額ノ場合ニ於テ増納スヘキ營業保證金ハ農商務大臣ノ指定スル日限マテニ其手續ヲ爲スヘシ

第五條 取引所ノ資本金ノ各株式ハ其株金ノ半額以上拂込前ニ讓渡ヲ爲スコトヲ得ス

第六條 會員組織ノ取引所ニ於テハ利益ヲ會員ニ分配スルノ目的ヲ以テ手数料ヲ徵收スルコトヲ得ス

第七條 取引所ニ於テ賣買雙方ヨリ徵收スル手数料ハ取引所ノ組織、賣買ノ物件、賣買ノ方法及賣買ノ狀況ニ應ジ賣買約定代金ノ千分ノ八ヲ超過スルコトヲ得ス

農商務大臣ハ必要ト認マルトキハ前項ノ定限以内ニ於テ取引所ノ手数料ノ率ヲ改定セシムルコトヲ得

第八條 會員組織ノ取引所ハ毎年其總收入金ノ二十分ノ一ニ相當スル金額ヲ準備ノ積立金トシ

テ積置クヘシ但準備ノ積立金額資本金額ノ四分ノ一以上ニ達シタルトキハ農商務大臣ノ認可ヲ受ケ其積立ヲ停止シ若クハ其積立金額ノ率ヲ減少スルコトヲ得

第九條 取引所ノ準備ノ積立金ヲ支出セントスルトキハ農商務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第十條 取引所ハ毎日一定ノ時間ニ於テ直取引、延取引及定期取引ノ市場ヲ開閉スヘシ但定款ヲ以テ定例及臨時休業ヲ爲スノ場合ヲ規定スルコトヲ得

第十一條 取引所ノ賣買取引ノ契約ハ現物、見本又ハ銘柄ニ依リ取結ンヘシ

第十二條 取引所ノ賣買取引ノ契約履行ノ期限ハ當日ヨリ起算シ直取引ハ五日以内延取引ハ百五十日以内賣買雙方約定ノ日限ニ依リ定期取引ハ三箇月以内取引所指定ノ限月ニ依ルヘシ

第十三條 取引所ノ定期取引ニ限リ左ノ方法ヲ用ウルコトヲ得

- 一 單位ヲ定メテ賣買スルノ方法
  - 二 競賣買ヲ爲スノ方法
  - 三 米ニ限リ標準物ヲ以テ賣買契約ヲ爲シ取引所ニ於テ豫メ指定スル同種商品ノ格付ニ從ヒ代品ヲ以テ受渡ヲ爲スノ方法
  - 四 契約期限内ニ於テ爲シタル轉賣買戻ヲ取引所ノ帳簿ニ記載スル所ニ依リ相殺スルノ方法
  - 五 賣買雙方ヨリ證據金ヲ差出サシムルノ方法
- 取引所ハ特ニ農商務大臣ノ認可ヲ受ケ直取引及延取引ニ於テモ亦賣買雙方ヨリ證據金ヲ差出サシムルノ方法ヲ用ウルコトヲ得

第十四條 取引所ニ於テ賣買取引ノ契約ヲ爲シタルトキハ賣買雙方ノ氏名賣買品ノ數量及其價格ヲ取引所ノ帳簿ニ記載スヘシ

第十五條 賣買取引ノ物件代金ノ受渡ハ取引所ノ役員立會ノ上執行スヘシ

第十六條 取引所ノ仲買人免許料ノ金額ハ拾圓トス

○特許法 明治三十二年三月 法律第三十六號

沿革略記 明治四年四月新發明品專賣規則ヲ定ム 五年三月第五號布告ヲ以テ專賣規則ヲ當分廢止シ向後雜物品新發明スル者アルニ於テハ地方官ニテ發明品及其工夫ノ手續等取調上郡省へ届出サシム 十八年四月第七號布告ヲ以テ前令ヲ廢シ更ニ專賣特許條例ヲ定ム 二十一年十二月勅令第八十四號ヲ以テ前令ヲ廢シ特許條例ヲ定ム 三十二年三月法律第三十六號ヲ以テ特許法ヲ定メ前條例ヲ廢止ス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル特許法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

特許法

第一條 工業上ノ物品及方法ニ關シ最先ノ發明ヲ爲シタル者若ハ其ノ承繼人ハ此ノ法律ニ依リ特許ヲ受ケルコトヲ得

物品ノ發明ニ係ル特許ハ特許ヲ受ケタル者ニ限り其ノ發明ノ物品ヲ製作、使用、販賣若ハ擴布スルノ權利ヲ有セシム

方法ノ發明ニ係ル特許ハ特許ヲ受ケタル者ニ限り之ヲ使用若ハ擴布スルノ權利ヲ有セシム但其ノ

特許ノ効力ハ同一方法ニ依リ製作セラレタル物品ニ及ブモノトス

第二條 左ニ掲クル發明ハ特許ヲ受クルコトヲ得ス

- 一 飲食物、嗜好物
- 二 醫藥又ハ其ノ調合法
- 三 秩序又ハ風俗ヲ紊ルノ虞アルモノ
- 四 特許出願前公ニ知ラレ又ハ公ニ用非ラレタルモノ但シ試驗ノ爲ニ二年以内公ニ知ラレタルモノハ此ノ限ニアラス

第三條 特許ノ年限ハ十五年トシ原簿登錄ノ日ヨリ起算ス

第四條 特許ハ制限ヲ付シ若ハ付セスシテ讓渡シ、共有ト爲シ又ハ質權ノ目的ト爲スコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ特許局ニ請求シ其ノ登錄ヲ受クルニ非サレハ之ヲ以テ第三者ニ對抗スルコトヲ得ス

第五條 特許局ノ官吏ハ在職中特許ヲ有スルコトヲ得ス但シ相續ニ因リ之ヲ取得シ又ハ在職前ヨリ之ヲ有スルトキハ此ノ限ニアラス

第六條 特許ニ關シ出願若ハ請求ヲ爲サントスル者又ハ特許證主ニシテ帝國内ニ住所ヲ有セザルトキハ帝國内ニ住所ヲ有スル者ニ就キ代理人ヲ定ムヘシ

前項代理人ハ此ノ法律及之ニ基キテ發スル命令ノ定ムル所ニ依リ特許局ニ對シテ爲スヘキ手續又ハ特許ニ關スル民事訴訟及告訴ニ付本人ヲ代表スルモノトス

第七條 特許局長ハ特許ニ關スル代理人ヲ適當ナラスト認ムルトキハ其ノ改任ヲ命スルコトヲ得

第八條 特許ニ關スル代理ヲ常業トスル者ハ特許局長ニ願出登錄ヲ受クヘシ

代理業者ノ登錄ニ關スル規定ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第九條 前條ニ依リ登錄ヲ受ケタル代理業者ニシテ其ノ業務ニ關シ犯罪又ハ不正ノ行爲アリタルト

キハ特許局長ハ其ノ代理業ヲ停止又ハ禁止スルコトヲ得

第十條 特許ニ關シ出願又ハ請求ヲ爲シタル者此ノ法律若ハ之ニ基キテ發スル命令ノ定ムル期間内

又ハ此ノ法律若ハ之ニ基キテ發スル命令ニ依リ特許局長若ハ審判長ノ定ムル期間内ニ成規又ハ指

定ノ手續ヲ爲ササルトキハ其ノ出願又ハ請求ハ無効トス

第十一條 特許ヲ受ケントスル者ハ一發明毎ニ發明ノ明細書及必要ノ圖面ヲ添ヘ特許局長ニ出願ス

ヘシ

特許局長ハ出願者ニ對シ必要ト認ムルトキハ雛形若ハ見本ノ提出ヲ命スルコトヲ得

第十二條 特許ヲ出願シタルトキハ特許局審査官其ノ發明ヲ審査ス

第十三條 審査官ニ於テ特許ヲ與フヘキモノト査定シタルトキハ特許局長ハ特許原簿ニ登錄シ特許

證ヲ下付ス

特許證ニハ特許局長之ニ署名シ明細書及必要ノ圖面ヲ添付ス

第十四條 工業所有權保護同盟條約國ニ於テ發明ノ特許ヲ出願シタル者七箇月以内ニ同一發明ニ付

特許ヲ出願シタルトキハ其ノ出願ハ最初出願ノ日ニ於テ之ヲ爲シタルト同一ノ效力ヲ有ス

第十五條 政府若ハ府縣ノ開設シタル博覽會若ハ共進會ニ出品スル者ニシテ他日其ノ物品ニ付發明

ノ特許ヲ出願セントスルトキハ出品前ニ於テ其ノ旨ヲ特許局長ニ届出ヘシ

前項ノ場合ニ於テハ博覽會若ハ共進會ニ於テ其ノ物品ヲ受領セシ日ヨリ六箇月以内ニ特許ヲ出願

シタル者ニ限リ最初届出ノ日ニ於テ其ノ出願ヲ爲シタルト同一ノ效力ヲ有ス

工業所有權保護同盟條約國ニ於テ萬國博覽會ノ開設アルニ當リ其ノ國ニ於テ出品ニ對シ與ヘタル

特許出願ノ期間ハ帝國内ニ於テモ有效トス

第十六條 公益ノ爲普及ヲ要スルモノ又ハ軍事上必要ナルモノ若ハ秘密ヲ要スルモノニ係ル發明ニ

シテ特許局長ニ於テ必要ト認メタルトキ又ハ主務官廳ヨリ請求アリタルトキハ特許局長ハ特許ニ

制限ヲ付シ若ハ特許ヲ與ヘス又ハ既ニ與ヘタル特許ヲ制限シ若ハ之ヲ取消スコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ政府ハ相當ノ報酬ヲ特許出願者又ハ特許證主ニ與フヘキモノトス

第十七條 他人ノ特許發明ヲ利用シテ爲シタル發明ニ付特許ヲ出願シタル者特許ノ査定ヲ得タルト

キハ原特許證主ニ協議シ其ノ發明ヲ使用スルノ承諾ヲ受クヘシ

發明者前項ノ承諾ヲ得ルコト能ハサルトキハ其ノ事由ヲ具シ特許局長ニ申告スヘシ特許局長ニ於

テ正當ノ理由アリト認ムルトキハ其ノ利用發明ニ對シ特許ヲ與フルコトヲ得但シ原特許證主ニ對

シ特許局長ノ相當ト認ムル報酬ヲ拂フニ非サレハ其ノ特許ヲ實施スルコトヲ得ス

第十八條 前二條ノ報酬額ニ對シ不服アル者ハ裁判所ニ出訴スルコトヲ得但シ第十六條ノ場合ニ於

テハ之カ爲處分ヲ停止セス

第十九條 特許證主ハ自己ノ特許發明ヲ利用シテ爲シタル發明ニ對シ追加特許ヲ受クルコトヲ得  
追加特許ハ原特許ニ從ヒ移轉若ハ消滅スルモノトス

第二十條 特許ヲ受ケタル發明ニシテ左ノ場合ニ該當スルモノアルトキハ其ノ特許ヲ無効トス

- 一 第一條及第二條ニ違反シタルモノ
- 二 發明ノ實施ニ必要ナル事項ヲ故意ニ明細書ニ記載セザリシモノ
- 三 發明ノ實施ニ必要ナラサル事項ヲ故意ニ明細書ニ記載セシモノ

第二十一條 審査官ニ於テ特許ヲ與フヘカラスト査定シタルトキハ特許局長ハ其ノ査定書ヲ出願人ニ送付スヘシ

第二十二條 審査官ニ於テ特許出願ノ發明カ他人ノ特許出願中ノ發明又ハ他人ノ特許發明ト抵觸スト査定シタルトキハ特許局長ハ其ノ査定書ヲ關係人ニ送付スヘシ

第二十三條 前二條ノ査定ニ不服アル者ハ査定書到達ノ日ヨリ六十日以内ニ特許局ニ不服理由書ヲ差出シ再審査ヲ請求スルコトヲ得

再審査ヲ請求スル者アルトキハ特許局長ハ前査定ニ干與セサル審査官ヲシテ更ニ之ヲ審査セシムヘシ

審査官其ノ不服理由ヲ不當ト査定シタルトキハ特許局長ハ其ノ査定書ヲ不服者ニ送付スヘシ

第二十四條 發明抵觸ノ査定確定シタルトキハ特許局長ハ關係人ヨリ發明ニ關スル始末書ヲ徴シ審査官ヲシテ發明完成ノ前後ヲ審査セシメ其ノ査定書ヲ關係人ニ送付スヘシ

第二十五條 前條ニ依リ既ニ與ヘタル特許ヲ取消シ出願ノ發明ニ特許ヲ與フルトキハ其ノ特許年限ハ前特許登錄ノ日ヨリ起算ス

第二十六條 特許證主其ノ明細書若ハ圖面ノ不完全ナルコトヲ發見シタルトキハ改訂明細書若ハ圖面ヲ添ヘ特許證ノ改訂ヲ出願スルコトヲ得一箇ノ特許證ヲ分割シテ二箇以上ト爲スノ必要アルコトヲ發見シタルトキ亦同シ但シ發明ノ要部ヲ變更スルモノハ此ノ限ニアラス

第二十七條 前條ノ出願アリタルトキハ審査官之ヲ審査ス

前項ノ場合ニ於テ審査官ノ査定ニ不服アル者ハ第二十三條ニ依リ再審査ヲ請求スルコトヲ得

第二十八條 第二十三條及第二十七條ノ再査定ニ不服アル者ハ査定書到達ノ日ヨリ六十日以内ニ特許局ニ審判ヲ請求スルコトヲ得

第二十四條ノ査定ニ不服アル者亦前項ニ同シ

第二十九條 二箇以上ノ特許發明互ニ撞著シ又ハ特許發明ト特許ヲ受ケサル物品若ハ方法ト撞著スルコトヲ發見シタルトキハ利害關係人ハ權利ヲ確認スル爲メ特許局ニ審判ヲ請求スルコトヲ得

第三十條 特許ヲ受ケタル發明第二十條ニ該當スルコトヲ發見シタル者ハ其ノ特許ヲ無効トスル爲メ特許局ニ審判ヲ請求スルコトヲ得

第三十一條 特許局ノ審査、審判及報酬額ノ決定ニ關シ必要アルトキハ特許局ハ當事者ノ中立ニ因リ證據調ヲ爲シ又ハ所要ノ事務ヲ取扱フヘキ地ノ區裁判所ニ證據調ヲ囑託スルコトヲ得  
前項證據調ニ關シテハ民事訴訟法第三編第一章第五節乃至第十一節ノ規定ヲ準用ス

第三十二條 特許局ニ於テ審判スヘキ事件ハ審判官三人若ハ五人ヲ以テ之ヲ審判ス其ノ三人若ハ五人中ノ一人ヲ審判長トス

審判ノ審決ニハ理由ヲ付スルコトヲ要ス

第三十三條 審判ハ正副二通ノ審判請求書ヲ以テ之ヲ請求スヘシ審判請求書ニハ理由ヲ付スルコトヲ要ス

特許局ニ於テ審判請求書ヲ受理シタルトキハ其ノ副本ヲ被請求人ニ送付シ相當ノ期間ヲ指定シテ正副二通ノ答辯書ヲ差出サシムヘシ

特許局ハ必要ト認ムル場合ニ於テ期限ヲ付シテ更ニ請求人、被請求人ヨリ辯駁書、答辯書ヲ差出サシムルコトヲ得

審判長ハ職權又ハ當事者雙方ノ申立ニ因リ口頭審判ヲ爲スコトヲ得

口頭審判ハ公開スルモノトス

第三十四條 請求人若ハ被請求人成規又ハ指定ノ期間内ニ答辯書若ハ辯駁書ヲ差出ササルトキ又ハ辯論期日ニ出頭セサルトキハ審判長ハ相手方ノ意見ヲ聽キ審判ヲ終結スルコトヲ得

第三十五條 第二十八條第二項第二十九條及第三十條ノ請求ニ因ル審決ニ對シ不服アル者ハ其ノ審決カ法律ヲ適用セス又ハ不當ニ適用シタルコトヲ理由トズルトキニ限り審決書到達ノ日ヨリ六十日以内ニ大審院ニ出訴スルコトヲ得

前項ノ訴及裁判ニ付テハ民事訴訟ノ上告及其ノ裁判ニ關スル規定ヲ準用ス

第三十六條 大審院ニ於テ出訴ノ理由アリト認ムルトキハ原審決ヲ破毀シ更ニ審判ヲ爲サシムル爲事件ヲ特許局ニ差戻スヘシ

大審院ニ於テ裁判ヲ爲ズニ當リ法律ノ點ニ付表シタル意見ハ其ノ事件ニ關シ特許局ヲ羈束スルモノトス

第三十七條 第二十八條第二項第二十九條及第三十條ノ請求ニ因ル審判ニ關スル費用ノ負擔及其費用額ハ審判長之ヲ決定ス

大審院ニ於テ費用ノ負擔ヲ言渡シタル場合ニ於ケル費用額ニ付テモ亦同シ

前二項ノ費用ニ關シテハ民事訴訟法第七十二條乃至第八十二條第八十六條及民事訴訟費用法ヲ準用ス

第三十八條 特許ヲ受ケタル發明ニシテ左ノ場合ニ該當スルモノアルトキハ特許局長ニ於テ其ノ特許ヲ取消スコトヲ得

一 特許證主正當ノ事故ナクシテ特許證ノ日付ヨリ三年ヲ經ルモ帝國內ニ於テ其ノ發明ヲ實施公行セサル場合又ハ三年以上其ノ實施公行ヲ中止シタル場合ニ於テ第三者ヨリ相當ノ條件ヲ付シテ其ノ讓受者ハ使用ヲ請求スルモ之ヲ拒絶シタルトキ

二 特許證主特許料納付期限後六十日ヲ經過スルモ仍其ノ納付ヲ怠リタルトキ

三 特許證主正當ノ事故ナクシテ六箇月以上第六條ノ代理人ヲ置カサルトキ

第三十九條 特許證主ハ特許料トシテ各特許ニ付毎年金十圓ヲ納ムヘシ

前項特許料ハ三年毎ニ金五圓ヲ増スモノトス

特許證主追加特許ヲ受ケタルトキハ追加特許料トシテ一時ニ金二十圓ヲ納ムヘシ

第四十條 特許料ハ毎年一年分ヲ特許證ノ日付ニ應當スル日ニ於テ前納スヘシ第一年ニ係ルモノ及追加特許料ハ特許査定書到達ノ日ヨリ六十日以内ニ之ヲ納ムヘシ

前納セシ特許料ハ之ヲ還付セス但シ一時ニ二年分以上ノ特許料ヲ前納シタル場合ニ於テハ未タ其ノ納付期限ニ至ラサルモノニ限り之ヲ還付ス

第四十一條 特許證主ハ其ノ特許品ニ特許ノ標記ヲ付スヘシ

第四十二條 特許局ハ特許公報ヲ發行シテ特許發明ノ明細書、圖面特許證ノ改訂、特許ノ異動其ノ他ノ特許ニ關スル必要ノ事項ヲ公示スヘシ但シ秘密ヲ要スルモノハ此ノ限ニアラス

第四十三條 特許ニ關スル書類ノ謄本、圖面ノ複製又ハ特許原簿ノ一覽ヲ要スル者ハ特許局ニ請求スルコトヲ得但シ秘密ヲ要スルモノハ此ノ限ニアラス

第四十四條 證人又ハ鑑定人ニシテ特許局又ハ囑託ヲ受ケタル裁判所ニ對シ偽證又ハ詐偽ノ鑑定ヲ爲シタルトキハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

賄賂其ノ他ノ方法ヲ以テ人ニ囑託シテ偽證又ハ詐偽ノ鑑定ヲ爲サシメタル者ハ前項ニ同シ前二項ノ罪ヲ犯シタル者其ノ事件ノ査定審決若ハ決定ニ至ラサル前特許局若ハ囑託ヲ受ケタル裁

判所ニ自首シタルトキハ本刑ヲ免ス

第四十五條 他人ノ特許品ヲ偽造シタル者又ハ情ヲ知リテ偽造特許品ヲ使用シ若ハ販賣シタル者又ハ他人ノ特許方法ヲ竊用シタル者又ハ情ヲ知リ其ノ竊用シテ製造シタル物品ヲ使用若ハ販賣シタル者ハ十五日以上三年以下ノ重禁錮又ハ十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

他人ノ特許ヲ侵害スヘキ物品ナルコトヲ知リ之ヲ外國ヨリ輸入シタル者又ハ情ヲ知リテ其ノ輸入シタル物品ヲ使用シ若ハ販賣シタル者ハ前項ニ同シ

第四十六條 前條ノ場合ニ於テ沒收シタル物件ハ之ヲ特許證主ニ給付ス

第四十七條 詐偽ノ所爲ヲ以テ特許ヲ受ケタル者又ハ特許ヲ受ケサル物品ニ特許標記ヲ付シ若ハ之ニ紛ハシキ表示ヲ爲シタル者又ハ情ヲ知リ其ノ物品ヲ販賣シタル者ハ十五日以上一年以下ノ重禁錮又ハ十圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス

特許ヲ受ケサル物品ヲ販賣スル爲廣告、看板、引札等ニ於テ特許品タルニ紛ハシキ表示ヲ爲シタル者ハ前項ニ同シ

第四十八條 第四十五條ノ犯罪ハ被害者ノ告訴ヲ待テ其ノ罪ヲ論ス

第四十九條 特許證主特許標記ヲ付スルコトヲ怠リタルトキハ其ノ特許品タルコトヲ知リテ其ノ權利ヲ侵害シタル者ニ對シテノミ要償ノヲ爲スコトヲ得

第五十條 特許證主其ノ特許品ノ要部ヲ分離シテ販賣シタルトキハ其ノ販賣シタル部分ニ對シ告訴



又ハ要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得ス

第五十一條 此ノ法律ニ定メタル書類ノ送付ハ書留郵便又ハ特許局ノ使丁ヲ以テ之ヲ爲ス此ノ場合ニ於テ郵便配達人及特許局ノ使丁ハ民事訴訟法ノ送達吏ト準視ス

附則

第五十二條 此ノ法律ハ明治三十二年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

第五十三條 明治三十一年勅令第八十四號特許條例ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

專賣特許條例及特許條例ニ依テ受ケタル專賣特許若ハ特許ハ其ノ年限間此ノ法律ニ依テ受ケタル特許ト同一ノ效アルモノトス

特許ニ關スル出願又ハ請求ニシテ此ノ法律施行ノ日マテニ處分ヲ終ラサルモノハ此ノ法律ニ依リタル出願又ハ請求ト看做シ處分スヘシ

○

○意匠法明治三十二年三月法律第三十七號

沿革略記 明治二十一年十二月勅令第八十五號ヲ以テ意匠條例ヲ定ム●三十二年三月法律第三十七號ヲ以テ前條例ヲ廢止シ意匠法ヲ定ム

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル意匠法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

意匠法

第一條 工業上ノ物品ニ應用スヘキ形狀、模様、色彩又ハ其ノ結合ニ係ル新規ノ意匠ヲ按出シタル者若ハ其ノ承繼人ハ此ノ法律ニ依リ意匠ノ登録ヲ受ケ之ヲ專用スルコトヲ得

第二條 左ニ掲グル意匠ハ登録ヲ受クルコトヲ得ス

- 一 菊花御紋章ト同一若ハ類似ノ形狀、模様ヲ有スルモノ
- 二 秩序又ハ風俗ヲ紊ルノ虞アルモノ
- 三 意匠登録出願前公ニ知ラレ又ハ公ニ用サレタルモノ若ハ之ト類似スルモノ但シ自己ノ登録意匠ト類似スルモノハ此ノ限ニアラス

第三條 意匠専用ノ年限ハ十年トシ原簿登録ノ日ヨリ起算ス但シ類似意匠ノ専用年限ハ原意匠ノ有効年限ニ伴フ

第四條 意匠ノ専用ハ農商務大臣ノ定ムル類別ニ從ヒ出願人ノ指定シタル物品ニ限ル

第五條 他人ノ委託又ハ雇主ノ費用ヲ以テ按出シタル意匠ニ係ル登録出願ノ權利ハ其ノ委託者若ハ雇主ニ屬ス但シ別ニ契約アル場合ニ於テハ此ノ限ニアラス

第六條 意匠専用權ハ制限ヲ付シ若ハ付セヌシテ讓渡シ若ハ共有ト爲シ又ハ質權ノ目的ト爲スコトヲ得此ノ場合ニ於テハ特許局ニ請求シ其ノ登録ヲ受クルニ非アレハ之ヲ以テ第三者ニ對抗スルコトヲ得ス

類似意匠ヲ所有スル者ハ其ノ類似意匠ト共ニ讓渡シ共有ト爲シ又ハ質權ノ目的ト爲スニ非サレハ前項ノ登録ヲ受クルコトヲ得ス

第七條 特許局ノ官吏ハ在職中意匠専用權ヲ有スルコトヲ得ス但シ相續ニ因リ之ヲ取得シ又ハ在職前ヨリ之ヲ有スルトキハ此ノ限ニアラス

第八條 意匠ノ登録ヲ受ケントスル者ハ一意匠毎ニ其ノ意匠ヲ應用スヘキ物品ヲ明記シ雛形、見本若ハ圖面ヲ添ヘ特許局長ニ出願スヘシ

特許局長ハ出願者ニ對シ雛形、見本、圖面、説明書ノ提出ヲ命スルコトヲ得

第九條 二人以上同一又ハ相類似スル意匠ノ登録ヲ出願スル者アルトキハ出願ノ先ナルモノヲ登録ス其ノ同時ノ出願ニ係ルモノハ共ニ之ヲ登録セス但シ出願者共有ノ目的ヲ以テ連名登録ノ申出ヲ爲シタルトキ又ハ出願者一人ト爲リタルトキハ此ノ限ニアラス

第十條 工業所有權保護同盟條約國ニ於テ意匠登録ヲ出願シタル者四箇月以内ニ同一意匠ニ付登録シテ出願スルトキハ其ノ出願ハ最初出願ノ日ニ於テ之ヲ爲シタルト同一ノ效力ヲ有ス

第十一條 登録ヲ受ケタル意匠ニシテ第一條第二條第五條又ハ第九條ニ違反シタルモノナルトキハ其ノ登録ヲ無効トス

第十二條 登録ヲ受ケタル意匠ニシテ左ノ場合ニ該當スルモノアルトキハ特許局長ニ於テ其ノ登録ヲ取消スコトヲ得

一 意匠登録證主意匠料納付期限後六十日ヲ經過シ仍其ノ納付ヲ怠リタルトキ

二 意匠登録證主正當ノ事故ナクシテ六箇月以上第二十二條ニ依ル特許法第六條ノ代理人ヲ置カサルトキ

第十三條 意匠登録證主ハ意匠料トシテ各意匠ニ付第一年ヨリ第三年マテハ毎年金三圓第四年ヨリ第六年マテハ毎年金五圓第七年ヨリ第十年マテハ毎年金七圓ヲ納ムヘシ

類似意匠ノ登録ヲ受ケタルトキハ各類似意匠ニ付一時ニ金三圓ヲ納ムヘシ

第十四條 意匠料ハ毎年一年分ヲ登録證ノ日付ニ應當スル日ニ於テ前納スヘシ第一年ニ係ルモノ及前條第二項ノ意匠料ハ登録査定書到達ノ日ヨリ六十日以内ニ之ヲ納ムヘシ

前納シタル意匠料ハ之ヲ還付セス但シ一時ニ二年分以上ノ意匠料ヲ納付シタル場合ニ於テハ未タ其ノ納付期限ニ到ラサルモノニ限り之ヲ還付ス

第十五條 意匠登録證主ハ其ノ意匠ヲ應用シタル物品ニ意匠登録ノ標記ヲ付スヘシ

第十六條 證人又ハ鑑定人ニシテ特許局又ハ囑託ヲ受ケタル裁判所ニ對シ偽證又ハ詐僞ノ鑑定ヲ爲シタルトキハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

賄賂其ノ他ノ方法ヲ以テ人ニ囑託シ偽證又ハ詐僞ノ鑑定ヲ爲シタル者ハ罰前項ニ同シ

前二項ノ罪ヲ犯シタル者其ノ事件ノ査定若ハ審決ニ至ラサル前特許局又ハ囑託ヲ受ケタル裁判所ニ自首シタルトキハ本刑ヲ免ス

第十七條 他人ノ登録意匠ヲ模擬シタル者又ハ情ヲ知リテ其ノ模擬シタル物品ヲ販賣シタル者ハ十五日以上一年以下ノ重禁錮又ハ十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス  
他人ノ登録意匠ヲ侵害スヘキ物品ナルコトヲ知りテ外國ヨリ輸入シタル者又ハ情ヲ知リテ其ノ物品ヲ販賣シタル者ハ罰前項ニ同シ

第十八條 前條ノ場合ニ於テ沒收シタル物件ハ之ヲ意匠登録證主ニ給付ス

第十九條 詐偽ノ所爲ヲ以テ意匠ノ登録ヲ受ケタル者又ハ登録ヲ受ケサル意匠ヲ應用シタル物品ニ登録標記ヲ付シ若ハ之ニ紛ハシキ表示ヲ爲シタル者又ハ情ヲ知リテ其ノ物品ヲ販賣シタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮又ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス  
登録ヲ受ケサル意匠ヲ應用シタル物品ヲ販賣スル爲廣告、看板、引札等ニ於テ其ノ意匠ノ登録ヲ受ケタルニ紛ハシキ表示ヲ爲シタル者ハ罰前項ニ同シ

第二十條 第十七條ノ犯罪ハ被害者ノ告訴ヲ待テ其ノ罪ヲ論ス

第二十一條 意匠登録證主登録標記ヲ付スルコトヲ怠リタルトキハ其ノ登録意匠タルコトヲ知リテ其ノ權利ヲ侵害シタル者ニ對シテノミ要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得

第二十二條 特許法第六條乃至第十條第十二條第十三條第十五條第二十一條第二十三條第二十八條乃至第三十七條第四十三條及第五十一條ノ規定ハ意匠ニ關シテ之ヲ準用ス

附則

第二十三條 此ノ法律ハ明治三十二年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

第二十四條 明治二十一年勅令第八十五號意匠條例ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

意匠條例ニ依テ受ケタル登録ハ其ノ年限間此ノ法律ニ依テ受ケタル登録ト同一ノ效アルモノトス  
意匠ニ關スル出願又ハ請求ニシテ此ノ法律施行ノ日マテニ處分ヲ終ラサルモノハ此ノ法律ニ依リタル出願又ハ請求ト看做シ處分スヘシ

○商標法明治三十二年三月

沿革略記 明治十七年六月第十九號布告ヲ以テ商標條例ヲ制定ス●二十一年十二月勅令第八十六號ヲ以テ前條例ヲ改正ス●三十二年三月法律第三十八號ヲ以テ前條例ヲ廢止シ商標法ヲ定ム

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル商標法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

商標法

第一條 自己ノ商品ヲ表彰スル爲商標ヲ專用セントスル者ハ此ノ法律ニ依リ其ノ登録ヲ受クヘシ

第二條 文字、圖形又ハ記號ニシテ左ノ場合ニ該當スルモノハ商標ノ登録ヲ受クルコトヲ得ス

- 一 菊花御紋章ト同一若ハ類似ノ圖形ヲ有スルモノ
- 二 國旗、軍旗、勳章又ハ外國ノ國旗ト同一若ハ類似ノモノ
- 三 秩序又ハ風俗ヲ紊リ若ハ世人ヲ欺瞞スルノ虞アルモノ
- 四 他人ノ登録商標又ハ其ノ登録失效後一年ヲ經過セサルモノト同一若ハ類似ニシテ同商品ニ使

用セントスルモノ

五 此ノ法律施行前ヨリ他ニ使用者アル商標ト同一若ハ類似ノモノ

六 商品ノ普通名稱、産地ヲ表彰スルモノ又ハ其ノ品位、品質、形状ヲ商業上慣用ノ文字、圖形若ハ記號ニ依リ表彰スルモノ及普通ニ使用セラルル氏名、商號、會社名若ハ組合名ヲ普通ノ書體ニ依リ記載スルモノ

七 欄、地紋其ノ他特別著明ノ外觀ナキモノ

第三條 商標専用ノ年限ハ二十年トシ原簿登録ノ日ヨリ起算ス

外國ノ登録商標ニシテ帝國ニ於テ登録ヲ受ケタルモノノ専用年限ハ原登録ノ有效年限ニ從フ但シ二十年ヲ超ユルコトヲ得ス

第四條 商標専用年限満了ノ後其ノ商標ヲ續用セントスル者ハ更ニ其ノ登録ヲ受クルコトヲ得

第五條 商標ノ専用ハ農商務大臣ノ定ムル類別ニ從ヒ出願人ノ指定シタル商品ニ限ル

第六條 登録商標主其ノ營業ヲ讓渡シ又ハ他人ト其ノ營業ヲ共ニスル場合ニ限リ其ノ商標ヲ讓渡シ若ハ共有ト爲スコトヲ得此ノ場合ニ於テハ特許局ニ請求シ其ノ登録ヲ受クルニ非サレハ之ヲ以テ第三者ニ對抗スルコトヲ得ス

登録商標主同商品ニ付類似ノ商標ヲ有スルトキハ共ニ讓渡シ若ハ共有ト爲シ又ハ類似商標ノ使用ヲ廢止スルニ非サレハ前項ノ登録ヲ受クルコトヲ得ス

第七條 商標ノ登録ヲ受ケントスル者ハ一商標毎ニ其ノ商標ヲ付スヘキ商品ヲ明記シ見本ヲ添ヘ特

許局長ニ出願スヘシ

第八條 二人以上同一又ハ相類似スル商標ヲ同商品ニ使用セントシテ登録ヲ出願スル者アルトキハ出願ノ先ナルモノヲ登録シ同時ニ出願シタルモノハ共ニ之ヲ登録セス但シ出願者一人トナリタルトキハ此ノ限ニアラス

第九條 工業所有權保護同盟條約國ニ於テ商標登録ヲ出願シタル者四箇月以内ニ同一商標ニ付登録ヲ出願スルトキハ其ノ出願ハ最初出願ノ日ニ於テ之ヲ爲シタルト同一ノ效力ヲ有ス

第十條 登録ヲ受ケタル商標ニシテ第二條又ハ第八條ニ違反シタルモノナルトキハ其ノ登録ヲ無効トス但シ第二條第四號若ハ第五號ニ該當シ又ハ第八條ニ違ヒ登録ヲ受ケタルモノニシテ登録後三年ヲ經タルトキハ此ノ限ニアラス

第十一條 登録ヲ受ケタル商標ニシテ左ノ場合ニ該當スルモノアルトキハ特許局長ニ於テ其ノ登録ヲ取消スコトヲ得

一 登録商標主登録後其ノ商標ヲ使用スル商品ノ産地品質等ニ關シ不實ノ事項ヲ附記シタルトキ  
二 登録商標主正當ノ事故ナクシテ六箇月以上第二十條ニ依ル特許法第六條ノ代理人ヲ置カサルトキ

第十二條 商標専用權ハ登録商標主其ノ商標ヲ使用スル營業ノ廢止ニ因リ消滅ス

第十三條 商標ノ登録ヲ受クル者ハ一商標ニ付商品一類毎ニ商標料金三十圓ヲ納ムヘシ續用ノ登録ニ付テモ亦同シ

第十四條 特許局ハ商標公報ヲ發行シ商標登錄ニ關スル必要事項ヲ公示スヘシ

第十五條 證人又ハ鑑定人ニシテ特許局又ハ囑託ヲ受ケタル裁判所ニ對シ偽證又ハ詐偽ノ鑑定ヲ爲シタルトキハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

賄賂其ノ他ノ方法ヲ以テ人ニ囑託シ偽證又ハ詐偽ノ鑑定ヲ爲サシメタル者ハ罰前項ニ同シ  
前二項ノ罪ヲ犯シタル者其ノ事件ノ査定若ハ審決ニ至ラサル前特許局又ハ囑託ヲ受ケタル裁判所ニ自首シタルトキハ本刑ヲ免ス

第十六條 他人ノ登錄商標ナルコトヲ知り其ノ承諾ヲ經スシテ之ト同一又ハ類似ノ商標ヲ製造シ之ヲ交付若ハ販賣シタル者又ハ他人ノ登錄商標ト同一若ハ類似ノ商標ヲ同商品ニ使用シタル者又ハ情ヲ知リテ其ノ商品ヲ販賣シ若ハ販賣ノ爲所藏シタル者ハ一月以上二年以下ノ重禁錮又ハ二十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

他人ノ登錄商標ヲ有スル容器、包裝等ナルコトヲ知り之ヲ同商品ニ使用シタル者又ハ情ヲ知リテ其ノ商品ヲ販賣シ若ハ販賣ノ爲所藏シタル者又ハ他人ノ登錄商標ト同一若ハ類似ノ商標ヲ其ノ商品販賣ノ廣告、看板、引札等ニ使用シタル者ハ罰前項ニ同シ

第十七條 詐偽ノ所爲ヲ以テ商標ノ登錄ヲ受ケタル者又ハ登錄ヲ受ケサル商標ニ登錄標記ヲ付シ若ハ之ニ紛ハシキ表示ヲ爲シタル者又ハ情ヲ知リテ其ノ商品ヲ販賣シ若ハ販賣ノ爲所藏シタル者ハ十五日以上一年以下ノ重禁錮又ハ十圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス  
登錄ヲ受ケスシテ登錄標記又ハ之ニ紛ハシキ表示ヲ付シタル商標ヲ其ノ商品販賣ノ廣告、看板、引

札等ニ使用シタル者ハ罰前項ニ同シ

第十八條 第十六條及第十七條ノ場合ニ於テハ商標及商標ヲ表示スヘキ原具ヲ沒收ス其ノ商標ト分離スヘカラサル商品、容器、包裝等ハ之ヲ毀壞セシム

第十九條 第十六條ノ犯罪ハ被害者ノ告訴ヲ待テ其ノ罪ヲ論ス

第二十條 特許法第六條乃至第十條第十二條第十三條第十五條第二十一條第二十三條第二十八條乃至第三十七條第四十三條及第五十一條ノ規定ハ商標ニ關シテ之ヲ準用ス

第二十一條 主務官廳ニ於テ認可シタル同業者ノ組合ニシテ標章ヲ商標トシテ專用セントスルトキハ此ノ法律ニ依リ登錄ヲ受クルコトヲ得  
前項ニ依リ登錄ヲ受ケタル標章ハ登錄商標ニ準ス

附則

第二十二條 此ノ法律ハ明治三十二年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

第二十三條 明治二十一年勅令第八十六號商標條例ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

商標條例ニ依テ受ケタル商標ハ此ノ法律ニ依リテ受ケタル商標ト同一ノ效アルモノトス

商標ニ關スル出願又ハ請求ニシテ此ノ法律施行ノ日マテニ處分ヲ終ラサルモノハ此ノ法律ニ依リタル出願又ハ請求ト看做シ處分スヘシ

第二十四條 明治二十一年勅令第八十六號商標條例第二條第三號ニ該當シ又ハ同第八條ニ違ヒ登錄ヲ受ケタル商標ニシテ同第十條ニ依リ無効タルベキモノニ對シテハ此ノ法律施行後二年ヲ經過ス

ルトキハ其ノ登録無効ノ審判ヲ請求スルコトヲ得ス

○特許意匠及商標ニ關スル手数料明治三十二年五月勅令第九十五號

朕特許、意匠及商標ニ關スル手数料ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 特許、意匠又ハ商標ニ關シ左ニ掲クル書類ヲ出ス者ハ手数料トシテ下ニ定ムル金額ヲ

納ムヘシ

- 一 特許願書
- 二 追加特許願書
- 三 特許證改訂願書
- 四 特許證分割願書
- 五 意匠登録願書
- 六 商標登録願書
- 七 標章登録願書
- 八 登録商標續用登録願書
- 九 再審査請求書
- 十 審判請求書
- 十一 書類ノ謄本ノ請求書

- 每一件金五圓
  - 每一件金三圓
  - 每一件金五圓
  - 每一件金五圓
  - 每一件金一圓
  - 每一件金三圓
  - 每一件金三圓
  - 每一件金二圓
  - 每一件金三圓
  - 每一件金十二圓
- 贈本十三行二十五字詰一枚ニ付金十錢ノ字數一枚ニ滿タサルモノハ一枚トス  
歐文書類ノ贈本ハ百兩ニ付金十錢百兩ニ滿タサルモノ亦同シ

十二 圖面ノ調製ノ請求書

十三 原簿ノ一覽ノ請求書

十四 博覽會又ハ共進會ノ出品ニ關スル屆書

第二條 手数料ハ收入印紙ヲ以テ之ヲ納ムヘシ

附則

第三條 本令ハ明治三十三年七月一日ヨリ施行ス

○

○特許代理業者登録規則明治三十二年六月勅令第二百三十五號

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ特許代理業者登録規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

特許代理業者登録規則

第一條 特許代理業者ト稱スルハ特許、意匠又ハ商標ニ關スル代理ヲ常業トスル者ヲ謂フ

第二條 特許代理業者ノ登録ヲ受ケントスル者ハ能力者ニシテ且特許代理業者試験ニ合格シタル者ナルコトヲ要ス

特許代理業者試験ニ關スル規定ハ農商務大臣之ヲ定ム

第三條 左ニ掲クル者ハ試験ヲ經スシテ登録ヲ受クルコトヲ得

一 文官高等試験又ハ判事檢事登用試験ニ合格シタル者

二 帝國大學分科大學又ハ之ト學科程度同等ト認ムル内外國ノ學校ニ於テ定規ノ課業ヲ卒ヘタル者

- 三 辯護士タル資格ヲ有スル者
  - 四 特許局ノ高等官タリシ者又ハ二年以上特許局審査官補タリシ者
- 第四條 左ニ掲クル者ハ登録ヲ受クルコトヲ得ス
- 一 特許法、意匠法、商標法又ハ第十五條ニ定メタル罪ヲ犯シタル者
  - 二 重罪ノ刑ニ處セラレタル者但シ國事犯ニシテ復権シタル者ハ此ノ限ニ在ラス
  - 三 禁錮ニ處セラレ滿期又ハ赦免ノ後三年ヲ經サル者
  - 四 公權停止中ノ者
  - 五 破産若ハ家資分散ノ宣告ヲ受ケ復權ヒサル者又ハ身代限ノ處分ヲ受ケ債務ノ辨償ヲ終ヘサル者
- 第五條 特許代理業者ニシテ第二條若ハ第三條ノ資格ヲ失ヒ又ハ第四條ニ該當スルトキハ登録ハ直ニ其ノ効ヲ失フ
- 第六條 登録ヲ受ケントスル者ハ手数料トシテ金十圓ヲ納ムヘシ
- 前項ノ手数料ハ收入印紙ヲ以テ之ヲ納ムヘシ
- 手数料ハ如何ナル場合ニ於テモ之ヲ還付セス
- 第七條 登録願書ニハ履歷書及第二條第一項第三條並第四條ノ事項ニ關スル證明書ヲ添附スヘシ
- 第八條 特許局ニハ特許代理業者名簿ヲ備ヘ左ノ事項ヲ登録スヘシ
- 一 特許代理業者ノ氏名、住所
  - 二 事務所
  - 三 登録ノ年月日
- 第九條 前條第一號及第二號ニ掲ケタル事項ニ變更ヲ生シタルトキハ特許代理業者ハ遲滞ナク其ノ

- 旨ヲ特許局ニ届出ツヘシ特許代理業者其ノ業務ヲ廢止シタルトキ亦同シ
- 特許代理業者死亡シタルトキハ其ノ相続人ハ遲滞ナク其ノ旨ヲ届出ツヘシ
- 前二項ノ届出アリタルトキハ特許局長ハ特許代理業者名簿ニ其ノ旨ヲ登録スヘシ
- 第十條 特許代理業者ヲ停止シ又ハ其ノ停止ヲ解キタルトキハ特許局長ハ特許代理業者名簿ニ其ノ旨ヲ登録スヘシ
- 第十一條 特許代理業者ヲ禁止シタルトキ及第五條ノ事實アリタルトキハ特許局長ハ特許代理業者名簿ニ抹消ノ登録ヲ爲スヘシ
- 第十二條 特許代理業者名簿ニ登録シタル事項ハ官報特許公報及商標公報ヲ以テ之ヲ公告スヘシ
- 第十三條 特許代理業者ハ相手方ノ代理人トシテ取扱ヒタル事件又ハ特許局在職中取扱ヒタル事件ニ付其ノ業務ヲ行フコトヲ得ス
- 第十四條 特許代理業者組合ヲ設ケタルトキハ組合規約ヲ定メテ特許局長ノ認可ヲ受クヘシ組合規約ヲ變更シタルトキ亦同シ其ノ組合ヲ廢止シタルトキハ特許局ニ届出ツヘシ
- 第十五條 登録ヲ受ケスシテ特許代理業者ヲ營ミ若ハ特許代理業者ト公稱シタル者又ハ詐偽ノ所爲ヲ以テ登録ヲ受ケタル者ハ十圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス
- 特許代理業者ヲ停止若ハ禁止セラレ又ハ第五條ニ依リ登録ノ効ヲ失ヒ仍業務ヲ營ミタル者亦前項ニ同シ

附則

第十六條 本令發布前ヨリ特許代理業者ヲ營ム者ニシテ第三條ニ該當セサル者ハ特許代理業者試験委

員ノ銓衡ヲ經テ登錄ヲ受クルコトヲ得但シ本令施行ノ日ヨリ三十日以内ニ出願シタル者ニ限ル  
第十七條 本令ハ明治三十二年七月一日ヨリ施行ス

○商業會議所條例 明治二十三年九月  
法律第八十一號

朕商業會議所條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

商業會議所條例

第一條 此條例ニ商業者ト稱スルハ左ニ掲クル者ヲ謂フ(二十八法律第二十三號ヲ以テ各號トモ改正)

- 一 商法第四條ノ商取引及同第五條第一號第三號第四號第六號ニ掲ケタル取引ヲ營業トスル者
- 二 第一項ニ掲ケタル取引ヲ營業トスル合資會社株式會社及取引所
- 三 第一項ニ掲ケタル取引ヲ營業トスル合名會社ノ社員合資會社ノ業務擔當社員無限責任社員株式會社ノ取締役及取引所ノ理事長理事

第二條 商業會議所ヲ設立セントスルトキハ其地ノ商業者中此條例ニ依リ會員タルヲ得ヘキ者發起人ト爲リ地方長官ヲ經由シ農商務大臣ノ認可ヲ請フヘシ但發起人ノ數ハ定款ヲ以テ定ムヘキ會員ノ半數以上ナルコトヲ要ス

地方長官ハ前項ノ申請ヲ受ケタルトキハ郡若クハ市參事會ニ諮問シ其意見ヲ徵シ尙ホ自己ノ意見ヲ添ヘ農商務大臣ニ進達スヘシ

第三條 會議所設立地ノ境界ハ市町村ノ區域ニ依ルヘシ但土地商業ノ情況ニ由リ數市町村ノ區域ヲ

互ニ聯合シテ其地ニ一會議所ヲ設立スルコトヲ得

第四條 會議所ノ事務權限左ノ如シ(二十八法律第二十三號ヲ以テ  
第二號ヨリ第五號マテ改正ス)

- 一 商業ノ發達ヲ圖リ若クハ其衰退ヲ防クニ必要ノ方案ヲ議定スルコト
  - 二 商業ニ關スル法律命令其他諸條規ノ制定改正廢止及施行方法ニ付意見ヲ行政廳ニ開申シ且商業上ノ利害ニ關スル意見ヲ行政廳其他ニ表示スルコト
  - 三 商業ノ實況及其統計ヲ行政廳其他ニ報告スルコト
  - 四 商業ニ關スル事項ニ付行政廳ノ諮問ニ應答スルコト
  - 五 法律命令其他諸條規若クハ行政廳ノ委任ニ依リ其地ノ公設營業所、仲立人組合及商業ニ關スル諸營造物ヲ管理スルコト
  - 六 仲立人ノ資格員數及手数料ヲ審査スルコト
  - 七 關係人ノ請求ニ依リ其地ノ商業ニ關スル紛議ヲ仲裁スルコト
- 第五條 會議所設立地ニ於テ第一條第一項ノ營業ヲ爲シ又ハ第一條第三項ノ社員役員トナリ其地ニ於テ所得稅ヲ納ムル商業者並會議所設立地ニ於テ營業スル第一條第二項ノ會社及取引所ハ其會議所會員ノ選舉權ヲ有ス(二十八法律第二十三號ヲ以テ本條ヲ改正ス)
- 第六條 會員ノ選舉權ヲ有スル會社及取引所並三箇年以上繼續シテ會員ノ選舉權ヲ有スル年齡滿三十歲以上ノ男子ハ會員ノ被選舉權ヲ有ス(二十八法律第二十三號ヲ以テ次項トモ改正ス)
- 會社及取引所ヲ代表スヘキ者ハ第一條第三項ニ該當スル其社員役員ニシテ年齡滿三十歲以上ノ



男子一人ニ限ル

第七條 第五條及第六條ニ掲ケタル會員ノ選舉權及被選舉權ニ關スル財産上ノ資格ニ付テハ農商務大臣ハ地方ノ情況ニ依リ所得稅額又ハ會社取引所ノ資本額ニ基キ特ニ之ヲ規定スルコトヲ得(二十年法律第二十三號ヲ以テ次項トモ改正ス)

所得稅法「第二十九條但書」ニ掲ケタル地方ニ在テハ農商務大臣ハ所得稅ニ代フルニ他ノ稅ヲ以テシ且其稅額ニ基キ財産上ノ資格ヲ定ムルコトヲ得

第八條 左ニ掲ケル者ハ會員ノ選舉權及被選舉權ヲ有セス

- 一 瘋癲白癡ノ者
- 二 重禁錮一年以上ノ刑ニ處セラレ又ハ商業及農工ノ業ヲ妨害スル罪、財産ニ對スル罪、風俗ヲ害スル罪及信用ヲ害スル罪ヲ犯シ刑ニ處セラレ滿期後又ハ赦免後三箇年ヲ經サル者
- 三 公權剝奪若クハ停止中ノ者

第九條 會員ノ數ハ十五名以上五十名以下各會議所ノ定款ヲ以テ定ムヘシ

第十條 會員ハ無給トス其任期ハ四箇年トシ毎二年其半數ヲ改選ス初回ノ解任者ハ抽籤ヲ以テ定ムヘシ

第十一條 會員當選者ハ左ニ掲ケル者ヲ除クノ外會議所ノ議決ヲ經スシテ其就職ヲ辭シ又ハ任期中辭職スルコトヲ得ス

- 一 疾病若クハ老衰ニ依リ職務ニ堪ヘサルコトヲ證明スル者

二 營業ノ爲メ常ニ會議所設立地ニ住居スル能ハサルコトヲ證明スル者

第十二條 前條ノ規定ニ依ルニ非スシテ會員ノ職ヲ辭スル者ハ會議所ノ議決ヲ以テ二百圓以下ノ過怠金ヲ課スルコトヲ得

第十三條 會員ノ選舉ハ郡長若クハ市長委員ヲ命シ日時及場所ヲ定メテ施行セシム其費用ハ會議所ノ負擔トス

第十四條 第四條第七項ノ事件ニ係ル會議所ノ會議ハ公開スルコトヲ得ス(二十八年法律第二十號ヲ以テ本條改正)

第十五條 會議所ハ第四條第七項ノ場合ニ於テ其關係人ヨリ相當ノ手数料ヲ徵收スルコトヲ得

第十六條 會議所ハ法人トシテ財産ヲ所有スルモノトス

第十七條 會議所ハ其議決ニ依リ會員定數ノ五分一ヨリ多カラサル特別會員ヲ置キ會議ニ參列セシムルコトヲ得但特別會員ハ其議決ニ加フルコトヲ得ス

特別會員ノ資格ハ學術技藝若クハ商業上ノ經驗アル者タルヘシ

第十八條 會議所經費ノ豫算ハ地方長官ヲ經由シ農商務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

豫算ノ決算ハ地方長官ヲ經由シ農商務大臣ニ報告スヘシ

第十九條 會議所ノ經費ハ會員ノ選舉權ヲ有スル者ヨリ徵收ス其徵收方法ハ會議所ノ議決ヲ以テ地方長官ヲ經由シ農商務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

經費ヲ納期ニ納メサル者アルトキハ其地方稅收入役ニ囑託シテ之ヲ徵收スルコトヲ得

收入役ノ督促ヲ受クルモ經費ヲ納メサル者ハ會員ノ選舉權及被選舉權ヲ四箇年以上八箇年以下停止シ尙ホ二百圓以下ノ過料ニ處ス

第二十條 會議所ノ定款ハ會議所ノ議決ヲ以テ左ノ事項ヲ規定シ地方長官ヲ經由シ農商務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

一 會員選舉規則

二 議事規則

三 庶務規程

四 役員職務權限

五 仲裁規則

六 會計規則

七 公設ノ營造物若クハ其營業所ノ管理規則

第二十一條 農商務大臣ハ會議所其權限ヲ犯シ又ハ商業上有害ノ行爲アリト認メタルトキハ會議ヲ停止シ尙ホ其情況ニ依リ役員若クハ會員ノ幾部又ハ全部ノ改選ヲ命スルコトアルヘシ

第二十二條 農商務大臣ハ此條例施行ノ責ニ任シ之カ爲メ必要ナル命令ヲ發スヘシ

附 則

第二十三條 會議所會員ハ此條例ノ改正ニ依リ被選ノ資格ニ異動ヲ生スルモ任期中ハ其職ヲ失ハサルモノトス(二十八法律第二十三號ヲ以テ本條追加)

○ 保險業法明治三十三年三月法律第六十九號

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル保險業法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

保險業法

第一章 總 則

第一條 保險事業ハ主務官廳ノ免許ヲ受クルニ非サレハ之ヲ營ムコトヲ得ス

第二條 保險事業ハ株式會社又ハ相互會社ニ非サレハ之ヲ營ムコトヲ得ス

第三條 保險會社ハ他ノ事業ヲ兼ムルコトヲ得ス

第四條 同一ノ會社ニシテ生命保險ト損害保險トヲ併セテ其目的ト爲スコトヲ得ス

第五條 損害保險ヲ目的トスル會社カ免許ヲ申請スルニハ申請書ニ左ノ書類ヲ添附スルコトヲ要ス

一 定款

二 事業方法書

三 普通保險約款

四 保險料及ヒ責任準備金算出ノ基礎ニ關スル書類

第六條 生命保險ヲ目的トスル會社カ免許ヲ申請スルニハ申請書ニ前條ニ掲ケタル書類及ヒ責任準備金利用ノ方法ヲ記載シタル書類ヲ添附スルコトヲ要ス

第七條 普通保險約款ニハ左ニ掲ケタル事項ヲ定ムルコトヲ要ス

- 一 保險會社カ保險金額ノ支拂ヲ爲スヘキ事由
- 二 保險契約無効ノ原因
- 三 保險會社カ其義務ヲ免ルヘキ事由
- 四 保險會社ノ義務ノ範圍ヲ定ムル方法及ヒ其義務履行ノ時期
- 五 保險契約者又ハ被保險者カ其義務不履行ノ爲メニ受クヘキ損失
- 六 保險契約ノ全部又ハ一部ノ解除ノ原因及ヒ其解除ノ場合ニ於テ當事者ノ有スル權利義務
- 七 保險契約者、被保險者、又ハ保險金額ヲ受取ヘキ者ノ利益又ハ剩餘金ノ分配ニ與カル權利ノ有無及ヒ範圍

第八條 第五條及ヒ第六條ニ掲ケタル書類ヲ變更スルニハ主務官廳ノ認可ヲ得ルコトヲ要ス

第九條 保險會社ノ義務ハ主務官廳ノ監督ニ屬ス

主務官廳ハ本法及ヒ第五條並ニ第六條ニ掲ケタル書類ノ規定ニ從ハシムル爲メ必要ナル命令ヲ爲スコトヲ得

第十條 主務官廳ハ何時ニテモ保險會社ヲシテ其事業ノ報告ヲ爲サシメ又ハ會社ノ業務及ヒ會社財産ノ狀況ヲ検査スルコトヲ得

第十一條 主務官廳カ保險會社ノ業務又ハ會社財産ノ狀況ニ依リ其事業ノ繼續ヲ困難ナリト認ムルトキハ其事業ノ停止ヲ命シ又ハ期間ヲ定メテ業務執行ノ方法若クハ計算ノ基礎ノ變更ヲ命シ其他

保險契約者、被保險者又ハ保險金額ヲ受取ルヘキ者ノ權利ヲ保護スルニ必要ナル命令ヲ爲スコトヲ得

第十二條 保險會社カ主務官廳ノ命令ニ違反シタルトキハ主務官廳ハ事業ノ停止若クハ取締役ノ改選ヲ命シ又ハ免許ヲ取消スコトヲ得

第十三條 保險會社ノ清算ハ主務官廳ノ監督ニ屬ス

主務官廳ハ何時ニテモ前項ノ監督ニ必要ナル検査ヲ爲スコトヲ得

### 第二章 株式會社

第十四條 保險ヲ營業トスル株式會社ノ定款ニハ商法第二百十條第二號乃至第八號ニ掲ケタル事項ノ外左ノ事項ヲ記載スルコトヲ要ス

- 一 保險ノ種類及ヒ營業ノ範圍
- 二 設立費用償却ノ方法

第十五條 會社ハ其商號ニ保險ノ種類ヲ示スコトヲ要ス

第十六條 會社ノ資本ハ十萬圓ヲ下ルコトヲ得ス

第十七條 株式申込證ニハ第十四條及ヒ商法第二百二十六條第二項ニ掲ケタル事項ヲ記載スルコトヲ要ス

第十八條 會社ハ第十四條及ヒ商法第四百四十一條第一項ニ掲ケタル事項ヲ登記スルコトヲ要ス

第十九條 第五十八條ノ規定ハ株式會社ノ計算ニ之ヲ準用ス但設立費用及ヒ營業費ノ全額ヲ償却シ

タル後ニ非サレハ利益ノ配當ヲ爲スコトヲ得ス

第二十條 商法第二百十條ノ規定ハ保險ヲ營業トスル株式會社ニハ之ヲ適用セス

第二十一條 會社カ營業ノ免許ヲ取消サレタルトキハ之ニ因リテ解散ス

第二十二條 會社カ合併ノ決議ヲ爲シタルトキハ合併契約書及ヒ各會社ノ財産目錄並ニ貸借對照表

ヲ損害保險ニ在リテハ各被保險者ニ生命保險ニ在リテハ各保險契約者ニ送付シ異議アラハ一定ノ

期間内ニ之ヲ述フヘキ旨ノ催告ヲ發スルコトヲ要ス但其期間ハ二个月ヲ下ルコトヲ得ス

被保險者又ハ保險契約者カ前項ノ期間内ニ會社ノ合併ニ對シテ異議ヲ述ヘサリシトキハ之ヲ承認

シタルモノト看做ス

異議ヲ述ヘタル者ノ保險金額カ會社ノ保險金額ノ十分ノ一以上ナルトキハ會社ハ合併ヲ爲スコト

ヲ得ス

會社カ前三項ノ規定ニ依リテ合併ヲ爲シタルトキハ其合併ハ之ヲ以テ異議ヲ述ヘタル者ニモ對抗

スルコトヲ得

會社カ被保險者又ハ保險契約者ニ催告ヲ爲サスシテ合併ヲ爲シタルトキハ其合併ハ之ヲ以テ會社

カ催告ヲ爲サ、リシ者ニ對抗スルコトヲ得ス

第二十三條 第七十三條第二項、第七十四條及ヒ第七十七條ノ規定ハ保險ヲ營業トスル株式會社ニ

之ヲ準用ス

第二十四條 第七十八條ノ規定ハ保險ヲ營業トスル株式會社カ第二十一條又ハ商法第七十四條第七

號、第二百二十一條第二號、第三號ニ掲ケタル事由ニ因リテ解散シタル場合ニ之ヲ準用ス

第二十五條 合併ニ因ル解散ノ登記ノ申請書ニハ第二十二條第一項ノ規定ニ依ル催告ヲ爲シタルコ

ト、若シ異議ヲ述ヘタル者アルトキハ其者ノ保險金額カ會社ノ保險金額ノ十分ノ一未滿ナルコト

ヲ證スル書面ヲ添附スルコトヲ要ス

### 第三章 相互會社

#### 第一節 設立

第二十六條 相互會社ノ發起人ハ定款ヲ作り之ニ左ノ事項ヲ記載シテ署名又ハ記名捺印スルコトヲ

要ス

一 保險ノ種類及ヒ事業ノ範圍

二 名稱

三 事務所ノ所在地

四 基金ノ總額

五 基金ノ配出者カ有スヘキ權利

六 社員ノ責任ノ種類

七 基金及ヒ設立費用ノ償却ノ方法

八 剩餘金分配ノ方法

九 會社カ公告ヲ爲ス方法

十 存立時期又ハ解散ノ事由ヲ定メタルトキハ其時期又ハ事由

第二十七條 相互會社ハ其名稱ニ保險ノ種類ヲ示シ且之ニ相互會社ナル文字ヲ附スルコトヲ要ス

第二十八條 相互會社ノ基金ハ十萬圓ヲ下ルコトヲ得ス

基金ノ支拂ハ金錢以外ノ財産ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得ス

第二十九條 相互會社ノ社員ノ數ハ百人ヲ下ルコトヲ得ス

第三十條 發起人ニ非サル者カ社員タラントスルトキハ入社申込證ニ通ニ保險ノ目的及ヒ保險金額

ヲ記載シ之ニ署名又ハ記名捺印スルコトヲ要ス但會社カ主タル事務所ノ所在地ニ於テ設立ノ登記

ヲ爲シタル後社員タラントスル者ハ此限ニ在ラス

入社申込證ハ發起人之ヲ作り之ニ左ノ事項ヲ記載スルコトヲ要ス

一 定款作成ノ年月日

二 第二十六條ニ掲ケタル事項

三 基金ノ釀出者ノ氏名、住所及ヒ其各自カ釀出スル金額

四 發起人ノ氏名、住所

五 發起人カ報酬ヲ受クハキトキハ其報酬ノ額

六 設立ノ際募集セントスル社員ノ數

第三十一條 社員カ豫定ノ數ニ滿チタルトキハ發起人ハ遲滞ナク創立總會ヲ招集スルコトヲ要ス

創立總會ニ於テハ社員ノ半數以上出席シ其四分ノ三以上ノ同意ヲ以テ一切ノ決議ヲ爲ス

第四十三條及ヒ商法第百五十六條第一項、第二項、第百六十一條第三項、第四項、第百六十三條ノ規

定ハ相互會社ノ創立總會ニ之ヲ準用ス

第三十二條 社員カ豫定ノ數ニ滿チタル後六个月内ニ發起人カ創立總會ヲ招集セザルトキハ申込人

ハ其申込ヲ取消スコトヲ得

第三十三條 相互會社ハ創立總會ノ終結ニ因リテ成立ス

第三十四條 取締役ハ創立總會終結ノ日ヨリ二週間内ニ各事務所ノ所在地ニ於テ左ノ事項ヲ登記ス

ルコトヲ要ス

一 第二十六條第一號、第二號及ヒ第四號乃至第十號ニ掲ケタル事項

二 事務所

三 取締役及ヒ監査役ノ氏名、住所

前項ニ掲ケタル事項中ニ變更ヲ生シタルトキハ二週間内ニ各事務所ノ所在地ニ於テ其登記ヲ爲ス

コトヲ要ス

第三十五條 商法第九條、第十一條乃至第十五條、第十九條乃至第三十八條、第四十條、第四十一條、

第四十四條、第四十五條、第百十九條、第百二十三條及ヒ第百三十八條ノ規定ハ相互會社ニ之ヲ準

用ス

第二節 社員ノ權利義務

第三十六條 社員ハ會社ノ債權者ニ對シ直接ニ義務ヲ負フコトナシ

第三十七條 會社ノ債務ニ關スル社員ノ責任ハ左ノ三種トス

- 一 社員ノ全員カ無限ノ責任ヲ負フモノ
- 二 社員ノ全員カ保險料ノ限度トシテ責任ヲ負フモノ
- 三 社員ノ全員ノ保險料ノ外一定ノ金額ヲ限度トシテ責任ヲ負フモノ

第三十八條 社員ハ會社ニ拂込ムヘキ金額ニ付キ相殺ヲ以テ會社ニ對抗スルコトヲ得ス

第三十九條 社員カ保險料ノ外會社ノ員份ニ關シ離出スヘキモノアルトキハ其金額及ヒ其離出ノ方法ハ定款ヲ以テ之ヲ定ム

第四十條 損害保險ヲ目的トスル相互會社ノ社員カ保險ノ目的ヲ讓渡シタルトキハ讓受人ハ會社ノ承諾ヲ得テ讓渡人ノ權利義務ヲ承繼スルコトヲ得

第四十一條 生命保險ヲ目的トスル相互會社ノ社員ハ會社ノ承諾ヲ得テ他人ヲシテ其權利義務ヲ承繼セシムルコトヲ得

第三節 會社ノ機關

第四十二條 相互會社ハ定款ヲ以テ社員總會ニ代ハルヘキ機關ヲ設ケルコトヲ得此機關ニハ社員總會ニ關スル規定ヲ準用ス

第四十三條 社員ハ總會ニ於テ各一個ノ議決權ヲ有ス但定款ニ別段ノ定アルトキハ此限ニ在ラズ

第四十四條 十分ノ一以上ノ社員ハ總會ノ目的及ヒ其招集ノ理由ヲ記載シタル書面ヲ取締役ニ提出

シテ總會ノ招集ヲ請求スルコトヲ得但此權利ノ行使ニ付キ定款ヲ以テ他ノ標準ヲ定ムルコトヲ得

商法第六十條第二項ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第四十五條 商法第五百十六條第一項、第二項、第五百十七條第一項、第五百十八條第一項、第五百十九條、第六十一條第一項、第三項、第四項及ヒ第六十三條ノ規定ハ相互會社ノ社員總會ニ之ヲ

準用ス

第四十六條 取締役及ヒ監査役ハ社員總會ニ於テ之ヲ選任ス

第四十七條 取締役及ヒ監査役ハ社員タルコトヲ要セス

第四十八條 取締役ハ社員總會ノ認許アルニ非サレハ同種ノ保險ヲ目的トスル他ノ會社ノ無限責任

社員、業務擔當社員、取締役及ヒ監査役ト爲ルコトヲ得ス

第四十九條 取締役ハ社員名簿ヲ備ヘ之ニ左ノ事項ヲ記載スルコトヲ要ス

一 社員ノ氏名、住所

二 各社員ノ保險契約ノ種類、保險金額及ヒ保險料

三 第三十七條第三號ノ場合ニ於テ各社員ノ責任ノ限度

第五十條 取締役ハ定款及ヒ總會ノ決議録ヲ各事務所ニ備ヘ置キ且社員名簿ヲ主タル事務所ニ備ヘ

置クコトヲ要ス

社員及ヒ會社ノ債權者ハ事業時間内何時ニテモ前項ニ掲ケタル書類ノ閱覽ヲ求ムルコトヲ得

第五十一條 社員總會ニ於テ取締役ニ對シテ訴ヲ提起スルコトヲ決議シタルトキ又ハ之ヲ否決シテ

ル場合ニ於テ十分ノ一以上ノ社員カ之ヲ監査役ニ請求シタルトキハ會社ハ決議又ハ請求ノ日ヨリ  
一个月内ニ訴ヲ提起スルコトヲ要ス但起訴ノ請求ヲ爲ス者ニ付キ定款ヲ以テ他ノ標準ヲ定ムルコ  
トヲ得

前項ノ請求ヲ爲シタル社員ハ監査役ノ請求ニ因リ相當ノ擔保ヲ供スルコトヲ要ス  
會社カ取訴シタルトキハ右ノ社員ハ會社ニ對シテノミ損害賠償ノ責ニ任ス

第五十二條 前條ノ請求ヲ爲シタル社員ハ特ニ會社ノ代表者ヲ指定スルコトヲ得

第五十三條 商法第六十五條乃至第六十七條、第六十九條、第七十條、第七十四條第二項、

第七十六條、第七十七條及ヒ第七十九條ノ規定ハ相互會社ノ取締役ニ之ヲ準用ス

第五十四條 社員總會ニ於テ監査役ニ對シテ訴ヲ提起スルコトヲ決議シタルトキ又ハ之ヲ否決シタ  
ル場合ニ於テ十分ノ一以上ノ社員カ之ヲ取締役ニ請求シタルトキハ會社ハ決議又ハ請求ノ日ヨリ  
一个月内ニ訴ヲ提起スルコトヲ要ス此場合ニ於テハ第五十一條第一項但書、第五十二條及ヒ商法  
第八十五條第一項但書ノ規定ヲ準用ス

前項ノ請求ヲ爲シタル社員ハ取締役ノ請求ニ因リ相當ノ擔保ヲ供スルコトヲ要ス

會社カ取訴シタルトキハ右ノ社員ハ會社ニ對シテノミ損害賠償ノ責ニ任ス

第五十五條 商法第六十七條、第七十九條乃至第八十四條、第八十五條第一項、第八十六  
條及ヒ第八十八條ノ規定ハ相互會社ノ監査役ニ之ヲ準用ス

第四節 會社ノ計算

第五十六條 基金ハ每事業年度ノ剩餘金ヲ以テスルニ非サレハ之ヲ償却スルコトヲ得ス基金ノ配出

者ニ支拂フヘキ利息亦同シ

第五十七條 相互會社ハ損失ノ填補ニ備フル爲メ每事業年度ノ剩餘金中ヨリ準備金ヲ積リツルコト  
ヲ要ス

毎年積立ツヘキ金額及ヒ準備金ノ最低額ハ定款ヲ以テ之ヲ定ム

第五十八條 設立費用及ヒ初ノ五年度ノ營業費ハ十年ヲ超エサル期間内ニ於テ定款ノ定ムル所ニ從  
ヒ毎年其一部ヲ償却スルコトヲ得

第五十九條 設立費用及ヒ初ノ五年度ノ營業費ノ全額ヲ償却シ且第五十七條ノ準備金ヲ控除シタル  
後ニ非サレハ基金ヲ償却シ又ハ剩餘金ノ分配ヲ爲スコトヲ得ス

前項ノ規定ハ前條ノ期間内ニ於テ基金ノ配出者ニ利息ヲ支拂フコトヲ妨ケス

第六十條 基金ヲ償却スルトキハ其償却スル金額ト同一ノ金額ヲ積立ツルコトヲ要ス

第六十一條 剩餘金ハ定款ニ別段ノ定ナキトキハ各事業年度ノ終ニ於ケル社員ニ之ヲ分配ス

第六十二條 商法第九十條乃至第九十三條ノ規定ハ相互會社ノ計算ニ之ヲ準用ス

第五節 定款ノ變更

第六十三條 定款ノ變更ハ社員總會ノ決議ニ依リテ之ヲ爲スコトヲ得但其決議ノ認可ヲ得ルニ  
付キ必要ナル變更ハ社員總會ノ決議ヲ以テ之ヲ取締役ニ委任スルコトヲ得

第三十一條第二項ノ規定ハ前項ノ決議ニ之ヲ準用ス

第六十四條 會社ノ債務ニ關スル社員ノ責任ヲ減少セントスルトキハ商法第七十八條乃至第八十條

ノ規定ニ從フコトヲ要ス

### 第六節 社員ノ退社

第六十五條 定款ヲ以テ會社ノ存立時期ヲ定メタルト否トヲ問ハス社員ハ事業年度ノ終ニ於テ退社ヲ爲スコトヲ得但六个月前ニ其豫告ヲ爲スコトヲ要ス

第六十六條 社員ハ左ノ事由ニ因リテ退社ス

一 定款ニ定メタル事由ノ發生

二 死亡

三 破産

四 保險關係ノ消滅

第六十七條 退社員ハ定款又ハ保險約款ノ定ムル所ニ從ヒ其權利ニ屬スル金額ノ拂戻ヲ請求スルコトヲ得

第六十八條 退社員ノ權利ニ屬スル金額ノ拂戻ハ事業年度ノ終ヨリ六个月内ニ之ヲ爲スコトヲ要ス

退社員ノ拂戻請求權ハ前項ノ期間經過ノ後二年間之ヲ行ハサルトキハ時効ニ因リテ消滅ス

第六十九條 退社員ノ權利ニ屬スル金額ノ計算ヲ爲スニ當タリ會社ニ現存スル財産ヲ以テ會社ノ債務ヲ辨濟スルニ足ラサルトキハ退社員ハ其負擔ニ歸スヘキ損失額ヲ拂込ムコトヲ要ス

第七十條 退社員カ會社ニ對シテ負擔シタル債務アルトキハ會社ハ其退社員ニ拂戻スヘキ金額ノ中ヨリ其債務ノ金額ヲ控除スルコトヲ得

第七十一條 無限責任ヲ負フ社員及ヒ保險料ノ外一定ノ金額ヲ限度トシテ責任ヲ負フ社員ハ登記所ニ備フル社員名簿ニ退社ノ記載ヲ爲ス前ニ生シタル會社ノ債務ニ付キ其記載後二年間責任ヲ負フノ前項ノ規定ハ第四十條及ヒ第四十一條ノ場合ニ之ヲ準用ス

### 第七節 解散

第七十二條 相互會社ハ左ノ事由ニ因リテ解散ス

一 存立時期ノ滿了其他定款ニ定メタル事由ノ發生

二 社員カ有人未滿ニ減シタルコト

三 社員總會ノ決議

四 合併

五 破産

六 免許ノ取消

第七十三條 任意ノ解散及ヒ合併ノ決議ハ總社員ノ半數以上出席シ其四分ノ三ノ同意ヲ以テ之ヲ爲ス

前項ノ決議ハ主務官廳ノ認可ヲ受クルニ非サレハ其効力ヲ生セス

第七十四條 合併ノ認可ヲ申請スルニハ申請書ニ合併契約書、財産目錄及ヒ貸借對照表ヲ添附スルコトヲ要ス

第七十五條 商法第七十六條及ヒ第七十八條乃至第八十二條ノ規定ハ相互會社ニ之ヲ準用ス



第八節 清算

第七十六條 相互會社カ解散シタルトキハ合併及ヒ破産ノ場合ヲ除ク外本節ノ規定ニ從ヒテ清算ヲ爲スコトヲ要ス

第七十七條 會社カ免許ノ取消ニ因リテ解散シタルトキハ裁判所ハ利害關係人又ハ檢事ノ請求ニ因リ清算人ヲ選任ス

第七十八條 會社カ第七十二條第二號、第三號又ハ第六號ニ掲ケタル事由ニ因リテ解散シタルトキハ保險金額ヲ支拂フヘキ事由カ解散ノ時ヨリ一个月内ニ生シタルトキニ限り保險金額ヲ支拂フコトヲ要ス

前項ノ期間經過ノ後ハ損害保險ヲ目的トスル會社ニ在リテハ未タ經過セサル期間ニ對スル保險料生命保險ヲ目的トスル會社ニ在リテハ被保險者ノ爲メニ積立テタル金額ヲ拂戻スコトヲ要ス

第七十九條 清算人ハ左ノ順序ニ從ヒテ會社財産ヲ處分スルコトヲ要ス

- 一 一般ノ債務ノ辨濟
- 二 社員ノ保險金額及ヒ前條第二項ノ規定ニ依リテ社員ニ拂戻スヘキ金額ノ支拂
- 三 基金ノ償却

社員ハ保險料ノ外基金ノ償却ニ付キ責任ヲ負フコトナシ

第八十條 殘餘財産ハ定款ニ別段ノ定ナキトキハ剩餘金ノ分配ト同一ノ割合ヲ以テ之ヲ社員ニ分配ス

第八十一條 重要ナル事由アルトキハ裁判所ハ監査役又ハ十分ノ一以上社員ノ請求ニ因リ清算人ヲ解任スルコトヲ得但此請求ヲ爲ス社員ニ付キ定款ヲ以テ他ノ標準ヲ定ムルコトヲ得

第八十二條 第四十四條 第五十一條、第五十四條、商法第八十四條 第九十條乃至第九十三條、第九十七條、第九十九條、第百五十九條、第百六十三條、第百七十六條、第百七十七條、第百八十一條、第百八十三條、第百八十四條、第百八十五條第一項、第百九十三條 第二百二十六條、第二百二十七條、第二百二十八條第一項、第二百三十條第一項、第二百三十一條乃至第二百三十三條及ヒ民法第七十九條、第八十條、第八十三號ノ規定ハ相互會社ノ清算ノ場合ニ之ヲ準用ス

第九節 補則

第八十三條 各登記所ニ相互保險會社登記簿ヲ備フ

第八十四條 相互會社ノ設立ノ登記ハ總取締役及ヒ總監査役ノ申請ニ因リテ之ヲ爲ス

申請書ニハ左ノ書類ヲ添附スルコトヲ要ス

- 一 定款
- 二 社員名簿
- 三 社員ヲ募集シタル場合ニ於テハ各社員ノ入社申込證
- 四 主務官廳ノ免許書又ハ其認證アル謄本
- 五 創立總會ノ決議錄

第八十五條 相互會社ノ社員名簿ハ登記簿ノ一部ト看做シ社員名簿ニ爲シタル記載ハ之ヲ登記ト看

做之但之ヲ公告スルコトヲ要セス

第八十六條 相互會社ノ支配人ノ選任ノ登記ハ取締役ノ申請ニ因リテ之ヲ爲ス

前項ノ規定ハ支配人ノ代理權ノ消滅又ハ解任ノ登記ヲ申請スル場合ニ之ヲ準用ス

第八十七條 相互會社カ免許ヲ取消ニ因リテ解散シタルトキハ登記所ハ主務官廳ノ囑託ニ因リテ其登記ヲナスコトヲ要ス

第八十八條 第八十四條第一項ノ規定ハ相互會社ノ解散又ハ其合併ニ因ル變更若クハ設立ノ登記ノ申請ヲ爲ス場合ニ之ヲ準用ス

第八十九條 非訟事件手續法第二百二十六條第一項、第三項、第三百三十六條乃至第三百三十九條、第四百十一條乃至第四百十五條、第四百七十三條、第四百七十四條第二項、第四百七十五條乃至第四百七十八條、第四百八十八條、第四百九十二條第一項、第二項及ヒ第四百九十四條ノ規定ハ相互會社ニ之ヲ準用ス

第九十條 相互會社カ登記ヲ爲ス場合ニ於テハ營利ヲ目的トセサル社團法人ト同一ノ登録稅ヲ納ムルコトヲ要ス

社債名簿ノ記載ニ付テハ登録稅ヲ課セス

第九十一條 相互會社ニハ營業稅ヲ課セス

第四章 計算

第九十二條 保險會社ハ毎年一回一定ノ時期ニ於テ其帳簿ヲ閉鎖シ總會終結ノ後滯滞ナク財産目錄、貸借對照表、事業報告書、損益計算書及ヒ基金ノ償却、其利息ノ支拂、準備金並ニ利益又ハ剩餘金ノ

配當ニ關スル決議書ヲ主務官廳ニ提出スルコトヲ要ス

第九十三條 保險契約者、被保險者又ハ保險金額ヲ受取ルヘキ者ハ會社ノ定時總會終結ノ後前條ニ掲ケタル書類ノ閱覽ヲ求メ又ハ其謄本若クハ抄本ノ交付ヲ請求スルコトヲ得但定款又ハ保險約款ノ定ムル所ニ依リ其謄本又ハ抄本ノ交付ニ付キ手数料ヲ拂フコトヲ要ス

第九十四條 第九十二條ニ掲ケタル書類ノ書式ハ農商務大臣之ヲ定ム

第九十五條 保險會社ハ保險契約ノ種類ニ從ヒ各事業年度ノ終ニ於テ存スル契約ニ付キ責任準備金ヲ計算シ且之ヲ特ニ設ケタル帳簿等ニ記載スルコトヲ要ス

第九十六條 生命保險ニ在リテハ保險契約者又ハ保險金額ヲ受取ルヘキ者ハ被保險者ノ爲メニ積立テタル金額ニ付キ會社財産ノ上ニ優先權ヲ有ス

第五章 罰則

第九十七條 主務官廳ノ免許ヲ得シテ保險事業ヲ營ム者ハ十圓以上千圓以下ノ過料ニ處セラル

第九十八條 保險會社ノ取締役、監査役又ハ清算人ハ左ノ場合ニ於テハ十圓以上千圓以下ノ過料ニ處セラル

- 一 保險事業ニ非サル事業ヲ爲シタルトキ
- 二 生命保險ト損害保險トヲ併セテ營ミタルトキ
- 三 主務官廳ノ命令ニ違反シタルトキ
- 四 主務官廳ノ検査ヲ妨ケタルトキ

五 正當ノ理由ナクシテ本法ノ規定ニ依リ閱覽ヲ許スヘキ書類ヲ閱覽セシメヌ又ハ其原本若クハ抄本ヲ交付セザリシトキ

六 第十九條ノ規定ニ違反シテ利益ノ配當ヲ爲シタルトキ

七 第二十二條ノ規定ニ違反シテ合併ヲ爲シタルトキ

八 第九十五條ノ規定ニ違反シタルトキ

第九十九條 相互會社ノ發起人、取締役、監査役又ハ清算人ハ左ノ場合ニ於テハ五圓以上五百圓以下ノ過料ニ處セラル

一 本法ニ定メタル登記ヲ爲スコトヲ怠リタルトキ

二 本法ニ定メタル公告若クハ通知ヲ爲スコトヲ怠リ又ハ不正ノ公告若クハ通知ヲ爲シタルトキ

三 第三十條第二項ノ規定ニ反シ入社申込證ヲ作ラス、之ニ記載スヘキ事項ヲ記載セス又ハ之ニ不正ノ記載ヲ爲シタルトキ

四 定款、社員名簿、總會ノ決議録、財産目録、貸借對照表、事業報告、損益計算書若クハ基金ノ償却、其利息ノ支拂、準備金、剩餘金分配ニ關スル議案ヲ事務所ニ備ヘ置カス、之ニ記載スヘキ事項ヲ記載セス又ハ之ニ不正ノ記載ヲ爲シタルトキ

五 商法第八十一條ノ規定ニ依ル監査役ノ調査ヲ妨ケタルトキ

第六條 相互會社ノ發起人、取締役、監査役又ハ清算人ハ左ノ場合ニ於テハ十圓以上千圓以下ノ過料

ニ處セラル

一 官廳又ハ總會ニ對シ不實ノ申立ヲ爲シ又ハ事實ヲ隱蔽シタルトキ

二 第五十六條乃至第六十條ノ規定ニ違反シテ基金ヲ償却シ、其利息ヲ支拂ヒ又ハ剩餘金分配ヲ爲シタルトキ

三 第七十九條第一項ノ規定ニ違反シテ會社財産ヲ處分シタルトキ

四 商法第七十八條乃至第八十條ノ規定ニ違反シテ社員ノ責任ヲ減少シ又ハ合併ヲ爲シタルトキ

五 商法第七十四條第二項又ハ民法第八十一條ノ規定ニ反シ破産宣告ノ請求ヲ爲スコトヲ怠リタルトキ

第一百條 非訟事件手續法第二百六條乃至第二百八條ノ規定ハ本章ニ定メタル過料ニ之ヲ準用ス

附 則

第一百二條 本法ハ明治三十三年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

第一百三條 商法施行法第九十五條乃至第一百六條ハ之ヲ削除ス

第一百四條 本法施行前ニ設立シタル保險會社ニシテ其商號ニ保險ノ種類ヲ示ササルモノハ本法施行ノ日ヨリ三個月内ニ其商號ヲ改メ且本店及支店ノ所在地ニ於テ其登記ヲ爲スコトヲ要ス

第一百五條 本法施行前ニ設立シタル保險會社ニシテ營業ノ免許ヲ受ケサリシモノカ主務官廳ノ命令ニ違反シタルトキハ裁判所ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ會社ノ解散ヲ命スルコトヲ得

非訟事件手續法第二百二十六條第一項、第三百二十四條第一項、第三百三十五條及第三百三十五條ノ二ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第百六條 本法施行前ニ設立シタル合名會社ニシテ保險ヲ營業トスルモノハ財産目錄及ヒ貸借對照表ヲ作ル毎ニ遲滯ナク營業報告書、損益計算書及ヒ利益ノ配當ニ關スル案ト共ニ之ヲ主務官廳ニ提出スルコトヲ要ス

第百七條 本法施行前ニ設立シタル合名會社ニシテ保險ヲ營業トスルモノカ財産目錄及ヒ貸借對照表ヲ作ル毎ニ保險契約者、被保險者及ヒ保險金額ヲ受取ルヘキ者ハ其閱覽ヲ求メ又ハ其謄本若クハ抄本ノ交付ヲ請求スルコトヲ得但定款又ハ保險約款ノ定ムル所ニ依リ謄本又ハ抄本ノ交付ニ付キ手数料ヲ拂フコトヲ要ス

第百八條 第三條、第四條、第八條乃至第十三條、第七十三條第二項及ヒ第七十四條ノ規定ハ本法施行前ニ設立シタル保險會社ニ之ヲ準用ス

第百九條 本法施行前ニ設立シタル保險會社ニシテ相當ノ責任準備金ヲ積テサルモノハ本法施行ノ日ヨリ三個月内ニ其不足額填補ノ方法ヲ定メ主務官廳ノ認可ヲ申請スルコトヲ要ス但填補ノ期間ハ本法施行ノ日ヨリ十年ヲ超ユルコトヲ得ス

前項ノ填補ヲ爲シタル後ニ非サレハ利益ノ配當ヲ爲スコトヲ得ス

第百十條 第七十八條ノ規定ハ本法施行前ニ設立シタル保險會社カ第二十一條又ハ商法第七十四條第三號、第五號、第七號、第一百八條、第二百二十一條第二號、第三號ニ掲ケタル事由ニ因リテ解散

シタル場合ニ之ヲ準用ス

第百十一條 第九十二條及ヒ第九十三條ノ規定ハ本法施行前ニ設立シタル合資會社又ハ株式會社ニシテ保險ヲ營業トスルモノニ之ヲ準用ス

第百十二條 第二十條乃至第二十二條及ヒ第七十七條ノ規定ハ本法施行前ニ設立シタル株式會社ニシテ保險ヲ營業トスルモノニ之ヲ準用ス

第百十三條 第九十八條ノ規定ハ本法施行前ニ設立シタル保險會社ノ業務ヲ執行スル社員、取締役、監査役及ヒ清算人ニ之ヲ準用ス

第百十四條 保險會社ノ業務ヲ執行スル社員又ハ取締役カ第百四條又ハ第百九條ノ規定ニ違反シタルトキハ五百圓以上五百圓以下ノ過料ニ處セラル

非訟事件手續法第二百六條乃至第二百八條ノ規定ハ前項ニ定メタル過料ニ之ヲ準用ス

第百十五條 外國人又ハ外國會社カ日本ニ支店又ハ代理店ヲ設ケテ保險事業ヲ營ム場合ニ關スル規程ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十七類 運輸、通信、開港、船舶、標識

○郵便法明治三十三年三月

沿革略記

明治元年七月各郵便局開設ノ制ヲ定メ信書等送達ノ時限ヲ示ス○同年九月驛遞規則ヲ定ム○同年十月諸官用  
 ○同年十二月東京府内ノ公狀及諸荷物ハ一切諸道各驛馬所ニ於テ之ヲ送付セシメ驛遞官更一名ヲ出シテ監督セシム  
 月京郵脚費日五、十ノ兩日ヲ改メテ四、九兩日ト爲ス○三年二月東西兩京開公用便六日限ノ宿務設立ヲ十日限ニ改ム  
 ○同年三月驛遞法ヲ改正シ驛遞規則ヲ定ム○同年十二月信書郵便ノ法ヲ開設シ東海沿道ノ十二藩及ヒ六縣ニ令シテ  
 各驛ニ書狀集積及切手賣捌所ヲ設ケシム○四年正月本年三月以降郵便ノ法ヲ開設シ東海沿道ノ十二藩及ヒ六縣ニ令シテ  
 脚夫ヲ發シシム由テ東海沿道各驛近傍村落及勢州、美濃路等モ亦右脚夫便ニ託シ通信セシムルヲ要ス○同年四月郵便切手  
 ノ發行ヲ令ス又郵便開設ヲ以テ驛立場驛々取扱規則ヲ定メ各地方官ニ令シテ各驛書狀ノ送付及切手賣捌所等ノコトヲ  
 監督セシム又郵便書狀差出人ノ心得書及各地時間貨物運送ノ程ヲ定メテ布ス是レヲ公私通信便法開設ノ創業トス○  
 同年七月ニ横濱八月ニ函館長崎新潟神戸ノ五港ニ郵便復所ヲ設ケ○同年八月大阪以西書狀差立方ヲ示シ其貨物運送ノ規  
 布ス○同年十一月從前海道筋大阪迄ノ郵便方法ヲ改正シ東京長崎間ニ當十二月五日ヨリ實施セシム○同年十二月二十  
 日郵便書狀貨物運送ノ改ム是月相州横濱以東武州金澤ニ至ル毎月十二回ノ郵便ヲ開ク○同年二月東京府内ニ一日三回  
 ノ郵便ヲ開キ信書新聞ヲ配達セシム三月朔日ヲ以テ實施ス○同年三月改正府郡郵便規則ヲ大體省ヨリ頒布ス○同年五  
 月第百六十三號布告ヲ以テ東京府内間ハ一日五回ノ往復郵便ヲ開キ同六月朔日ヨリ施行シ郵便切手ナキ書狀ヲ業トシ  
 テ傳送スルヲ禁ス○同年六月東京府内及ヒ續濱市街往復郵便改正規則ヲ覽察ヨリ頒布ス○同年六月第百八十一號ヲ  
 以テ本年七月以降北海道後志兩國以北ヲ除キ國內本支道ノ別ナク縣廳所在地及港津市驛等公私要路驛多ノ地ハ總  
 テ信書送達ヲナサシム○六年三月第九十七號ヲ以テ本年四月一日以降郵便貨物ノ稱呼ヲ廢シ更ニ郵便稅ヲ與シ其目等  
 一ノ信書ヲシテ里程ノ遠近ニ拘ラス普ク國內通信シ得一ノ郵便稅ヲ收メシム且五月一日以降信書送達ノ事總テ驛遞  
 ノ特任ニ歸セシム此ニ至テ我國郵便ノ制始テ定ル是ヨリ以降明治十四年ニ至ル年々規則ヲ改定シテ公布スト雖モ一  
 ノ加除修正ニ止マルヲ以テ此ニ發セス○同年十一月第三百八十九號布告ヲ以テ郵便ハガキ紙及封紙ヲ發行シ其用法規  
 則ヲ制定ス○七年九月第九十號布告ヲ以テ郵便爲替規則ヲ制定シ三拾圓以下小金額ノ爲替方法ヲ施行ス○同年十二月  
 第百三十五號布告ヲ以テ貯金預リ規則ヲ制定ス○十五年十二月第五十九號布告ヲ以テ從前年々發令スル所ノ郵便規則  
 及ヒ罰則ヲ改メ更ニ郵便條例ヲ制定ス是現行法ナリ○三十三年三月法律第五十四號ヲ以テ郵便一ノ制定シ郵便條  
 例中ヲ廢止ス

十五年第五十  
九號布告郵便  
條ハ本年九月  
月三十一日  
テハ現行ノ  
モ略シテ載  
ス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル郵便法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

郵便法

- 第一條 郵便ハ政府之ヲ管掌ス
- 第二條 何人ト雖信書ノ送達ヲ營業ト爲スコトヲ得ス  
運送營業者及其ノ使用人ハ其ノ運送方法ニ依リ他人ノ爲ニ信書ノ送達ヲ爲スコトヲ得ス但シ貨物ニ添附スル無封ノ添狀又ハ送狀ハ此ノ限ニ在ラス
- 第三條 運送營業者ハ郵便官署ノ要求アルトキハ其ノ運送方法ニ依リ郵便物ノ運送ヲ拒ムコトヲ得ス此ノ場合ニ於テ郵便官署ハ相當ノ運送料金を支給ス
- 第四條 職務執行中ノ郵便送達ニ郵便集配人及郵便專用車馬ハ道路ニ障礙アリテ通行シ難キ場合ニ於テ塙壁又ハ欄柵ナキ宅地固知其ノ他ノ場所ヲ通行スルコトヲ得此ノ場合ニ於テ郵便官署ハ被害者ノ請求ニ因リ其ノ損害ノ賠償ヲ爲スヘシ
- 第五條 職務執行中ノ郵便送達人郵便集配人及郵便專用舟車馬等事故ニ遭遇シタル場合ニ於テ郵便送達人郵便集配人又ハ郵便吏員ヨリ助力ヲ求メラレタル者ハ正當ノ事由ナクシテ之ヲ拒ムコトヲ得ス此ノ場合ニ於テ郵便官署ハ助力者ノ請求ニ因リ相當ノ報酬ヲ爲スヘシ
- 第六條 職務執行中ノ郵便送達人郵便集配人及郵便專用舟車馬等ニ對シテハ渡津、運河、道路、橋梁

其ノ他ノ場所ニ於ケル通行錢ヲ請求スルコトヲ得ス

- 職務執行中ノ郵便送達人郵便集配人ハ何時ニテモ渡津ノ出船ヲ求ムルコトヲ得
- 第七條 郵便專用ノ物件及現ニ郵便ノ用ニ供スル物件ハ之ヲ差押フルコトヲ得ス  
郵便專用ノ物件ハ何等ノ賦課ヲ受クルコトナシ  
郵便物及其ノ取扱ニ必要ナル物件ハ海損ヲ分擔セス
- 第八條 郵便官署ハ郵便物ノ運送中又ハ其ノ發送ノ準備完了ノ後ニ限リ其ノ差押ヲ拒ムコトヲ得
- 第九條 郵便物検査ヲ受クヘキ場合ニ於テハ他ノ物件ニ先チテ直ニ検査ヲ受ク
- 第十條 郵便取扱ニ關シ無能力者ノ郵便官署ニ對シテ爲シタル行爲ハ能力者ノ爲シタルモノト看做ス
- 第十一條 郵便官署ハ郵便物又ハ郵便ニ依ル取立金ノ受取人ノ眞偽ヲ調査スル爲受取人ヲシテ必要ナル證明ヲ爲サシムルコトヲ得
- 第十二條 郵便物ハ命令ヲ以テ定ムル場合ヲ除クノ外其ノ宛所ニ配達ス
- 第十三條 郵便物ハ命令ヲ以テ定ムル場合ニ限リ差出人ノ請求ニ因リ之ヲ還付スルコトヲ得
- 第十四條 宛所ニ配達シ又ハ受取人ニ交付スルコト能ハサル郵便物ハ差出人ニ還付ス其ノ差出人ニ還付スルコト能ハサルモノハ主務大臣ノ指定シタル郵便官署ニ於テ之ヲ開披スルコトヲ得
- 第十五條 前條ニ依リ開披シタル郵便物ニシテ尙配達還付ヲ爲スコト能ハサルモノ及郵便ニ依ル取立金ニシテ拂渡ヲ爲スコト能ハサルモノハ之ヲ公示ス

郵便物ニ封入シタル物件ニシテ有價物ニ非サルモノハ其ノ公示ノ日ヨリ六箇月内ニ交付ヲ請求スル者ナキトキハ之ヲ棄却シ其ノ有價物ニシテ滅失若ハ毀損ノ虞アルモノ又ハ其ノ保管ニ過分ノ費用ヲ要スルモノナルトキハ之ヲ賣却シ其ノ代金ヲ保管ス但シ賣却ニ要スル經費ハ直ニ賣却代金ヲ以テ之ニ充ツルコトヲ得

有價物、賣却代金及郵便ニ依ル取立金ハ公示ノ日ヨリ二箇年間交付ヲ請求スル者ナキトキハ國庫ノ所有ニ歸ス

第十六條 郵便官署ハ郵便物ニ郵便禁制品ヲ封入シ又ハ成規ニ違反シテ差出シタル物件アリト認めルトキハ差出人ニ其ノ開示ヲ求ムルコトヲ得

差出人其ノ開示ヲ拒ミタルトキハ其ノ取扱ヲ拒絕ス

第十七條 郵便物ハ通常郵便物及小包郵便物トス

第十八條 通常郵便物ノ種類及料金ハ左ノ如シ

第一種 書	狀	重量四匁又ハ其ノ端數毎ニ	金 三 錢
第二種 郵便葉書	一通常葉書 二往復葉書 三封緘葉書	重量四匁又ハ其ノ端數毎ニ	金 一 錢 五 厘 金 三 錢 金 三 錢
第三種	毎月一回以上刊行スル定期刊行物	一號一箇重量二十匁又ハ其ノ端數毎ニ 二號又ハ二箇以上一號重量二十匁又ハ其ノ端數毎ニ	金 一 錢 金 五 厘

第四種 印刷物、業務用書類、寫眞、掛圖、標本、見本及彫形物、標上ノ標本

重量三十匁又ハ其ノ端數毎ニ

金 二 錢

第五種 農産物種子

重量三十匁又ハ其ノ端數毎ニ

金 一 錢

前項各種ニ該當セサル物件及該當スルモ封緘シタルモノハ第一種郵便物ト同一ノ取扱ヲ爲ス

異種ノ郵便物ヲ合裝シタルモノハ其ノ種類中ノ最高料金ヲ納付スヘキ郵便物ト同一ノ取扱ヲ爲ス

但シ第二種郵便物ヲ他種ノ郵便物ト合裝スルトキハ第一種郵便物ト同一ノ取扱ヲ爲ス

郵便葉書ノ表面又ハ第三種乃至第五種ノ郵便物ニ通信文ヲ記載シタルモノハ第一種郵便物ト同一ノ取扱ヲ爲ス

第十九條 小包郵便物ノ料金並郵便物ノ特殊取扱ニ關スル料金ハ命令ノ定ムル所ニ依ル

第二十條 書狀ハ小包郵便物ト爲シ又ハ小包郵便物ニ合裝スルコトヲ得ス但シ無封ノ添狀又ハ送狀ハ此ノ限ニ在ラス

第二十一條 第三種郵便物ト爲スヘキ定期刊行物ハ主務官署ノ認可ヲ受ケタルモノニ限ル

第二十二條 郵便禁制品ノ種類及郵便物ノ容積、重量、包裝等ニ關スル制限ハ命令ノ定ムル所ニ依ル

第二十三條 受取人ハ郵便料ヲ完納シタル郵便物ノ受取ヲ拒ムコトヲ得ス

差出人ハ還付郵便物ノ受取ヲ拒ムコトヲ得ス

第二十四條 郵便ニ關スル既納及過納ノ料金ハ命令ヲ以テ定ムル場合ヲ除クノ外之ヲ還付セス

第二十五條 命令ヲ以テ定ムル場合ヲ除クノ外郵便料未納又ハ不足ノ郵便物ハ受取人其ノ不納額ニ

倍ノ料金ヲ納付シテ之ヲ受取ルコトヲ得其ノ納付ヲ拒ミタルトキハ差出人ニ還付シ差出人ヨリ之ヲ徴收ス

第二十六條 郵便ニ關スル料金納付ノ義務ハ其ノ納付スヘキ日ヨリ六箇月内ニ納付ノ告知ヲ受ケサルニ因リテ消滅ス

第二十七條 郵便ニ關スル料金ノ不納金額ハ郵便官署ニ於テ國稅滯納處分ノ例ニ依リ之ヲ徴收ス前項ノ不納金額ニ付郵便官署ハ國稅ニ次キ先取特權ヲ有ス

第二十八條 郵便、郵便爲替、郵便貯金、電信、電話ノ事務ニ關スル郵便物ハ無料ト爲スコトヲ得

第二十九條 郵便ニ關スル料金ハ命令ヲ以テ定ムル場合ヲ除クノ外郵便切手其ノ他郵便料金ヲ表彰スヘキ證券ヲ以テ納付スヘシ

第三十條 郵便切手其ノ他郵便料金ヲ表彰スヘキ證券ハ政府之ヲ發行ス

第三十一條 郵便切手其ノ他郵便料金ヲ表彰スヘキ證券ノ汚損毀損シタルモノハ其ノ效用ヲ失フ

第三十二條 成規ノ手續ヲ經テ郵便物又ハ郵便ニ依ル取立金ヲ交付シタルトキハ正當ノ交付ヲ爲シタルモノト看做ス

第三十三條 成規ニ依リ差出シタル郵便物ノ取扱ニ關シ郵便官署ハ左ノ場合ニ限り其ノ損害ヲ賠償ス

- 一 書留郵便ヲ亡失シタルトキ
- 二 小包郵便物若ハ價格表記郵便物ヲ亡失又ハ毀損シタルトキ

三 郵便ニ依ル取立金ノ證券ヲ亡失シ又ハ其ノ效力ヲ失ハシメタルトキ  
賠償金額ハ命令ノ定ムル所ニ依ル

第三十四條 郵便物交付ノ際外部ニ破損ノ痕跡ナク且重量ニ變易ナキトキハ損害ナキモノト看做ス

第三十五條 第三十三條ノ場合ト雖左ノ事項ニ該當スルトキハ損害賠償ノ限ニ在ラス

一 差出人又ハ受取人ノ過失ニ因リタルトキ

二 不可抗力ニ因リタルトキ

三 其ノ郵便物ノ性質又ハ瑕疵ニ因リタルトキ

第三十六條 郵便物ノ差出人又ハ受取人ハ其ノ郵便物ニ損害アリト認ムルトキハ其ノ受取ヲ拒ムコトヲ得但シ郵便物受取ノ後ハ異議ヲ申立ツルコトヲ得ス

第三十七條 第三十三條ニ依ル損害賠償ハ差出人又ハ其ノ承諾ヲ得タル受取人之ヲ請求スルコトヲ得

第三十八條 本法ニ依ル損害賠償又ハ報酬ノ請求權ハ主務大臣ノ指定シタル郵便官署ニ對シ左ノ期間内之ヲ行ハサルニ因リテ消滅ス

一 第四條ニ依ル賠償及第五條ニ依ル報酬ハ其ノ事實アリタル日ヨリ三箇月

二 第三十三條ニ依ル賠償ハ郵便物差出ノ日ヨリ二箇年

第三十九條 郵便官署ノ損害賠償又ハ報酬ニ關スル決定ニ對シ不服アル者ハ其ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ三箇月以内ニ民事訴訟ヲ提起スルコトヲ得



第四十條 郵便官署ニ於テ損害賠償ヲ爲シタル後其ノ郵便物ヲ發見シタルトキハ之ヲ其ノ賠償受領者ニ通知スヘシ此ノ場合ニ於テ賠償受領者ハ其ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ六箇月以内ニ賠償金ノ全部又ハ一部ヲ返付シテ其ノ郵便物ノ交付ヲ請求スルコトヲ得

第四十一條 第二條ニ違反シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

前項ノ場合ニ於テ收得シタル金錢物品ハ之ヲ沒收シ既ニ消費又ハ讓渡シタルモノハ其ノ金額又ハ代價ヲ追徴ス

第四十二條 第三條ニ違反シタル者ハ十圓以上千圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十三條 第四條ノ場合ニ於テ通行ヲ拒ミ又ハ第五條ノ場合ニ於テ正當ノ事由ナクシテ力ヲ拒ミ又ハ第六條ノ場合ニ於テ通行錢ヲ強要シ若ハ正當ノ事由ナクシテ渡津ノ出船ヲ拒ミ又ハ第二十三條ニ違反シテ郵便物ノ受取ヲ拒ミタル者ハ科料ニ處ス

第四十四條 郵便官署ノ取扱中ニ係ル信書ノ祕密ヲ侵シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

郵便事務ニ従事スル者前項ノ所爲アリタルトキハ本刑ニ一等ヲ加フ

本條ノ罪ハ被害者ノ告訴ヲ待テ之ヲ論ス

第四十五條 第二十條ニ違反シタル者ハ十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十六條 郵便禁制品ヲ郵便物トシテ差出シタル者ハ五十圓以下ノ罰金ニ處シ其ノ物件ヲ沒收ス

第四十七條 不正ノ手段ヲ以テ郵便ニ關スル料金ヲ免レ又ハ免レムトシタル者ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

郵便事務ニ従事スル者前項ノ所爲アリタルトキハ本刑ニ一等ヲ加フ

第四十八條 帝國政府及郵便聯合條約國政府ノ發行スル郵便切手其ノ他郵便料金ヲ表彰スヘキ證票ヲ偽造變造シ又ハ其ノ情ヲ知テ之ヲ使用シタル者ハ一年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

前項ノ郵便切手其ノ他郵便料金ヲ表彰スヘキ證票ハ之ヲ沒收ス

第四十九條 帝國政府及郵便聯合條約國政府ノ發行スル郵便切手其ノ他郵便料金ヲ表彰スヘキ證票ヲ再ヒ使用シタル者ハ二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第五十條 郵便事務ニ従事スル者郵便官署ノ取扱中ニ係ル郵便物ニ使用シタル郵便切手其ノ他郵便料金ヲ表彰スヘキ證票ヲ剝脱切取シタルトキハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス其ノ未タ消印ヲ爲ササルモノニ關シテハ刑法竊盜ノ罪ニ照シテ處斷ス

第五十一條 郵便事務ニ従事スル者郵便官署ノ取扱中ニ係ル郵便物ヲ竊取シタルトキハ刑法竊盜ノ例ニ照シ一等ヲ加フ

第五十二條 郵便官署ノ取扱中ニ係ル郵便物ヲ止當ノ事由ナクシテ開披、毀損、隱匿若ハ抛棄シタル者又ハ受取人ニ非サル者ニ交付シ若ハ情ヲ知テ之ヲ受取リタル者ハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

郵便事務ニ従事スル者前項ノ所爲アリタルトキハ本刑ニ一等ヲ加フ

第五十三條 正當ノ事由ナクシテ郵便物ノ取扱ヲ拒絕シ若ハ其ノ送達ヲ遅延セシメタル者ハ重大ナル過失ニ因リ郵便物ヲ失ヒタル者ハ四十圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス

第五十四條 郵便専用ノ物件其ノ他現ニ郵便ノ用ニ供スル物件ヲ破壊損傷シタル者ハ一月以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第五十五條 第四十七條ヲ除クノ外前數條ニ記載シタル輕罪ヲ犯サムトシテ未タ遂ケサル者ハ刑法未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第五十六條 郵便物ニ關シ條約ニ別段ノ規定アルモノハ各其ノ規定ニ依ル

附則  
第五十七條 本法ハ明治三十三年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

郵便條例中第十二章及第二百四十二條以外ノ條項小包郵便法及郵便聯合國郵便切手額保護法ハ之ヲ廢止ス

第五十八條 本法施行前ニ差出シタル郵便物ニ關シテハ郵便條例及小包郵便法ヲ適用ス

○ 郵便爲替法 明治三十三年三月  
法律第五十五號  
朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル郵便爲替法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

郵便爲替法

第一條 郵便爲替ハ通常爲替電信爲替及小爲替ノ三種トス

第二條 通常爲替證書及小爲替證書ハ命令ヲ以テ定ムル場合ヲ除クノ外差出人ニ於テ之ヲ其ノ受取人ニ送達ス

電信爲替證書ハ郵便官署ニ於テ之ヲ其ノ受取人ニ送達ス

第三條 郵便官署ハ差出人ノ請求ニ因リ通常爲替證書及電信爲替證書ニ對スル郵便爲替金ノ拂渡前ニ於テ其ノ拂渡ヲ停止シ又ハ其ノ拂戻ヲ爲スコトヲ得

第四條 郵便爲替ニ關シ無能力者ノ郵便官署ニ對シテ爲シタル行爲ハ能力者ノ爲シタルモノト看做ス

第五條 郵便官署ハ受取人ノ眞偽ヲ調査スル爲受取人ヲシテ必要ナル證明ヲ爲サシムルコトヲ得

第六條 郵便爲替ニ關スル書類ニ付テハ印紙稅ヲ課セズ

第七條 郵便爲替金額ノ制限及郵便爲替ニ關スル料金ハ命令ノ定ムル所ニ依ル

第八條 郵便爲替ニ關スル料金ハ命令ヲ以テ定ムル場合ヲ除クノ外郵便切手ヲ以テ納付スヘシ

第九條 郵便爲替ニ關スル既納及過納ノ料金ハ命令ヲ以テ定ムル場合ヲ除クノ外之ヲ還付セズ

第十條 郵便爲替證書ノ有効期間ハ其ノ發行人日ヨリ通常爲替及電信爲替ニ在リテハ九十日小爲替ニ在リテハ六十日トス

前項ノ期間ハ交通不便ノ地方ニ付テハ命令ヲ定ムル所ニ依テ之ヲ延長スルコトヲ得

第十一條 郵便官署ニ於テ郵便爲替金ノ拂渡ヲ遅延シタル爲經過シタル日數ハ前條ノ有効期間ニ算入セス

第十二條 郵便爲替證書ノ有効期間ヲ經過シタルトキ又ハ郵便爲替證書ヲ亡失毀損若ハ汚損シタルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ差出人又ハ受取人ニ於テ再度證書ノ交付又ハ爲替金ノ拂戻ヲ請求スルコトヲ得

再度證書ヲ發行シタルトキハ原證書ハ無効トス

第十三條 郵便爲替證書ノ有効期間満了ノ日ヨリ三箇年間前條ノ請求ヲ爲ササルトキハ其ノ郵便爲替金ハ國庫ノ所有ニ歸ス

第十四條 成規ノ手續ヲ經テ爲替金ヲ交付シタルトキハ正常ノ拂渡ヲ爲シタルモノト看做ス

第十五條 郵便官署ハ郵便爲替金拂渡ノ遅延ニ因リ生シタル損害ニ付賠償ノ責ニ任セス

第十六條 郵便爲替ニ關シ條約ニ別段ノ規定アルモノハ各其ノ規定ニ依ル

附則

第十七條 本法ハ明治三十三年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

郵便條例第十二章及第二百四十二條ハ之ヲ廢止ス

第十八條 本法施行前ニ發行シタル郵便爲替證書及郵便小爲替證書ニ關シテハ本法ノ規定ヲ適用ス但シ本法施行前其ノ有効期間満了シタルモノニ在リテハ第十三條ノ期間ハ五箇年トシ其ノ有効期間満了セサルモノニ在リテハ第十條第一項ノ期間ハ郵便爲替證書ニ付テハ百二十日郵便小爲替證書ニ付テハ六十日トス

書ニ付テハ六十日トス

○鐵道船舶郵便法明治三十三年三月法律第五十六號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル鐵道船舶郵便法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

鐵道船舶郵便法

第一條 本法ニ於テ鐵道運送業者ト稱スルハ私設鐵道條例ニ依リ鐵道ヲ以テ運送營業ヲ爲ス者ヲ謂ヒ船舶運送業者ト稱スルハ商法ニ依リ船舶ヲ以テ運送營業ヲ爲ス者ヲ謂フ

第二條 鐵道運送業者ハ郵便取扱ノ爲郵便官署ノ要求アルトキハ鐵道用地及停車場建物ノ一部ヲ供シ又ハ建物ノ建築若ハ改築ヲ爲スヘシ

前項ノ場合ニ於テ土地建物ノ使用料及建築改築ノ費用ハ郵便官署之ヲ支給ス

第三條 鐵道運送業者ハ郵便官署ノ要求アルトキハ定期列車毎ニ郵便車トシテ列車定數ノ總容積ノ五分ノ一迄ハ其ノ列車ノ一部ヲ供給シ又ハ郵便官署ノ交付ニ係ル同一容積以内ノ郵便車ヲ聯結スヘシ

船舶運送業者郵便官署ノ要求アルトキハ其ノ船舶ニ相當ノ郵便船室ヲ供給スヘシ

第四條 郵便車ノ構造ハ通常客車ト同一タルコトヲ要ス

第五條 郵便車又ハ郵便船室ニハ郵便物郵便取扱員及其ノ監視員ノ外搭載スルコトヲ得ス

第六條 鐵道運送業者又ハ船舶運送業者ハ郵便官署ノ要求ニ應シ郵便車又ハ郵便船室ニ郵便物ノ取扱ニ必要ナル設備及維持ヲ爲スヘシ

鐵道運送業者ハ郵便官署ノ交付ニ係ル郵便車ヲ保管スヘシ

前二項ノ場合ニ於テ設備維持及保管ニ要スル費用ハ郵便官署之ヲ支給ス

第七條 鐵道運送業者ハ列車仕立驛ニ於テ指定ノ郵便車ノ外臨時容積ノ増加ヲ要シ又ハ臨時郵便車ノ聯結ヲ要スル爲其ノ列車出發時刻三十分前迄ニ郵便官署ノ要求アルトキハ他ノ郵便車ヲ聯結シ又ハ通常客車ヲ其ノ代用ニ供スヘシ

第八條 鐵道運送業者ハ郵便官署ニ於テ郵便車ニ依ラサル郵便物ノ運送ヲ要求シタルトキハ旅客列車ニ依リ運送スル貨物ト同一ノ方法ヲ以テ之ヲ運送スヘシ

第九條 鐵道運送業者列車ノ發着時刻ヲ變更スルトキハ七日以前ニ之ヲ郵便官署ニ報告スヘシ但シ天災其ノ他避クヘカラサル事故ノ爲發着時刻ノ變更ヲ決定シタルトキハ直ニ報告スヘシ

第十條 郵便車ノ使用料金ハ左ノ割合ニ依ル

三百立方尺迄 一哩毎ニ 金一錢八厘以内

五百立方尺迄 一哩毎ニ 金三錢五厘以内

七百立方尺迄 一哩毎ニ 金五錢六厘以内

千立方尺迄 一哩毎ニ 金九錢以内

千立方尺ヲ超過シタルトキハ其ノ全容積ニ對シ百立方尺迄ニ付一哩毎ニ金一錢以内

郵便車ノ容積ハ各列車ニ於ケル郵便車總容積ヲ以テ之ヲ算定ス其ノ容積ノ算定方法ハ命令ノ定ムル所ニ依ル

郵便物ヲ旅客列車ニ依リ運送スル貨物ト同一ノ方法ヲ以テ運送セシムルトキハ其ノ運送料金ハ其ノ鐵道運送業者ノ定メタル普通貨物運賃ノ最低額ノ半額以内トス

郵便官署ヨリ郵便車ヲ交付シタル場合ニ於テ鐵道運送業者ニ支給スヘキ金額ハ命令ノ定ムル所ニ

依ル

第十一條 船舶運送業者ハ船舶ニ搭載シタル郵便物ヲ其ノ目的地ニ於テ他ノ貨物ニ先テ陸揚スヘシ天災事變ノ爲航海ノ途中ニ於テ積替若ハ陸揚スルトキ亦同シ

第十二條 船舶運送業者ハ交付スヘキ運送料金ハ命令ノ定ムル所ニ依ル

第十三條 郵便物搭載列車天災事變ノ爲其ノ進行ヲ停止シタルトキ又ハ郵便物搭載船舶航行中天災事變ニ因リ郵便物ヲ陸揚シタルトキハ鐵道運送業者又ハ船舶運送業者ハ郵便取扱員ノ在ラサル場合ニ限り直ニ該郵便物ヲ附近郵便官署ニ送達スヘシ其ノ送達ニ要スル費用ハ之ヲ支給ス

第十四條 第三條ノ要求ニ應セザル者又ハ正當ノ理由ナクシテ第二條若ハ第七條ノ要求ニ應セザル者ハ五十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十五條 第六條第一項及第二項ニ違反シタル者又ハ正當ノ理由ナクシテ第八條ノ要求ニ應セザル者ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス第五條ニ違反シタル鐵道運送業者及船舶運送業者亦同シ

第十六條 第十三條ニ依リ送達ヲ爲ササル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十七條 過失ニ依リ運送中ニ係ル郵便物ヲ亡失シ又ハ之ヲ毀損シタルトキハ鐵道運送業者又ハ船舶運送業者ヲ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十八條 第九條又ハ第十一條ニ違反シタル者ハ二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第十九條 法人ノ業務ニ關シ其ノ代表者又ハ雇人其ノ他ノ從業者前數條ノ罪ヲ犯シタルトキハ其ノ罰則ヲ法人ニ適用ス

法人ヲ處罰スヘキ場合ニ於テハ法人ノ代表者ヲ以テ被告人トス

法人ヲ處罰スルノ裁判確定シタル日ヨリ罰金ニ關シテハ一月以内科料ニ關シテハ十日以内ニ之ヲ

送納セザルトキハ民事訴訟法第六編ノ規定ニ從ヒテ其ノ執行ヲ爲ス此ノ場合ニ於テハ檢事ノ命令ヲ以テ執行力ヲ有スル債務名義上同一ノ效力アルモノトス

前項ニ依リ執行ヲ爲スニハ執行前裁判ノ送達ヲ爲スコトヲ要セス

第二十條 軌道條例ニ依リ運送營業ヲ爲ス者ニ對シテハ命令ノ定ムル所ニ依リ本法ノ規定ヲ準用スルコトヲ得

第二十一條 鐵道又ハ航路若ハ船舶ニ關シ政府ヨリ補助ヲ受ケ若ハ受ケタル鐵道運送業者又ハ船舶運送業者ニ對シ特別ノ命令アルトキハ其ノ命令ニ依ル

附則

本法ハ明治三十三年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

○小包郵便物ノ郵便料保險料賠償金額容積重量及價額登記制限明治二十五年六月勅令第五十七號

○小包郵便物ノ郵便料、保險料、賠償金額、容積、重量及價額登記制限ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 小包郵便料ハ小包郵便物ノ重量及其差立郵便局ヨリ配達郵便局マテノ里程ニ從ヒ別表ニ依リ之ヲ徵收ス但シ日本、清、韓三國相互間發着スルモノニ限リ重量ニ從ヒ徵收ス(三十二年勅令第二百四十八號ヲ以テ但シ追加)

第二條 (二十九年勅令第五百十號ヲ以テ本條別除)

第三條 小包郵便物ノ容積及重量ハ左ノ制限ヲ超過スルコトヲ得ス

長 曲尺二尺  
幅 曲尺二尺  
厚 曲尺二尺

但幅及厚各五寸以内ノモノハ長三尺ヲ限リ差出スコトヲ得(二十九年勅令第五百十號ヲ以テ但シ追加)

重量 一貫五百匁

第四條 小包郵便物ノ登記價額ハ金百五十圓ヲ超過スルコトヲ得ス

第五條 價額登記小包郵便物ノ保險料ハ登記金額壹圓マテ金七錢トシ壹圓以上ハ壹圓マテ毎ニ金壹錢ヲ加フ

第六條 通常小包郵便物ノ損害ニ對シテハ重量百匁ニ付金拾錢ノ割合ヲ以テ之ヲ賠償シ其一部分ノ損害ニ對シテハ此制限内ニ於テ其損害ノ多少ニ從ヒ之ヲ賠償ス

第七條 價額登記小包郵便物ノ損害ニ對シテハ其登記金額マテ之ヲ賠償シ其一部分ノ損害ニ對シテハ登記金額内ニ於テ其損害ノ多少ニ從ヒ之ヲ賠償ス

第八條 小包郵便物ヲ取扱フ郵便局ハ遞信大臣隨時之ヲ告示ス

(別表) (二十九年勅令第五百十三號ヲ以テ別表ヲ改正ス三十二年勅令第二百四十八號ヲ以テ日本清韓三國相互間ニ發着スル重量料金ノ一欄ヲ追加ス)

第十七條 小包郵便物ノ郵便料保險料賠償金額容積重量及價額登記制限

二十三年號信  
 令第二十三  
 則以郵便  
 金條例施行  
 則施行

小包郵便料	二百匁	四百匁	六百匁	八百匁	一貫	二貫	三貫	四貫	五貫
十里	七錢	九錢	十一錢	十三錢	十五錢	十七錢	十九錢	二十一錢	二十三錢
百里	八錢	十二錢	十六錢	二十錢	二十四錢	二十八錢	三十二錢	三十六錢	四十錢
百里以外	十六錢	二十四錢	三十二錢	四十錢	四十八錢	五十六錢	六十四錢	七十二錢	八十錢
内地	三十錢	四十五錢	六十錢	七十五錢	九十錢	一百一十錢	一百二十錢	一百三十錢	一百四十錢
内地	二百匁	四百匁	六百匁	八百匁	一貫	二貫	三貫	四貫	五貫
十里	十錢	十四錢	十八錢	二十二錢	二十六錢	三十錢	三十四錢	三十八錢	四十二錢
百里	十六錢	二十四錢	三十二錢	四十錢	四十八錢	五十六錢	六十四錢	七十二錢	八十錢
百里以外	三十二錢	四十八錢	六十四錢	八十錢	九十六錢	一百一十二錢	一百二十八錢	一百四十四錢	一百六十錢

○郵便貯金條例  
 明治二十三年八月三十一日法律第六十三號  
 沿革略記  
 明治七年十二月第百三十五號布告ヲ以テ郵便規則中貯金預リ規則ヲ制定ス是ヨリ以降明治十四年ニ至ル迄年々郵便規則ヲ改定スルニ由リテ雖モ一ニ加除修正ニ止マルヲ以テ此ニ贊セス  
 十五年十二月第百五十九號布告ヲ以テ從前年々改定スル所ノ郵便規則ヲ改メ更ニ郵便條例ヲ制定ス  
 二十三年八月法律第六十三號ヲ以テ郵便貯金條例ヲ制定ス

朕郵便貯金條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

郵便貯金條例

- 第一條 郵便貯金ノ事務ハ逓信大臣之ヲ管理ス
- 第二條 郵便貯金ハ逓信大臣ノ指定スル郵便電信局郵便局ニ於テ其預入拂渡ヲ取扱フモノトス  
 逓信大臣ニ於テ必要ト認ムル場所ニハ特ニ郵便貯金預所ヲ設置シ郵便貯金ノ預入ヲ取扱ハシムルコトアルヘシ
- 第三條 郵便貯金ノ預入ハ貯金通帳ヲ以テ證トシ其拂戻ハ拂戻證書ヲ以テ證トス
- 第四條 郵便貯金一人一度ノ預金ハ拾錢以上トシ端數ハ厘位ニ限ル一人一日ノ預金ハ五拾圓以下トス  
 郵便貯金一人ノ預金總額ハ元利合セテ五百圓ニ超過スルコトヲ得ス
- 第五條 郵便貯金利子ノ割合ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム  
 郵便貯金ノ利子ハ毎年三月三十一日ヲ期トシテ之ヲ計算シ元金ニ加ヘ四月ヨリ更ニ利子ヲ付スヘシ  
 郵便貯金ハ之ヲ預リタル月及拾錢未滿ノ端數ニハ利子ヲ付セス  
 郵便貯金拂戻ノ請求アリタルトキハ拂戻證書發布ノ月ヨリ利子ヲ付セス
- 第六條 郵便貯金ノ利子計算上厘位未滿ノ端數ヲ生シタルトキハ之ヲ除棄スヘシ  
 郵便貯金ノ預ケ人ノ何時ニテモ郵便貯金ノ全額又ハ其幾分ノ拂戻ヲ請求スルコトヲ得但幾分拂戻ノ場合ニハ其未タ元金ニ加ヘサル利子ハ拂戻ヲ請求スルコトヲ得ス
- 第七條 郵便貯金預ケ人ハ其貯金ノ幾分ヲ以テ公債證書ノ購入保管ヲ請求スルコトヲ得但公債證書ハ額面五十圓又ハ五十圓ヲ追加シタルモノニ限ル

郵便貯金預ケ人ハ何時ヒテモ前項保管ニ係ル公債證書ノ下渡ヲ請求スルコトヲ得

郵便貯金預ケ人貯金金額ノ拂戻ヲ請求スルトキハ保管ニ係ル公債證書モ同時ニ其下渡ヲ請求スヘシ

第八條 郵便貯金ノ預ケ金額第四條ノ制限ニ超過シタルトキハ其旨ヲ貯金預ケ人ニ通知シ預ケ金額ヲ制限以内ニ引直サシムヘシ

前項ノ通知ヲ發シタル後六十日以内ニ引直ヲ爲サ、ルトキハ貯金預ケ人ノ爲メ其貯金ヲ以テ公債證書ヲ購入スルモノトス但此場合ニ於テ購入スル公債證書ハ額面五十圓ヲ超過スルコトヲ得ス

第九條 郵便貯金通帳ハ一人一冊ヲ限リトス若シ二冊以上ノ通帳ヲ受領シテ貯金預入ヲ爲シタル者アリタルトキハ最初受領セシ通帳ニ記載セル貯金ノ外利子ヲ付セスシテ拂戻ヲ爲サシム若シ二冊以上通帳ノ日附同一ナルトキハ其貯金最多額ノモノニ利子ヲ付シ其他ノモノニハ總テ利子ヲ付セ

スシテ拂戻ヲナサシム

第十條 郵便貯金預ケ人ハ最初貯金ノ預入ヲ爲シタル月ヨリ滿一年毎ニ其通帳ヲ遞信省ニ差出シ前期間利子ノ記入ヲ受クヘシ但一年ノ終期四月又ハ五月ニ當ルモノハ之ヲ六月ニ差出スヘシ

第十一條 郵便貯金ハ其預ケ人最後ニ貯金預入ヲ爲シタル日又ハ通帳ヲ遞信省ニ差出シ其書換又ハ利子ノ記入ヲ受ケタル日又ハ拂戻ヲ請求シタル日ヨリ起算シ十年間預入ヲ爲サス又ハ拂戻ヲ請求

セス又ハ通帳ヲ遞信省ニ差出サ、ルトキハ滿期ノ翌月ヨリ利子ヲ付セス但保管ニ係ル公債證書ノ利子ハ此限ニアラス

尙二十年間貯金ノ預入ヲ爲サス又ハ拂戻ヲ請求セス又ハ通帳ヲ遞信省ニ差出サ、ルトキハ其貯金ハ政府ノ所得トス

前項貯金ヲ政府ノ所得トスル場合ニ於テ保管ニ係ル公債證書アルトキハ其公債證書モ併テ政府ノ所得トス

若シ第二項ノ期限内ニ貯金ノ預入ヲ爲シ又ハ拂戻ヲ請求シ又ハ通帳ヲ遞信省ニ差出シタルトキハ其翌月ヨリ利子ヲ付ス

第十二條 郵便貯金ノ拂戻金又ハ下渡ヲ請求シタル公債證書ハ拂戻證書又ハ下渡證書ノ日附ヨリ一箇年以内ニ受取ルヘシ若シ此期限内ニ受取ラサルトキハ之ヲ供託所ニ寄託スヘシ

第十三條 郵便貯金預ケ人ハ郵便貯金ヲ家督相続人ニ讓與スル場合ヲ除クノ外其名前書換ヲ請求スルコトヲ得ス

第十四條 郵便貯金預ケ人ニ損害ヲ蒙ラシメ政府其辨償ノ責ニ任スヘキ場合ニ於テハ郵便貯金預ケ人ハ其事故ノアリタルコトヲ知リタル日又之ヲ知ル能ハサルトキハ次期ノ利子記入期限ヨリ一箇年以内ニ其辨償ノ請求ヲ爲スヘシ若シ其期限内ニ請求ヲ爲サ、ルトキハ政府其責ヲ免カルモノトス

第十五條 郵便貯金事務ニ關スル郵便物ハ郵便税ヲ免除ス

第十六條 郵便貯金ノ受渡ニ關スル書類ハ證券印税ヲ免除ス

第十七條 本條例施行ノ細則ハ遞信大臣之ヲ定ム

明治十五年十二月第五十九號布告郵便條例第五百七條乃至第二百二條及第二百四十二條第二項ハ  
本條例施行ノ日ヨリ廢止ス

○郵便貯金利子ノ割合明治三十一年四月勅令第七十三號

沿革略記 二十三年十一月勅令第二百七十八號ヲ以テ郵便貯金利子ノ割合ヲ定ム●三十一年四月勅令第七十三號ヲ以テ  
前令ヲ改正ス

朕郵便貯金利子割合改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
明治三十一年四月一日以後付スヘキ郵便貯金利子ノ割合ハ一箇年元金百分ノ四分八厘トス  
但シ明治二十三年十二月三十一日以前ノ貯金ニシテ一人ノ預ケ金千圓ヲ超過シタルモルニ對  
スル利子ノ割合ハ一箇年元金百分ノ三分六厘トス

○鐵道敷設法明治二十五年六月勅令第八號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル鐵道敷設法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
鐵道敷設法

第一章 總則

第一條 政府ハ帝國ニ必要ナル鐵道ヲ完成スル爲メ漸次豫定ノ線路ヲ調査シ及敷設ス

三十年法律第  
一號ヲ以テ公  
價ノ利子ハ三  
月九月ニ於テ  
支拂フモノト

第二條 豫定鐵道線路ハ左ノ如シ

中央線

一 神奈川縣下八王子若ハ靜岡縣下御殿場ヨリ山梨縣下甲府及長野縣下諏訪ヲ經テ伊那郡若ハ西筑  
摩郡ヨリ愛知縣下名古屋ニ至ル鐵道

一 長野縣下長野若ハ篠ノ井ヨリ松本ヲ經テ前項ノ線路ニ接続スル鐵道

一 山梨縣下甲府ヨリ靜岡縣下岩淵ニ至ル鐵道  
(三十年法律第六號ヲ以テ改正)

一 岐阜縣下多治見ヨリ岐阜ニ至ル鐵道

北陸線

一 福井縣下敦賀ヨリ石川縣下金澤ヲ經テ富山縣下富山ニ至ル鐵道及本線ヨリ分岐シテ石川縣下七  
尾ニ至ル鐵道

一 京都府下舞鶴ヨリ福井縣下小濱ヲ經テ敦賀ニ至ル鐵道(二十八年法律第十一號ヲ以テ本項追加ス)

一 富山縣下富山ヨリ新潟縣下直江津ニ至ル鐵道

北越線

一 新潟縣下直江津又ハ群馬縣下前橋若ハ長野縣下豐野ヨリ新潟縣下新潟及新發田ニ至ル鐵道



羽越線及岩越線(二十八年法律第十)

- 一新潟縣下新發田ヨリ山形縣下米澤ニ至ル鐵道
- 一新潟縣下新津ヨリ福島縣下若松ヲ經テ白河本宮近傍ニ至ル鐵道

奥羽線

- 一福島縣下福島近傍ヨリ山形縣下米澤及山形秋田縣下秋田青森縣下弘前ヲ經テ青森ニ至ル鐵道及本線ヨリ分岐シテ山形縣下酒田ニ至ル鐵道
- 一宮城縣下仙臺ヨリ山形下天童若ハ宮城縣下石ノ巻ヨリ小午田ヲ經テ山形縣下船形町ニ至ル鐵道
- 一巖手縣下黒澤尻若ハ花巻ヨリ秋田縣下横手ニ至ル鐵道
- 一巖手縣下盛岡ヨリ宮古若ハ山田ニ至ル鐵道

總武線及常磐線

- 一東京府下上野ヨリ千葉縣下千葉、佐倉ヲ經テ銚子ニ至ル鐵道及本線ヨリ分岐シテ木更津ニ至ル鐵道

- 一茨城縣下水戸ヨリ福島縣下平ヲ經テ宮城縣下岩沼ニ至ル鐵道

近畿線

- 一奈良縣下奈良ヨリ三重縣下上栢植ニ至ル鐵道
- 一大阪府下大阪若ハ奈良縣縣下八木又ハ高田ヨリ五條ヲ經テ和歌山縣下和歌山ニ至ル鐵道
- 一京都府下京都ヨリ奈良縣下奈良ニ至ル鐵道
- 一京都府下京都ヨリ舞鶴ニ至ル鐵道

山陽線

- 一廣島縣下三原ヨリ山口縣下赤間關ニ至ル鐵道
- 一廣島縣下海田市ヨリ吳ニ至ル鐵道

山陰線

- 一京都府下舞鶴ヨリ兵庫縣下豐岡、鳥取縣下鳥取、島根縣下松江、濱田ヲ經テ山口縣下山口近傍ニ至ル鐵道

山陰及山陽連絡線

- 一兵庫縣下姫路ヨリ生野若ハ笹山ヲ經テ京都府下舞鶴又ハ園部ニ至ル鐵道若ハ兵庫縣下土山ヨリ京都府下福知山ヲ經テ舞鶴ニ至ル鐵道
- 一兵庫縣下姫路近傍ヨリ鳥取縣下鳥取ニ至ル鐵道又ハ岡山縣下岡山ヨリ津山ヲ經テ鳥取縣下米子及境ニ至ル鐵道若ハ岡山縣下倉敷又ハ玉島ヨリ鳥取縣下境ニ至ル鐵道
- 一廣島縣下廣島ヨリ島根縣下濱田ニ至ル鐵道

四國線

- 一香川縣下琴平ヨリ高知縣下高知ヲ經テ須崎ニ至ル鐵道
- 一徳島縣下徳島ヨリ前項ノ線路ニ接續スル鐵道
- 一香川縣下多度津ヨリ愛媛縣下今治ヲ經テ松山ニ至ル鐵道

九州線

- 一佐賀縣下佐賀ヨリ長崎縣下佐世保及長崎ニ至ル鐵道
- 一熊本縣下熊本ヨリ三角ニ至ル鐵道及宇土ヨリ分岐シ八代ヲ經テ鹿兒島縣下鹿兒島ニ至ル鐵道

廿七年法律第廿七號ヲ以テ東京  
八號ヲ以テ京都  
八號ヲ以テ京都  
八號ヲ以テ京都  
八號ヲ以テ京都  
八號ヲ以テ京都  
八號ヲ以テ京都  
八號ヲ以テ京都  
八號ヲ以テ京都  
八號ヲ以テ京都

一 熊本縣下熊本ヨリ大分縣下大分ニ至ル鐵道  
 一 福岡縣下小倉ヨリ大分縣下大分、宮崎縣下宮崎ヲ經テ鹿児島縣下鹿児島ニ至ル鐵道  
 一 福岡縣下飯塚ヨリ原田ニ至ル鐵道  
 一 福岡縣下久留米ヨリ山鹿ヲ經テ熊本縣下熊本ニ至ル鐵道  
 以上ノ線路ニ變更増減ヲ要スルモノアルトキハ帝國議會ノ協贊ヲ經テ之ヲ決定スヘシ

第三條 鐵道工事ハ緩急ニ應ジテ其期限ヲ數期ニ區分シ每期ノ工事ヲ繼續事業トス

第四條 鐵道事業ニ要スル費用ハ公債ヲ募集シテ之ニ充ツ

第五條 鐵道公債ノ利子ハ一箇年百分ノ五以下トス

第六條 鐵道公債ニ關シ本法ニ規定ナキモノハ總テ明治十九年勅令第六十六號整理公債條例ニ據ル

第二章 第一期鐵道及公債募集

第七條 豫定線路中左ノ線路ハ第一期間ニ於テ其ノ實測及敷設ニ著手ス

一 中央豫定線ノ内神奈川縣下八王子若ハ靜岡縣下御殿場ヨリ山梨縣下甲府及長野縣下諏訪ヲ經テ伊那郡若ハ西筑摩郡ヨリ愛知縣下名古屋ニ至ル鐵道

一 北陸豫定線ノ内福井縣下敦賀ヨリ石川縣下金澤ヲ經テ富山縣下富山ニ至ル鐵道

一 北越豫定線ノ内新潟縣下直江津又ハ群馬縣下前橋若ハ長野縣下豐野ヨリ新潟縣下新潟及新發田ニ至ル鐵道

一 奥羽豫定線ノ内福島縣下福島近傍ヨリ山形縣下米澤及山形、秋田縣下秋田、青森縣下弘前ヲ經テ

廿七年法律第廿七號ヲ以テ東京  
八號ヲ以テ京都  
八號ヲ以テ京都  
八號ヲ以テ京都  
八號ヲ以テ京都  
八號ヲ以テ京都  
八號ヲ以テ京都  
八號ヲ以テ京都  
八號ヲ以テ京都  
八號ヲ以テ京都

青森ニ至ル鐵道

一 山陽豫定線ノ内廣島縣下三原ヨリ山口縣下赤間關ニ至ル鐵道及廣島縣下海田市ヨリ吳ニ至ル鐵道

一 九州豫定線ノ内佐賀縣下佐賀ヨリ長崎縣下長崎及佐世保ニ至ル鐵道及熊本縣下熊本ヨリ三角ニ至ル鐵道

一 近畿豫定線ノ内京都府下京都ヨリ舞鶴ニ至ル鐵道若ハ兵庫縣下土山ヨリ京都府下福知山ヲ經テ舞鶴ニ至ル鐵道

一 近畿線ノ内大阪府下大阪若ハ奈良縣下高田若ハ八木ヨリ五條ヲ經テ和歌山縣下和歌山ニ至ル鐵道

一 山陰山陽聯絡豫定線ノ内兵庫縣下姫路近傍ヨリ鳥取縣下鳥取ヲ經テ境ニ至ル鐵道又ハ岡山縣下岡山ヨリ津山ヲ經テ鳥取縣下境ニ至ル鐵道若ハ岡山縣下倉敷ヨリ鳥取縣下境ニ至ル鐵道

一 中央豫定線ノ内長野縣下長野若ハ篠ノ井ヨリ松本ヲ經テ第一項ノ線路ニ接續スル鐵道(二十七年法律第二十號ヲ以テ)

一 九州豫定線ノ内熊本縣下宇土ヨリ八代ヲ經テ鹿児島縣下鹿児島ニ至ル鐵道(上)

以上線路ノ外ニ尙敷設ノ急ヲ要スヘシト認ムルモノアルトキハ帝國議會ノ協贊ヲ經テ更ニ第一期工事トシ特ニ公債ヲ募集スルコトヲ得

比較線路ハ政府ニ於テ更ニ調査ヲ遂ケ帝國議會ノ協贊ヲ經テ之ヲ決定スヘシ

第八條 第一期鐵道工事ハ起工ノ年ヨリ向フ十二箇年ヲ以テ成效期限トス

第九條 第一期鐵道敷設ノ費用ニ充ツル爲金六千萬圓ヲ限リ明治二十六年度ヨリ十二箇年間ニ漸次公債ヲ募集スヘシ(二十六年法律第十一號ヲ以テ明治二十五年度ヲ明治二十六年度ニ改正ス)

第十條 政府ハ第一期ニ敷設スヘキ鐵道線路ヲ實測シ毎線路ノ工費豫算ヲ定メ帝國議會ノ協賛ヲ求ムヘシ

第三章 私設鐵道ノ處分

第十一條 既成私設鐵道ニシテ第二條ニ依リ敷設スヘキ線路ノ爲買收ノ必要アリト認ムルモノハ政府ハ其ノ會社ト協議ノ上價格ヲ豫定シ帝國議會ノ協賛ヲ求ムヘシ

第十二條 私設鐵道買收ノ費用ハ公債ヲ發行シ代價トシテ其ノ會社ニ交付スヘシ

第十三條 豫定鐵道線路中私設會社ニ敷設ヲ許可シタルモノハ其ノ會社ノ全部線路ヲ買收スルカ又ハ會社ノ申請ニ依リ相當ノ處分ヲナシタル上ニアラサレハ之ヲ敷設セス

第十四條 豫定鐵道線路中未タ敷設ニ著手セサルモノニシテ若私設鐵道會社ヨリ敷設ノ許可ヲ願出ル者アルトキハ帝國議會ノ協賛ヲ經テ之ヲ許可スルコトアルヘシ

第四章 鐵道會議

第十五條 政府ハ鐵道會議ニ諮詢シテ左ノ事項ヲ施行ス

一 鐵道工事著手ノ順序

一 第十條ノ決定ニ基キ鐵道工事ノ都合ニ依リ其ノ都度募集スヘキ公債金額

第十六條 鐵道會議ノ組織ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

○豫定鐵道線路中私設鐵道會社ニ敷設ヲ許可ス

朕帝國議會ノ會協賛ヲ經タル豫定鐵道線路中私設鐵道會社ニ敷設許可ノ件ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム明治二十七年六月法律第十三號

明治二十五年法律第四號鐵道敷設法豫定鐵道線路中左ノ線路ハ私設鐵道會社ニ其ノ敷設ヲ許可スルコトヲ得

一 新潟縣下直江津ヨリ新潟及新發田ニ至ル鐵道

一 京都府下京都ヨリ舞鶴ニ至ル鐵道

一 奈良縣下高田ヨリ五條ヲ經テ和歌山縣下和歌山ニ至ル鐵道線中五條ヨリ和歌山縣下和歌山ニ至ル鐵道

一 福井縣下敦賀ヨリ石川縣下金澤ヲ經テ富山縣下富山ニ至ル鐵道線ヨリ分岐シテ石川縣下七尾ニ至ル鐵道

一 東京府下上野ヨリ千葉縣下千葉佐倉ヲ經テ銚子ニ至ル鐵道線中千葉縣下佐倉ヨリ銚子ニ至ル鐵道

一 茨城縣下水戸ヨリ福島縣下平ヲ經テ宮城縣下若沼ニ至ル鐵道

一 奈良縣下奈良ヨリ三重縣下上柘植ニ至ル鐵道

第十七條 豫定鐵道線路中私設鐵道會社ニ敷設ヲ許可ス

一兵庫縣下姫路ヨリ生野若ハ笹山ヲ經テ京都府下舞鶴又ハ園部ニ至ル鐵道若ハ兵庫縣下土山ヨリ京都府下福知山ヲ經テ舞鶴ニ至ル鐵道線中兵庫縣下谷川ヨリ笹山及谷川ヨリ京都府下福知山ニ至ル鐵道

一福島縣下福島近傍ヨリ山形縣下米澤及山形秋田縣下秋田青森縣下弘前ヲ經テ青森ニ至ル鐵道線ヨリ分岐シテ山形縣下酒田ニ至ル鐵道

○

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル豫定鐵道線路中私設鐵道會社ニ敷設許可ノ件ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム 明治二十七年六月 法律第十四號

明治二十五年法律第四號鐵道敷設法豫定鐵道線路中左ノ線路ハ私設鐵道會社ニ其ノ敷設ヲ許可スルコトヲ得

一東京府下上野ヨリ千葉縣下千葉佐倉ヲ經テ銚子ニ至ル鐵道線ヨリ分岐シテ木更津ニ至ル鐵道線中千葉縣下千葉ヨリ會我町ニ至ル鐵道

一福岡縣下久留米ヨリ山鹿ヲ經テ熊本縣下熊本ニ至ル鐵道線中熊本縣下山鹿ヨリ植木ニ至ル鐵道

政府ハ前項ノ許可ヲ與フル場合ニ於テ本線路ノ全部ヲ敷設スルノ必要ヲ認ムルニ當リ其ノ會社ニ於テ之カ敷設ヲ爲サ、ルトキハ其ノ建設費實費ヲ以テ前項ノ鐵道ヲ政府ニ買収シ又ハ之ヲ他

ノ會社ニ賣渡サシムル爲相當ノ條件ヲ附スヘシ

○

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル豫定鐵道線路中私設鐵道會社ニ敷設許可ノ件ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム 明治二十七年六月 法律第十五號

明治二十五年法律第四號鐵道敷設法豫定鐵道線路中左ノ線路ハ私設鐵道會社ニ其ノ敷設ヲ許可スルコトヲ得

一新潟縣下新津ヨリ福島縣下若松ヲ經テ白河本宮近傍ニ至ル鐵道

一兵庫縣下姫路ヨリ生野若ハ笹山ヲ經テ京都府下舞鶴又ハ園部ニ至ル鐵道若ハ兵庫縣下土山ヨリ京都府下福知山ヲ經テ舞鶴ニ至ル鐵道線中兵庫縣下生野ヨリ和田山ヲ經テ京都府下綾部ニ至ル鐵道

一福岡縣下飯山ヨリ原田ニ至ル鐵道

政府ハ前項鐵道線路一部ノ敷設ヲ私設鐵道會社ニ許可スル場合ニ於テ本線路ノ全部ヲ敷設スルノ必要ヲ認ムルニ當リ其ノ會社ニ於テ之カ敷設ヲ爲ササルトキハ其ノ建設費實費ヲ以テ本鐵道ヲ政府ニ買収シ又ハ他ノ會社ニ賣渡サシムル爲相當ノ條件ヲ附スヘシ (三十年法律第三十四號ヲ以テ本項追加)

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル豫定鐵道線路中私設鐵道會社ニ敷設許可ノ件ニ關スル法律ヲ裁可シ  
茲ニ之ヲ公布セシム 明治二十九年四月  
法律第七十二號

明治二十五年法律第四號鐵道敷設法豫定鐵道線路中左ノ線路ハ私設鐵道會社ニ其ノ敷設ヲ許可  
スルコトヲ得

一 山梨縣下甲府ヨリ靜岡縣下岩淵ニ至ル鐵道

一 東京府下上野ヨリ千葉縣下千葉、佐倉ヲ經テ銚子ニ至ル鐵道ヨリ分岐シテ木更津ニ至ル鐵  
道線中千葉縣下曾我町ヨリ木更津ニ至ル鐵道

一 京都府下舞鶴ヨリ福井縣下小濱ヲ經テ敦賀ニ至ル鐵道

一 兵庫縣下姫路ヨリ生野若ハ笹山ヲ經テ京都府下舞鶴又ハ關部ニ至ル鐵道線中兵庫縣下姫路  
ヨリ笹山ヲ經テ京都府下關部ニ至ル鐵道

一 香川縣下多度津ヨリ愛媛縣下今治ヲ經テ松山ニ至ル鐵道

一 福岡縣下小倉ヨリ大分縣下大分、宮崎縣下宮崎ヲ經テ鹿児島縣下鹿児島ニ至ル鐵道中大分  
縣下柳ヶ浦ヨリ大分ニ至ル鐵道

○  
朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル豫定鐵道線路中私設鐵道會社ニ敷設許可ノ件ニ關スル法律ヲ裁可シ  
茲ニ之ヲ公布セシム 明治二十九年四月  
法律第七十三號

明治二十五年法律第四號鐵道敷設法豫定鐵道線路中左ノ線路ハ私設鐵道會社ニ其ノ敷設ヲ許可  
スルコトヲ得

一 宮城縣下石ノ巻ヨリ小午田ヲ經テ山形縣下船形町ニ至ル鐵道線中宮城縣下石ノ巻ヨリ同縣

下温泉村鍛冶屋澤ニ至ル鐵道

政府ハ前項ノ許可ヲ與フル場合ニ於テ本線路ノ全部ヲ敷設スルノ必要ヲ認ムルニ當リ其ノ會社  
ニ於テ之カ敷設ヲ爲ササルトキハ其ノ建設費實費ヲ以テ前項ノ鐵道ヲ政府ニ買収シ又ハ之ヲ他  
ノ會社ニ賣渡サシムル爲相當ノ條件ヲ附スヘシ

○  
朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル豫定鐵道線路中私設鐵道會社ニ敷設許可ノ件ニ關スル法律ヲ裁可シ  
茲ニ之ヲ公布セシム 明治二十九年四月  
法律第七十四號

明治二十五年法律第四號鐵道敷設法豫定鐵道線路中左ノ線路ハ私設鐵道會社ニ其ノ敷設ヲ許可  
スルコトヲ得

一 京都府下舞鶴ヨリ兵庫縣下豐岡、鳥取縣下鳥取、島根縣下松江、濱田ヲ經テ山口縣下山口近  
傍ニ至ル鐵道線中兵庫縣下和田山ヨリ湯島ニ至ル鐵道

政府ハ前項ノ許可ヲ與フル場合ニ於テ兵庫縣下和田山ヨリ鳥取縣下鳥取ニ至ル豫定鐵道線路ノ  
全部ヲ敷設スルノ必要ヲ認ムルニ當リ其會社ニ於テ之カ敷設ヲ爲ササルトキハ其建設費實費ヲ

以テ前項ノ鐵道ヲ政府ニ買収シ又ハ之ヲ他ノ會社ニ賣渡サシムル爲相當ノ條件ヲ附スヘシ

○  
朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル豫定鐵道線路中私設鐵道會社ニ私設許可ノ件 關スル法律ヲ裁可シ  
茲ニ之ヲ公布セシム 明治二十九年四月  
法律第七十五號

明治二十五年法律第四號鐵道敷設法豫定鐵道線路中左ノ線路ハ私設鐵道會社ニ其ノ敷設ヲ許可  
スルコトヲ得

一 京都府下舞鶴ヨリ兵庫縣下豐岡、鳥取縣下鳥取、高根縣下松江、濱田ヲ經テ山口縣下山口近  
傍ニ至ル鐵道線中鳥取縣下米子ヨリ鳥根縣下今市ニ至ル鐵道

政府ハ前項ノ許可ヲ與フル場合ニ於テ鳥取縣下米子ヨリ鳥根縣下濱田ニ至ル豫定鐵道線路ノ全  
部ヲ敷設スルノ必要ヲ認ムルニ當リ其會社ニ於テ之カ敷設ヲ爲サ、ルトキハ其建設費實費ヲ以  
テ前項ノ鐵道ヲ政府ニ買収シ又ハ之ヲ他ノ會社ニ賣渡サシムル爲相當ノ條件ヲ附スヘシ

○  
朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル豫定鐵道線路中私設鐵道會社ニ敷設許可ノ件ニ關スル法律ヲ裁可シ  
茲ニ之ヲ公布セシム 明治二十九年四月  
法律第七十六號

明治二十五年法律第四號鐵道敷設法豫定鐵道線路中左ノ線路ハ私設鐵道會社ニ其ノ敷設ヲ許可

スルコトヲ得

一 熊本縣下熊本ヨリ大分縣下大分ニ至ル鐵道線中熊本縣下熊本ヨリ大津ニ至ル鐵道

一同鐵道線中大分縣下大分ヨリ竹田ニ至ル鐵道

政府ハ前項ノ許可ヲ與フル場合ニ於テ該豫定鐵道線路ノ全部ノ敷設實通ヲ妨クルノ虞ナカラシ  
ムルカ爲相當ノ條件ヲ附スヘシ

○  
朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル豫定鐵道線路中私設鐵道會社ニ敷設許可ノ件ニ關スル法律ヲ裁可シ  
茲ニ之ヲ公布セシム 明治二十九年四月  
法律第七十七號

明治二十五年法律第四號鐵道敷設法豫定鐵道線路中左ノ線路ハ私設鐵道會社ニ其ノ敷設ヲ許可  
スルコトヲ得

一 香川縣下琴平ヨリ高知縣下高知ヲ經テ須崎ニ至ル鐵道線中高知縣下山田野地ヨリ須崎ニ至  
ル鐵道

一 香川縣下琴平ヨリ高知縣下高知ヲ經テ須崎ニ至ル鐵道ニ德島縣下德島ヨリ接續セル鐵道線  
中德島縣下德島ヨリ川田ニ至ル鐵道

政府ハ前項ノ許可ヲ與フル場合ニ於テ德島縣下德島ヨリ高知縣下高知ヲ經テ須崎ニ至ル聯續線  
路ノ全部ノ敷設實通ヲ妨クルノ虞ナカラシメンカ爲相當ノ條件ヲ附スヘシ

以テ前項ノ鐵道ヲ政府ニ買収シ又ハ之ヲ他ノ會社ニ賣渡サシムル爲相當ノ條件ヲ附スヘシ



朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル豫定鐵道線路中私設鐵道會社ニ私設許可ノ件ニ關スル法律ヲ裁可シ  
茲ニ之ヲ公布セシム 明治二十九年四月  
法律第七十五號

明治二十五年法律第四號鐵道敷設法豫定鐵道線路中左ノ線路ハ私設鐵道會社ニ其ノ敷設ヲ許可  
スルコトヲ得

一 京都府下舞鶴ヨリ兵庫縣下豊岡、鳥取縣下鳥取、島根縣下松江、濱田ヲ經テ山口縣下山口近  
傍ニ至ル鐵道線中鳥取縣下米子ヨリ島根縣下今市ニ至ル鐵道

政府ハ前項ノ許可ヲ與フル場合ニ於テ鳥取縣下米子ヨリ島根縣下濱田ニ至ル豫定鐵道線路ノ全  
部ヲ敷設スルノ必要ヲ認ムルニ當リ其會社ニ於テ之カ敷設ヲ爲サ、ルトキハ其建設費實費ヲ以  
テ前項ノ鐵道ヲ政府ニ買収シ又ハ之ヲ他ノ會社ニ賣渡サシムル爲相當ノ條件ヲ附スヘシ



朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル豫定鐵道線路中私設鐵道會社ニ敷設許可ノ件ニ關スル法律ヲ裁可シ  
茲ニ之ヲ公布セシム 明治二十九年四月  
法律第七十六號

明治二十五年法律第四號鐵道敷設法豫定鐵道線路中左ノ線路ハ私設鐵道會社ニ其ノ敷設ヲ許可

スルコトヲ得

一 熊本縣下熊本ヨリ大分縣下大分ニ至ル鐵道線中熊本縣下熊本ヨリ大津ニ至ル鐵道

一同鐵道線中大分縣下大分ヨリ竹田ニ至ル鐵道

政府ハ前項ノ許可ヲ與フル場合ニ於テ該豫定鐵道線路ノ全部ノ敷設貫通ヲ妨クルノ虞ナカラシ  
メンカ爲相當ノ條件ヲ附スヘシ



朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル豫定鐵道線路中私設鐵道會社ニ敷設許可ノ件ニ關スル法律ヲ裁可シ  
茲ニ之ヲ公布セシム 明治二十九年四月  
法律第七十七號

明治二十五年法律第四號鐵道敷設法豫定鐵道線路中左ノ線路ハ私設鐵道會社ニ其ノ敷設ヲ許可  
スルコトヲ得

一 香川縣下琴平ヨリ高知縣下高知ヲ經テ須崎ニ至ル鐵道線中高知縣下山田野地ヨリ須崎ニ至  
ル鐵道

一 香川縣下琴平ヨリ高知縣下高知ヲ經テ須崎ニ至ル鐵道ニ德島縣下德島ヨリ接續セル鐵道線  
中德島縣下德島ヨリ川田ニ至ル鐵道

政府ハ前項ノ許可ヲ與フル場合ニ於テ德島縣下德島ヨリ高知縣下高知ヲ經テ須崎ニ至ル聯續線  
路ノ全部ノ敷設貫通ヲ妨クルノ虞ナカラシメンカ爲相當ノ條件ヲ附スヘシ

○ 朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル豫定鐵道線路中私設鐵道會社ニ敷設許可ノ件ニ關スル法律ヲ裁可シ  
茲ニ之ヲ公布セシム 明治三十年三月  
法律第十一號

明治二十五年法律第四號鐵道敷設法豫定鐵道線路中左ノ線路ハ私設鐵道會社ニ其ノ敷設ヲ許可  
スルコトヲ得

一 廣島縣下海田市ヨリ吳ニ至ル鐵道

○

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル豫定鐵道線路中私設鐵道會社ニ敷設許可ノ件ニ關スル法律ヲ裁可シ  
茲ニ之ヲ公布セシム 明治三十年三月  
法律第三十二號

明治二十五年法律第四號鐵道敷設法豫定鐵道線路中左ノ線路ハ私設鐵道會社ニ其ノ敷設ヲ許可  
スルコトヲ得

一 岐阜縣下多治見ヨリ岐阜ニ至ル鐵道

政府ハ前項ノ許可ヲ與フル場合ニ於テ本線ト中央線ノ管理ヲ統一ニスルノ必要ヲ認ムルトキ  
ハ其ノ建設實費ヲ以テ之ヲ政府ニ買收スル爲メ相當ノ條件ヲ附スヘシ

○

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル豫定鐵道線路中私設鐵道會社ニ敷設許可ノ件ニ關スル法律ヲ裁可シ  
茲ニ之ヲ公布セシム 明治三十年三月  
法律第三十三號

明治二十五年法律第四號鐵道敷設法豫定鐵道線路中左ノ線路ハ私設鐵道會社ニ其ノ敷設ヲ許可  
スルコトヲ得

一 岐阜縣下太田ヨリ高山ヲ經テ富山縣下富山ニ至ル鐵道

一 富山縣下富山ヨリ新潟縣下直江津ニ至ル鐵道

一 新潟縣下新發田ヨリ山形縣下米澤ニ至ル鐵道線中新潟縣下新發田ヨリ中保内ニ至ル鐵道

一 巖手縣下黒澤尻若ハ花巻ヨリ秋田縣下横手ニ至ル鐵道線中巖手縣下黒澤尻ヨリ秋田縣下横  
手ニ至ル鐵道

一 兵庫縣下姫路ヨリ生野若ハ笹山ヲ經テ京都府下舞鶴又ハ國部ニ至ル鐵道若ハ兵庫縣下土山  
ヨリ京都府下福知山ヲ經テ舞鶴ニ至ル鐵道線中兵庫縣下國部ヨリ同縣下谷川ニ至ル鐵道

一 廣島縣下廣島ヨリ島根縣下濱田ニ至ル鐵道

一 福岡縣下小倉ヨリ大分縣下大分宮崎縣下宮崎ヲ經テ鹿兒島縣下鹿兒島ニ至ル鐵道線中大分  
縣下大分ヨリ宮崎縣下宮崎ニ至ル鐵道

一 福岡縣下久留米ヨリ山鹿ヲ經テ熊本縣下熊本ニ至ル鐵道線中福岡縣下久留米ヨリ山鹿ニ至  
ル鐵道



○  
 朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル豫定鐵道線路中私設鐵道會社ニ敷設許可ノ件ニ關スル法律ヲ裁可シ  
 茲ニ之ヲ公布セシム 明治三十年三月  
法律第十一號  
 明治二十五年法律第四號鐵道敷設法豫定鐵道線路中左ノ線路ハ私設鐵道會社ニ其ノ敷設ヲ許可  
 スルコトヲ得  
 一 廣島縣下海田市ヨリ吳ニ至ル鐵道

○  
 朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル豫定鐵道線路中私設鐵道會社ニ敷設許可ノ件ニ關スル法律ヲ裁可シ  
 茲ニ之ヲ公布セシム 明治三十年三月  
法律第三十二號  
 明治二十五年法律第四號鐵道敷設法豫定鐵道線路中左ノ線路ハ私設鐵道會社ニ其ノ敷設ヲ許可  
 スルコトヲ得  
 一 岐阜縣下多治見ヨリ岐阜ニ至ル鐵道

政府ハ前項ノ許可ヲ與フル場合ニ於テ本線ト中央線ノ管理ヲ統一ニスルノ必要ヲ認ムルトキ  
 ハ其ノ建設實費ヲ以テ之ヲ政府ニ買收スル爲メ相當ノ條件ヲ附スヘシ

○  
 朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル豫定鐵道線路中私設鐵道會社ニ敷設許可ノ件ニ關スル法律ヲ裁可シ  
 茲ニ之ヲ公布セシム 明治三十年三月  
法律第三十三號  
 明治二十五年法律第四號鐵道敷設法豫定鐵道線路中左ノ線路ハ私設鐵道會社ニ其ノ敷設ヲ許可  
 スルコトヲ得

- 一 岐阜縣下太田ヨリ高山ヲ經テ富山縣下富山ニ至ル鐵道
- 一 富山縣下富山ヨリ新瀉縣下直江津ニ至ル鐵道
- 一 新瀉縣下新發田ヨリ山形縣下米澤ニ至ル鐵道線中新瀉縣下新發田ヨリ中保内ニ至ル鐵道
- 一 巖手縣下黒澤尻若ハ花卷ヨリ秋田縣下横手ニ至ル鐵道線中巖手縣下黒澤尻ヨリ秋田縣下横  
手ニ至ル鐵道
- 一 兵庫縣下姫路ヨリ生野若ハ笹山ヲ經テ京都府下舞鶴又ハ關部ニ至ル鐵道若ハ兵庫縣下土山  
ヨリ京都府下福知山ヲ經テ舞鶴ニ至ル鐵道線中兵庫縣下國包ヨリ同縣下谷川ニ至ル鐵道
- 一 廣島縣下廣島ヨリ島根縣下濱田ニ至ル鐵道
- 一 福岡縣下小倉ヨリ大分縣下大分宮崎縣下宮崎ヲ經テ鹿兒島縣下鹿兒島ニ至ル鐵道線中大分  
縣下大分ヨリ宮崎縣下宮崎ニ至ル鐵道
- 一 福岡縣下久留米ヨリ山鹿ヲ經テ熊本縣下熊本ニ至ル鐵道線中福岡縣下久留米ヨリ山鹿ニ至  
ル鐵道

三十年法律第  
一號ヲ以テ八  
年三月九月  
ノトス

○北海道鐵道敷設法明治二十九年五月  
法律第九十三號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル北海道鐵道敷設法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

北海道鐵道敷設法

第一條 政府ハ北海道ニ必要ナル鐵道ヲ完成スル爲漸次豫定ノ線路ヲ調査シ及敷設ス

第二條 北海道豫定鐵道線路ハ左ノ如シ

一 石狩國旭川ヨリ十勝國十勝太及釧路國厚岸ヲ經テ北見國網走ニ至ル鐵道

一 十勝國利別ヨリ北見國相ノ内ニ釧路國厚岸ヨリ根室國根室ニ至ル鐵道

一 石狩國旭川ヨリ北見國宗谷ニ至ル鐵道

一 石狩國雨龍原野ヨリ天鹽國増毛ニ至ル鐵道

一 天鹽國奈與呂ヨリ北見國網走ニ至ル鐵道

一 後志國小樽ヨリ渡島國函館ニ至ル鐵道

第三條 北海道鐵道工事ハ實地ノ緩急ニ應ジ各線ヲ敷區ニ分チ每區ノ工事ヲ繼續事業トス

第四條 北海道鐵道事業ニ要スル費用ハ公債ヲ募集シテ之ニ充ツ

第五條 北海道鐵道公債ノ利子ハ一箇年百分ノ五以下トス

第六條 北海道鐵道公債ニ關シ本法ニ規定ナキモノハ總テ明治十九年勅令第六十六號整理公債條例

ニ依ル

第七條 北海道鐵道敷設ノ費用ニ充ツル爲金三千三百萬圓ヲ限リ明治三十年度ヨリ工事ノ緩急ト財

政ノ都合ヲ圖リ漸次公債ヲ募集ス

第八條 政府ハ鐵道線路ヲ實測シ每區ノ工費豫算ヲ定メ帝國議會ノ協贊ヲ求ムヘシ

第九條 明治二十五年法律第四號鐵道敷設法第十四條第十五條ハ本法ニ適用ス

○北海道鐵道豫定線路中私設鐵道會社ニ敷設ヲ許サス明治三十年三月  
法律第三十五號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル北海道鐵道豫定線路中私設鐵道會社ニ敷設許可ノ件ニ關スル法律ヲ  
裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治二十九年法律第九十三號北海道鐵道敷設法豫定鐵道線路中左ノ線路ハ私設鐵道會社ニ其ノ  
敷設ヲ許可スルコトヲ得

一 後志國小樽ヨリ渡島國函館ニ至ル鐵道

○鐵道營業法明治三十三年三月  
法律第六十五號

沿革略記 明治五年二月廿六十一號布告ヲ以テ鐵道者則テ制定ス○同年五月廿四十六號布告ヲ以テ前令ヲ改正ス●三十三  
年三月法律第六十五號ヲ以テ鐵道營業法ヲ制定シ鐵道略則鐵道犯罪刑例等ヲ廢止ス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル鐵道營業法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

鐵道營業法

第一章 鐵道ノ設備及運送

第一條 鐵道ノ建設、車輛器具ノ構造及運轉ハ命令ヲ以テ定ムル規程ニ依ルヘシ  
第二條 本法其ノ他特別ノ法令ニ規定スルモノ、外鐵道運送ニ關スル特別ノ事項ハ鐵道運輸規程ノ定ムル所ニ依ル

鐵道運輸規程ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第三條 運賃ノ増加及運送取扱條件ノ變更ハ關係停車場ニ二週間以上公告シタル後ニ非サレハ之ヲ實施スルコトヲ得ス

第四條 傳染病患者ハ主務大臣ノ定ムル規程ニ依ルニ非サレハ乗車セシムルコトヲ得ス  
附添人ナキ重病者ノ乗車ハ之ヲ拒絕スルコトヲ得

第五條 火藥其ノ他爆發質危險品ハ鐵道カ其ノ運送取扱ノ公告ヲ爲シタル場合ノ外其ノ運送ヲ拒絕スルコトヲ得

第六條 鐵道ハ左ノ事項ノ具備シタル場合ニ於テハ貨物ノ運送ヲ拒絕スルコトヲ得ス

- 一 荷送人カ法令其ノ他鐵道運送ニ關スル規定ヲ遵守スルトキ
- 二 貨物ノ運送ニ付特別ナル責務ノ條件ヲ荷送人ヨリ求メサルトキ
- 三 運送カ法令ノ規定又ハ公ノ秩序若ハ善良ノ風俗ニ反セサルトキ
- 四 貨物カ成規ニ依リ其ノ線路ニ於ケル運送ニ適スルトキ

五 天災事變其ノ他已ムヲ得サル事由ニ基因シタル運送上ノ支障ナキトキ

前項ノ規定ハ旅客運送ニ之ヲ準用ス

第七條 運送ニ付特別ノ設備ヲ要スル貨物ニ關シテハ鐵道ハ其ノ設備アル場合ニ限り之ヲ引受クルノ義務ヲ負フ

第八條 鐵道ハ直ニ運送ヲ爲シ得ヘキ場合ニ限り貨物ヲ受取ルヘキ義務ヲ負フ

第九條 貨物ハ運送ノ爲受取リタル順序ニ依リ之ヲ運送スルコトヲ要ス但シ運輸上正當ノ事由若ハ公益上ノ必要アルトキハ此ノ限ニ在ラス

第十條 鐵道ハ貨物ノ種類及性質ヲ明告スヘキコトヲ荷送人ニ求ムルコトヲ得若シ其ノ種類及性質ニ付疑アルトキハ荷送人ノ立會ヲ以テ之ヲ點檢スルコトヲ得

點檢ニ因リ貨物ノ種類及性質カ荷送人ノ明告シタル所ト異ナラサル場合ニ限り鐵道ハ點檢ニ關スル費用ヲ負擔シ且之カ爲生シタル損害ヲ賠償スルノ責ニ任ス

前二項ノ規定ハ火藥其ノ他爆發質危險品ヲ成規ニ反シ手荷物中ニ收納シタル疑アル場合ニ之ヲ準用ス

第十一條 貨幣、有價證券其ノ他ノ高價品ニ付テハ荷送人カ運送委託ノ際其ノ物品ノ種類、性質及價格ヲ明告シ且増賃金ヲ支拂ヒタル場合ノ外鐵道ハ損害賠償ノ責ニ任セス但シ鐵道カ増賃金ノ支拂ヲ請求セサルニ因リ荷送人ニ於テ其ノ支拂ヲ爲サ、ルトキハ此ノ限ニ在ラス  
前項増賃金ノ割合ハ鐵道運輸規程ノ定ムル所ニ依ル

第十二條 牛馬其ノ他ノ獸類ニ付テハ荷送人ガ運送委託ノ際價格ヲ明告セサルトキ又ハ明告スルモ鐵道運輸規程ニヨリ鐵道ノ請求スル増賃金ヲ支拂ハサルトキハ其ノ損害ニ付鐵道ハ鐵道運輸規程ニ定ムル最高金額迄ヲ限リ賠償ノ責ニ任ス

前項賠償金額ノ制限ハ惡意又ハ重大ナル過失ニ因リ損害ヲ生シタル場合ニハ之ヲ適用セス

第十三條 惡意又ハ重大ナル過失ニ因ラサル手荷物ノ滅失、毀損ニ付テハ鐵道ハ鐵道運輸規程ニ定ムル最高金額迄ヲ限リ損害賠償ノ責ニ任ス

第十四條 運賃償還ノ債權ハ一年間之ヲ行ハサルトキハ時効ニ因リテ消滅ス

第十五條 旅客ハ營業上別段ノ定アル場合ノ外運賃ヲ支拂ヒ乗車券ヲ受クルニ非サレハ乗車スルトコトヲ得ス

乗車券ヲ有スル者ハ列車中座席ノ存在スル場合ニ限リ乗車スルコトヲ得

第十六條 旅客カ乗車前旅行ヲ止メタルトキハ鐵道運輸規程ノ定ムル所ニ依リ運賃ノ拂戻ヲ請求スルコトヲ得

乗車後旅行ヲ中止シタルトキハ運賃ノ拂戻ヲ請求スルコトヲ得ス

第十七條 天災事變其ノ他已ムヲ得サル事由ニ因リ運送ニ著手シ又ハ之ヲ繼續スルコト能ハサルニ至リタルトキハ旅客及荷送人ハ契約ノ解除ヲ爲スコトヲ得此ノ場合ニ於テ鐵道ハ既ニ爲シタル運送ノ割合ニ應ジ運賃其ノ他ノ費用ヲ請求スルコトヲ得

第十八條 旅客ハ鐵道係員ノ請求アリタルトキハ何時ニテモ乗車券ヲ呈示シ検査ヲ受クヘシ

有效ノ乗車券ヲ所持セス又ハ乗車券ノ検査ヲ拒ミ又ハ取集ノ際之ヲ渡ササル者ハ鐵道運輸規程ノ定ムル所ニ依リ罰増賃金ヲ支拂フヘシ

前項ノ場合ニ於テ乗車停車場不明ナルトキハ其ノ列車ノ出發停車場ヨリ運賃ヲ計算ス

第二章 鐵道係員

第十九條 鐵道係員ノ職制ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第二十條 私設鐵道ハ鐵道係員ノ服務規程ヲ定メ主務大臣ノ認可ヲ受クルコトヲ要ス

第二十一條 主務大臣ハ鐵道係員タルニ要スル資格ヲ定ムルコトヲ得

第二十二條 旅客及公衆ニ對スル職務ヲ行フ鐵道係員ハ一定ノ制服ヲ著スヘシ

第二十三條 私設鐵道係員ハ職務上ノ義務ニ違背シ若ハ職務ヲ怠リ又ハ失行アリタルトキハ懲戒ヲ受ク

會社ハ懲戒ニ關スル規程ヲ定メ主務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

懲戒ヲ爲スヘキ場合ニ於テ會社之ヲ爲ササルトキハ主務大臣ニ於テ懲戒ヲ爲スコトヲ得

第二十四條 鐵道係員職務取扱中旅客若ハ公衆ニ對シ失行アリタルトキハ二十五圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十五條 鐵道係員職務上ノ義務ニ違背シ又ハ職務ヲ怠リ旅客若ハ公衆ニ危害ヲ醸スノ虞アル所爲アリタルトキハ五百圓以下ノ罰金又ハ三月以下ノ重禁錮ニ處ス

第二十六條 鐵道係員旅客ヲ強ヒテ定員ヲ超エ車中ニ乗込マシメタルトキハ二十圓以下ノ罰金ニ處ス